

研 究 紀 要

第 24 号

2016

公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

私どもの組織は、昭和56年4月の設立以来、各種公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査・整理報告・普及業務を実施してまいりました。おかげさまで今年度は、県民の皆様にご埋蔵文化財センターが長年蓄積してきた成果を広く活用していただくことを目的に、常設展示室を開設する運びとなりました。

埋蔵文化財業務を遅滞なく進め、その成果を県民の皆様にごさまざまな形で還元していくには、職員の日頃からの調査研究への取組が欠かせません。本号では、多忙な調査業務や普及啓発事業を実施しながら、縄文時代から中世にいたる研究論考7本を取めることができました。

これらが、地域史研究や学校教育・生涯学習の基礎資料として、これまで刊行してきました発掘調査報告書と同様に、広く活用されることを期待します。

最後に、本書の刊行にあたり、日頃よりご指導、ご協力をいただいております関係機関並びに関係各位に厚くお礼申し上げます

平成28年3月

公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

所長 増山寿生

研究紀要 第24号 目次

- 足利市神畑遺跡出土の石剣について…………… 芹澤清八・後藤信祐 (1)
- 那珂川流域の加曾利E I式初現期の地域差…………… 塚本師也 (9)
- 東日本前期古墳埋葬施設の基礎的検討(集成編)…………… 石橋 宏 (31)
- 栃木市都賀町愛宕塚古墳の低位置突帯…………… 岡山亮子・曾我真美子 (61)
- 四十八塚古墳群に埋葬された被葬者を考察する
—遺物・遺構及び人類学的な視点—…………… 谷畑美帆・中村享史・内山敏行 (81)
- 下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡についての覚書
—百済王俊哲との関係検討を中心に—…………… 池田敏宏 (99)
- 中世初期における経塚出土短刀の分類と変遷
—関東地方とその周辺の資料を対象として—…………… 大竹弘高 (109)

足利市神畑遺跡出土の石剣について

せり　　がわ　　せい　　はち　　ご　　とう　　しん　　すけ
芹　　澤　　清　　八　　後　　藤　　信　　祐

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 石剣の観察 |
| 2 神畑遺跡について | 5 栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣 |
| 3 石剣出土の第 21 号住居跡の概要 | 6 まとめ |

平成 23 年度刊行の発掘調査報告書に掲載できなかった神畑遺跡の緑泥片岩製の石剣を紹介し、栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣を概観した。神畑遺跡の石剣は晩期前葉の惣穴住居跡から出土しており、表裏に片理面、剥離面を大きく残す短冊形の完形品で、晩期前半に産出地である埼玉県北部を中心に分布する粗製石剣の外縁の資料と考えられる。

また、緑泥片岩製の大型石棒は、中期後半から後期前半に県内各地で出土しており、中期後半から後期初頃には石剣状の小形石棒、後期前葉には無頭の小形石棒が併存している。晩期前半の緑泥片岩製の石剣は精製・粗製の二者があり、精製石剣は数が少ないが県北まで分布するもの、粗製石剣は県南までである。そして晩期中葉には緑泥片岩製の石剣は姿を消し、粘板岩を素材とした石剣に移行する。

1 はじめに

今回ここに紹介する石剣の資料は、本来であるならば既に刊行済みの『神畑遺跡発掘調査報告書』（芹澤 2012）に掲載すべきであったが、調査段階から住居跡内出土として重要に扱い過ぎたことが逆に資料の紛失を招いてしまった。そのため、報告書に掲載されることなく長らく所在不明であったが、埋蔵文化財センター収蔵庫の再整理が実施されたことにより、報告書発刊から 4 年をおいて再び調査担当者の手に戻ることとなった。

調査担当者として、考古学上極めて重要な資料を紛失するという理由で報告書に記載できなかったことは、非常に恥ずかしく非難されるべき問題である。さらに、発掘調査及び整理・報告書作成費用の提供をいただいた東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、また県内の出土資料を保管・管理する立場にある栃木県教育委員会に対しても、誠に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

資料は石材に緑泥片岩を用いた石剣であり、尚且つ出土土器から構築時期が明確な住居跡出土である点は極めて重要である。改めてここに頁をいただき、報告するものである。

2 神畑遺跡について

足利市菅田町地内に所在する神畑遺跡の詳細については、既に発刊されている栃木県埋蔵文化財調査報告第 352 集『神畑遺跡－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 XX III－』（芹澤 2012）を参照されることをお願いするが、ここでは神畑遺跡の縄文時代にかかわる遺跡の特徴を簡単に解説し、報告する石剣が出土した住居跡や共存関係にある出土遺物等について簡便に記載することとする。

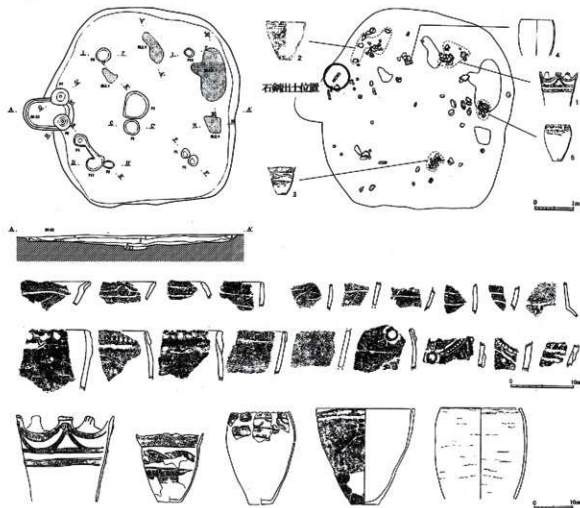
調査の原因は既に述べているとおり、北関東自動車道建設に伴って平成 16(2004)年 4 月から 12 月までの 9 ヶ

月間行われ、報告書はその7年後の平成23年度に作成した。遺跡は隣接する古墳時代の小区画水田跡が発見された菅田西根遺跡と同一面にあることから、一部にロームが存在するものの低地に営まれていると言える。なお、低地との関連として、遺跡内には縄文時代後期以前に存在した旧河道が発見されている。この河道内からは「ケズリ」や「ホソ穴」などが施された住居跡構築材が出土しており、その放射性炭素年代（暦年校正）も縄文時代後期中葉から晩期前葉の年代を示している。

調査区内より発見された縄文時代にかかわる遺構は、堅穴住居跡及び土坑が各々3基と僅少であったが、これらが位置する地域では遺物を多量に含む包含層が発達している。包含層からは、遺構内出土を含め34,652点（土器13,587点、石器21,065点）におよぶ遺物の出土があり、土器は後期後半から晩期前半のものにほぼ限定される。石器は出土点数の約95%がチップ・フレイク及び礫であるが、所謂 tool として認定したものも1,135点出土している。中でも石鏃とその未製品や欠損品が553点あり、石核に利用されたチャートの亜角礫も216点出土している。縄文時代晩期になると、石鏃の大量出土が各地の遺跡で目につくが、神畑遺跡においても同様な状況が窺える。

3 石剣出土の第21号住居跡について

ここでは、石剣が出土し第21号住居跡について、住居跡の位置や形状、また出土遺物やその状況について概略を述べることにする。



第1図 神畑遺跡第21号住居跡と出土土器（報告書より）

神畑遺跡の調査区内には南北に掘り込まれた水路が2本存在し、これによって区分された調査区を東から便宜的に第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区と呼称している。これらの中において石剣が出土した第21号住居跡は、縄文時代の包含層が広がり、さらに同時代の住居跡や土坑のすべてが発見された第Ⅱ区内にある。本住居跡周辺には後期後半の第9号住居跡や第22号土坑が隣接し、これらを取り囲むように、住居構築材が出土した旧河道が鉤の手状に北から南方向へと回り込む。住居跡形状は、長短軸4.3m×4.2mを測る隅丸方形で、西壁中央にある第23号土坑としたものは出入口に伴う施設であろう。床面上の4箇所には焼土の分布がみられ、最大は1.1m×0.6mの広がりを示す。柱穴の一部からは炭化材が出土しており、焼土の存在と共に焼失家屋であったことを意味する。

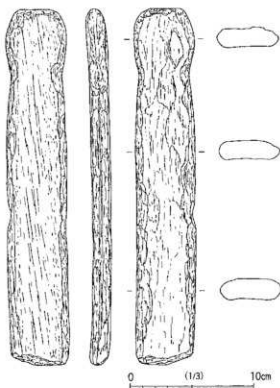
出土遺物は総計2,683点と多量である。土器の出土総数は1,547点で、有文149点(9.6%)、無文1,398点(90.4%)に分別される。文様構成が理解可能なものは意外に少なく、ここでは図示した3点の他に無文の深鉢2点、そして特徴的な文様を示す土器片19点を掲載した。石器の出土点数は1,136点と多量で、中でも尖頭器を含む石鏃及びその未成品や欠損品が57点、石核20点の出土は包含層内出土石器の内容と一致する。これ以外にも播・削器、石錐、打製・磨製石斧、磨石・凹石、砥石、垂飾品等が37点ある。さらに土版1点、耳栓2点そして中央が穿孔される筒形土製品3点があり、極めて多種多様な物持ちの住居跡であると指摘できる。さらに、これらに今回紹介する石剣が加わるのであるから、その状況は特異とも言えよう。

さて、石剣についてであるが、その出土位置は第1図で示した西壁中央部の出入口北側の壁際である。その出土状況は報告書写真図版12より見て取れるが、柄頭がほぼ床面に接し、剣先が幾分浮いた状態にある。周辺における壁際からの遺物出土状態を観察すると、やはり石剣と同様に住居跡壁際に堆積する第一次埋没土の出土を示しており、これは紛れもなく安行Ⅲb式期の住居跡中央部出土石器群と時間的同一を示している。

4 石剣の観察

石剣は大形礫を分割して獲得したと思われる板状の緑泥片岩を素材としている。片面は分割時の剥離面でやや脆いが、もう一方は片理面を残し硬く、若干凹面となり石の目の方向が観察できる。両端を折った短冊形の素材の周縁を剥離調整し、その後研磨によりエッジを丸く仕上げている。上端から5cm下の両側縁には幅4cm、深さ0.5cmの浅い抉り施して柄部を作出し、頭部と刃部を不明瞭ながら分離している。頭部と刃部の幅も厚さもほぼ同じで短冊形を呈しており、断面は扁平な丸みのある六角形を呈する。長さ28.1cm、幅4.7cm、厚さ1.7cmで、重さ407gである。色調はやや明るい緑灰色で銀色に輝いている。

本資料は、同じ縄文晩期に存在する研磨により把頭部と刃部を明瞭に作り出す精製石剣と異なり、表裏面に片理面・剥離面を大きく残していることから未成品とも考えられる。しかし、粗雑ながら周縁を加工し、抉りにより把部の作出が窺えることから、もうひとつ



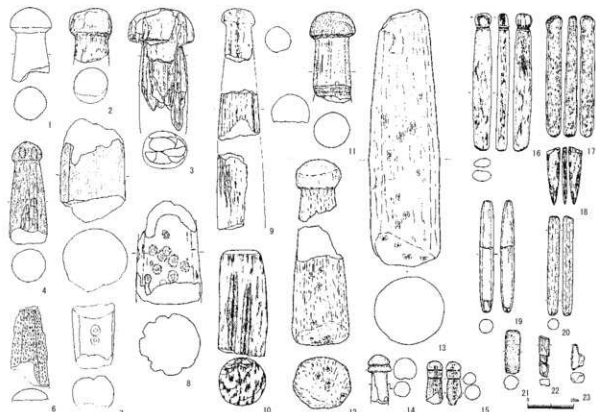
第2図 神畑遺跡の石剣実測図

のタイプの粗製の石剣として捉えることも可能である。

5 栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣

栃木県内で出土している緑泥片岩製の石棒類には、縄文中期から後期前半の大形石棒と晩期前半の石剣に大きく分けられる。大形石棒は、大田原市片府田富士山遺跡（水野 2012）で阿玉台Ⅳ式期の土坑 SK02 で安山岩製のものが出土しており、中期中葉には出現していたと思われる。緑泥片岩製の大形石棒（第3図）については、中期後半から後期前半に多く、那須塩原市槻沢遺跡 SK-154（5、加曾利 E I 式）、芳賀町赤坂道上北遺跡 SK-192（1、加曾利 E III 式）、小山市寺野東遺跡 SK546（11、加曾利 E III 式）、茂木町松の木遺跡 B3 号住居跡（9、加曾利 E IV 式）、B325 土坑（10、堀之内 1 式）、宇都宮市御城田遺跡 SI-70（3、堀之内 1 式）、那須烏山市小鍋前遺跡 SX-01（堀之内 1 式）、鹿沼市明神前遺跡谷部土坑（後期）、芳賀町上り戸遺跡 SI1210（8、加曾利 B1 式）などで堅穴住居跡や土坑から出土している。遺構には伴わないものの茂木町塚平遺跡（4）、宇都宮市古宿遺跡（2）、那須塩原市槻沢遺跡、日光市仲内遺跡（6）などでも出土しており、県内の中期後半から後期前半の各遺跡から一定量出土している。

これらは被熱し破損しているものも少なくなく、御城田遺跡のものは焼け爛れている（芹澤 1986）。上り戸遺跡のものは、多数の凹痕が認められる大形石棒の端部（江原 2005）で、寺野東遺跡谷部（13）や小鍋前遺跡（7）などでも緑泥片岩製の同様の石棒が出土している。完存品は鹿沼市明神前遺跡で後期の谷部土坑から出土した長さ 65 cm の両頭石棒が唯一である（水岡 2002）。これらは出土状況も含め、大形石棒の完存



1 赤坂道上北遺跡 2 古宿遺跡 3 御城田遺跡 4 塚平遺跡 5 槻沢遺跡 6 仲内遺跡 7 小鍋前遺跡 8 上り戸遺跡
9・10・16~18 松の木遺跡 11~13・19 寺野東遺跡 14 藤岡神社遺跡 15 御聖前遺跡 20 八剣遺跡 21~23 槻沢遺跡

第3図 栃木県内の緑泥片岩製の石棒・石剣（縄文中期～後期前半）

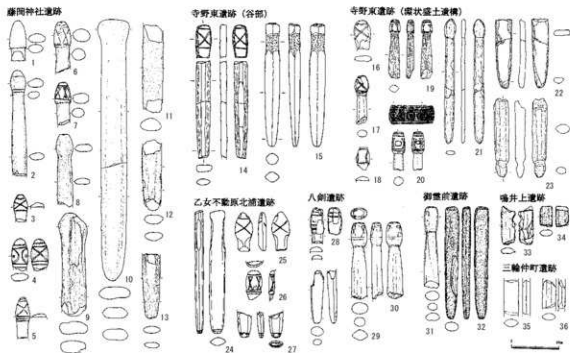
品と破損品の儀礼のあり方を考えるうえで興味深い資料である。

形状については破損品が多く明確ではないが、頭部は赤坂道上北遺跡・寺野東遺跡・御城田遺跡など半球形のものが多く、頭部がやや未発達のものも若干存在する。このほか中形石棒も存在し、二重笠形の頭部が栃木市藤岡神社遺跡(14)で出土しているほか、益子町御堂前遺跡(15)でも中期後葉の住居域から同類の頭部が出土している。

一方、中期後半から後期前葉には緑泥片岩製の小形石棒、石剣が一定量出土している(第3図)。粘板岩製の石材は異なるが、宇都宮市長坂天王寺遺跡の中期中葉阿玉台IV式のSK04で出土している小形石棒の破片が現段階では最も古い(湯原 2001)。緑泥片岩製のものは、茂木町松の木遺跡B28号住居跡(16、加曾利EⅡ式)・B279号土坑(17、称名寺式)から、断面が楕円形を呈し溝状の切り込みや側縁をわずかに抉り頭部を作出している長さ25～30cmの完存品が出土している。中期後半と思われる同型の石棒は、石材は異なるが宇都宮市台耕上遺跡、高根沢町上の原遺跡でも出土している。また、松の木遺跡B16号住居跡(18、称名寺式)では先端が尖る石剣破片と凝灰岩製の大形石棒が伴出している。槻沢遺跡でも加曾利EⅣ式期の竪穴住居跡SI-28・31・68から各1点(21～23)小形石棒の破片が出土しており、SI-31では安山岩製の大形石棒と出土している。なお、詳細は明らかではないが、南部須町曲畑遺跡や宇都宮市板戸不動山遺跡の発掘調査でも小形石棒類が出土している。

一方、後期前葉には断面円形の無頭小形石棒が存在する。寺野東遺跡(19)では堀之内式期の竪穴住居跡SI121から出土しており、同型の完存品は壬生町八剣遺跡(20)でも出土している。また、石材が異なるが、塚平遺跡SI-04(頁岩、堀之内1式)、御城田遺跡(輝緑凝灰岩)、古宿遺跡(粘板岩)でも出土している。

このように、栃木県では中期後半から後期前半に半球形の頭部を主とした緑泥片岩製の大形石棒と小形石棒類が併存していたと思われ、県内各地から一定量出土している。小形石棒類は、中期後半から後期初頭のものと同後期前葉のものでは形相が異なる。前者は県東部に多く、浅い抉りなどで頭部を作出し、身の断面が



第4図 栃木県内の緑泥片岩製石剣(縄文時代晩期)

楕円状で刃部が不明瞭な石剣状の小形石棒であるのに対し、後者は身の断面が円形で無頭の小形石棒である。

晩期の緑泥片岩製の石剣は、県南部の栃木市藤岡神社遺跡・小山市乙女不動原北浦遺跡、寺野東遺跡・壬生町八剣遺跡など晩期前葉の時期を中心とした遺跡から多く出土している（第4図）。研磨の行き届いた精製石剣と、剥離面や敲打痕を残し研磨の不十分な粗製の石剣がある。精製石剣は、柄頭部に刻線で文様が施されているものが多く、上下2条の沈線を巡らすもの（2・28）、×文を施すもの（3・5・14・16・17・25）、×文の間隔が狭くなり対向三叉文（6・7）や1字文の祖型的なもの（19・20・26・30）などの文様が施されている。刃部は両側縁に明瞭な稜を持つレンズ状のものが少なくない。また、乙女不動原北浦遺跡2号土壇墓（24）から、刃部先端に一条の沈線が巡る石剣が北西壁に沿って出土している（三沢1982）。柄頭部が折損した後、破損部を敲打整形し、刃部上方に敲打で浅い抉りを施し、柄部を作り出している。同様の石剣は寺野東遺跡谷部（15）からも出土している。

一方、粗製ないしは未成品と思われる石剣の出土例は、管見では藤岡神社遺跡（8～13）、寺野東遺跡（21～23）の県南の2遺跡のみである。柄頭は若干幅広としたもの、扁平な蛇頭形のものなどがあり、刃部との厚さはほぼ同じで、頭部と刃部の境界は不明瞭なものが多い。

県北東部では、那須烏山町鳴井上遺跡（33・34）・那珂川町三輪仲町遺跡（35・36）などで断面レンズ状の刃部破片が数点出土して程度で、福島県境に近い日光市川戸釜八幡遺跡では粘板岩製の石剣がほとんどで、緑泥片岩製の石剣は検出されていない。益子町御壺前遺跡でも、晩期中葉のSI-09から未成品を含むたくさんの粘板岩製の石剣が出土しているが、緑泥片岩の石剣は折損部を敲打整形したものが1点（32）出土しているのみである。断面は楕円形で、刃部先端には2か所の刻みが認められる。なお、刃部先端に刻みを持つ緑泥片岩製の石剣は、高根沢町東谷津遺跡（塩谷郷土資料館所蔵）でも出土している。

このように晩期の緑泥片岩製の石剣は、県南部を中心に濃密に分布しており、藤岡神社遺跡や寺野東遺跡では粗製石剣も一定量認められる。しかし、県北東部では粘板岩製の石剣が主体で、緑泥片岩製の石剣は精製の破片が一遺跡数点出土する程度で、粗製品はほとんど確認されていない。

これらの緑泥片岩製の石剣は、安行3b式期を中心とした晩期前半のものが多く、精製品は柄頭部の文様が上下2条の沈線→上下沈線間に×文→上下沈線間に対向三叉文→1字文の変遷が予想され、柄頭部の形態も上端が丸く下端が柄部へ滑らかに移行する蛇頭形から、先端に平坦面を作り下端と柄部の境界が明瞭な形態のものに移行する傾向が窺える。

6 まとめ

足利市神畑遺跡で報告書に掲載できなかった堅穴住居跡から出土した緑泥片岩製の石剣について、本県では数少ない完存の短冊状の粗製石剣であること、出土遺構が明らかで晩期前葉（安行3b式）に時期比定できる貴重な資料であることから紹介し、併せて、県内の緑泥片岩製の石棒、石剣について概観してみた。

神畑遺跡の石剣は素材の片理面、剥離面を大きく残し、丁寧な敲打整形や研磨が認められないことから未成品とも考えられるが、粗雑ながら周縁を加工し、抉りにより把部の作出が窺えることから、粗製の石剣として捉えてみた。緑泥片岩の産地は荒川中流域の三波川変成帯、埼玉県北部周辺であり、素材の剥離面や敲打痕を残す緑泥片岩製の粗製石剣は、緑泥片岩の石棒・石剣製作跡として著名な埼玉県深谷市（旧岡部町）原ヶ谷戸遺跡をはじめ、桶川市高井東遺跡など埼玉県を中心とした西関東の遺跡から出土している。このような出土状況から栗島義明は「多くの緑泥片岩製の石棒は原ヶ谷戸遺跡から素材や未成品のままの状態で大宮台地の諸遺跡に持ち込まれたことは間違いなく、その後遺跡を単位として製品へと仕上げられてゆくの

通例で、完成品での流通が支配的ではなかった」と推察している（栗島 2012）。

神畑遺跡は栃木県の南西端の足利市に位置し、原ヶ谷戸遺跡からは利根川、渡良瀬川を挟むが 30km ほどの距離にあり、県内では石材の原産地に最も近い遺跡の一つである。このような粗製石剣は精製石剣とともに栃木県では栃木市藤岡神社遺跡、小山市寺野東遺跡などで出土していることから、近隣水系の拠点集落までは精製と粗製の二者流通しており、そこからさらに周辺集落へ再分配されたものと思われる。それ以来、以北については、精製石剣がわずかに流通していたものの、粗製石剣は流通しなかったようである。神畑遺跡の緑泥片岩の石剣については、製作遺跡の周辺にのみ流通した粗製の石剣と考えられる。

また、県内の緑泥片岩製の石棒・石剣については、中期後半から後期前半には県内各地で緑泥片岩製の大型石棒が出土しており、さらに県東部を中心に中期後葉から後期初頭に石剣状の小形石棒が、後期前葉には県央から県南で無頭の断面円形の小形石棒が分布していることが明らかとなった。しかし、緑泥片岩のほかにも、大型石棒は安山岩や凝灰岩・砂岩、小形石棒は粘板岩製のものがあり、型式と石材の関係について明確にできなかった。

一方、晩期前半の緑泥片岩製の精製石剣は、柄頭部に施される文様は×文・対向三叉文にほぼ限定される。県内ではほかに晩期中葉に東部を中心に粘板岩製の石剣が流通する。柄頭は上端に平坦面を持つ樽形で、沈線が段状になるものなどがあり、緑泥片岩製のものに比べ柄部との境界が明瞭になる。また、刃部断面は凸レンズ状、四平面が形成され菱形のものなど刃部が明瞭なものも多く、数は少ないが刃部が一個縁を走る刀状のものもみられる。柄頭部に施される文様は、対向三叉文から発展した細い沈線の I 字文がほとんどで、刃部下方にも I 字文や回字文が施され、先端には小さな突起状の瘤がつくものもある。時期は概ね晩期中葉大洞 C1 ～ C2 式頃で、緑泥片岩製の石剣より若干新しい。石剣類が 132 点出土している藤岡神社遺跡では、このような石剣は皆無であり、県南西部で粘板岩製の石剣の出土は少ないことから、見かけ上は県南西部では緑泥片岩製の石剣、県東部が粘板岩製の石剣と地域性ととらえることも可能である。しかし、時間差が存在することから、埼玉県北西部の緑泥片岩製の石剣から栃木県東部の八溝山地区から茨城県北部の常陸斐成郡の粘板岩製の石剣に製作・流通が移行したととらえた方が妥当であろう。両産地の中間に位置する栃木県では、後期後葉から続く県南西部の多くの遺跡が晩期前葉を全盛として晩期中葉で終焉を迎えるのに対し、県北東部の遺跡の多くが晩期中葉を全盛に晩期後葉まで継続する遺跡が多いことも一因と考えられよう。また、土器も概ね前者の安行系から後者の大洞系に移行しており、興味深い。

参考文献

- 青木健二 1981『芳賀高根沢工業団地内上ノ原遺跡発掘調査報告書』栃木県企業局
- 上野修一 1998『山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 216 集、栃木県教育委員会・小山市教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 江原 英 1997『寺野東遺跡』V、栃木県埋蔵文化財調査報告第 200 集、栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 江原 英 1998『寺野東遺跡』IV、栃木県埋蔵文化財調査報告第 208 集、栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 江原 英 2001『寺野東遺跡』III、栃木県埋蔵文化財調査報告第 250 集、栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 江原 英 2005『上り戸遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 281 集、栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団
- 栗島義明 2012『緑泥片岩製石棒に見る受給システム—縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通—』『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 6 号、埼玉県立史跡の博物館

- 片根義幸 2011『川戸釜八桶遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第338集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 合田恵美子 2000『御堂前遺跡』Ⅰ、栃木県埋蔵文化財調査報告第236集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1994『塚平遺跡』Ⅰ、栃木県埋蔵文化財調査報告第144集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1996『槻沢遺跡』Ⅲ、栃木県埋蔵文化財調査報告第171集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2001『御堂前遺跡』Ⅱ、栃木県埋蔵文化財調査報告第68集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2003「刀剣形石製品の起源と系譜—縄文時代前期～後期前半の刀剣形石製品—」『富山大学考古学研究室論集 展覧』秋山進午先生古稀記念論集刊行会
- 鈴木素行 2015「緑泥片岩の石剣—関東地方西部における石剣の成立と展開—」『考古学集刊』第11号
- 芹澤清八 1985～1987『御城田』(写真図版編、遺構・遺物実測図編、本文編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第68集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 1994『古宮遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第142集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 2012『神畑遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第382集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 塚原孝一 1994『三輪仲町遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第143集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塚原孝一 2004『赤坂道上北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第281集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塚原孝一 2008『小鍋前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第313集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塚本師也 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第281集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 手塚達弥 2001『藤岡神社遺跡』(本文編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第197集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 手塚達弥 1999『藤岡神社遺跡』(遺物編)、栃木県埋蔵文化財調査報告第197集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 中村信博 2006『松の木遺跡』Ⅱ、本田技研工業株式会社・松の木遺跡調査団
- 永岡弘章 2002『明神前遺跡—発掘調査概要報告書—』鹿沼市埋蔵文化財報告書第14冊、鹿沼市教育委員会
- 三沢正善 1982『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第11集、小山市教育委員会
- 水野順敏・新井 潔 2012『片府田富士山遺跡』大田原市埋蔵文化財調査報告第1集、大田原市教育委員会
- 村田章人 1993『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 湯原勝美 2001『長坂天王寺遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第45集、宇都宮市教育委員会

那珂川流域の加曽利E I 式初源期の地域差

塚本 師也

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 はじめに | 5 年代の把握 |
| 2 研究の動機 | 6 土器様相の把握 |
| 3 対象とする地域 | 7 結論 |
| 4 分析方法 | |

那珂川流域の加曽利E I 式古段階を取り上げ、上・中・下流域を相互に比較して地域差の把握を試みた。上流域に当たる那須野が原周辺では、浄法寺類型が主体を占め、火炎系土器、在地の大本8 a 式土器のほか、東・西関東の文様要素を取り入れた在地の土器が存在することを確認した。中流域に当たる八溝山地鷺子・鶏足山境周辺では、狭い無文帯下に背の高い背割り隆帯を巡らし、頸部に横位沈線を多段・幅広に巡らす在地の大本8 a 式土器や比較的幅太の貼付隆帯による波状文等を配す寸胴なキャリパー形深鉢を中心に、口縁に2条隆帯を巡らし、以下を地文のみとする大本8 a 式土器等が伴うことが予想された。下流域では、細い貼付隆帯による波状文、渦巻文等を施す背の高いスマートなキャリパー形深鉢が主体を占め、中流域にみられた比較的幅太い貼付隆帯による波状文を配す土器や各種大本8 a 式土器が伴うことが確認できた。また各地域とも下総台地型の加曽利E I 式土器が一定量存在することも分かった(第11・12図)。

1 はじめに

1984(昭和59)年、栃木県立博物館で、栃木県の中期縄文土器を中心とした企画展「はなひらく縄文文化」が開催された。企画展を担当した上野修一は、同じ県内でも水系ごとに土器様相が異なることを指摘し、展示、図録および図録掲載の編年表に反映させた(上野1984)。当時の中期縄文土器の研究では、県単位での比較が一般的であった。筆者もこの展示を手伝うなかで、類似する土器が広域に分布する阿玉台式前半期とは異なり、小地域毎に土器様相が異なる阿玉台式後半期から加曽利E I 式期のあり方に関心を持ち、以後この問題に取り組んできた。

昨年と一昨年、阿玉台IV式期の八溝山地周辺の遺跡を分析し、10 km程度の距離にある遺跡間で、土器様相に違いがあることを指摘した(塚本2014・2015)。続く、加曽利E I 式古段階については、関東地方北東部から東部に、いくつかの特徴的な土器群が存在することを指摘してきた(塚本1997・2004・2006・2010)。ここ5年間、特に茨城県北部の調査事例が増えたことにより、那珂川流域については上流域から下流域まで土器様相がある程度把握できるまで資料が揃ってきた。本稿では、これまでの研究と近年の調査事例を踏まえ、那珂川流域における加曽利E I 式初源期の土器の地域差を確認することを目的とする。

2 研究の動機

これまで、筆者は栃木・茨城県域を中心に、阿玉台式期から加曽利E I 式期の土器を研究してきた。阿玉台式終焉後の加曽利E I 式古段階に、各地に特徴的な土器群が分布することを指摘してきた。栃木県那

須地方に、「浄法寺類型」という特徴的な土器群¹¹⁾が濃密に分布し(塚本1997)、那珂川下流域には、細い貼付粘土紐で口頸部に波状文や渦巻文を配す、特徴的な加曾利E I式土器が存在することを示した(塚本2006)。筑波山塊や栃木県の喜連川丘陵の南側に当たる宝積寺台地、宝木台地とその南に連なる常総台地(主に鬼怒川・小貝川水系)には、所謂中峠式土器を主体に下総台地型の加曾利E I式土器が分布することを指摘した(塚本2004・2010)。

那珂川中流域、県境に連なる八溝山地周辺の遺跡では、浄法寺類型および細い粘土紐で口頸部に波状文等を配す土器が希薄との印象を受けた。この地域では別の土器群が主体を占めることが予想された。近年までの調査により、茨城県側の滝ノ上遺跡、赤岩遺跡および栃木県側の絵の木遺跡、やや上流域(喜連川丘陵)にあたる小鍋前遺跡等の土器が報告された(浅間2014、高野2013、中村2005・2006、塚原2008)。

ところで、栃木県では1980年代までの海老原郁雄の精力的な研究により、県北部を中心とする中期中葉の編年が確立された(海老原1980b・1981a・b等)。湯坂遺跡、槻沢遺跡の報告(海老原1979・1980a等)により、阿玉台式後半期に伴う大木式系土器(海老原郁雄による大木8a式)の様相が明らかになった¹²⁾。

- i 口縁部に押捺を加えた陸帯を巡らし、それに連繫するように中空把手を付け、体部と頸部の境目に数条の沈線を巡らし、頸部と体部に弧線やクランク文を横位に展開させる土器(第1図1~4)
- ii 口縁部に2条の突帯を巡らし、そこにS字状の把手を付ける土器(第1図5~7)
- iii 縄文地に有筋沈線で文様を描く七郎内II群土器;海老原の湯坂タイプ(第1図8・9)

筆者は浄法寺遺跡の報文で栃木県北部の中期中葉の土器の編年を行い(塚本1997)、阿玉台式終焉後、那須地方では「浄法寺類型」が主体を占め、大木式系土器が希薄となることを示した。これにより大木式の変遷を那須地方で辿ることは難しいことが分かった。浄法寺類型や細い貼付粘土紐による加曾利E I式古段階の土器が希薄な那珂川中流域では、大木式系土器の変遷を辿ることができるかもしれない。その手始めとして、那珂川中流域の土器様相を明らかにしたい。

3 対象とする地域

那珂川是那須岳に源を発し、東南流して八溝山地に突き当たるとその西麓に沿って南流し、栃木県茂木町と茨城県常陸大宮市の間で八溝山地を分断する。茨城県に入って東南流して、ひたちなか市と東茨城郡大洗町の間で太平洋に注ぐ。総延長約150 kmの河川である(第2図)。

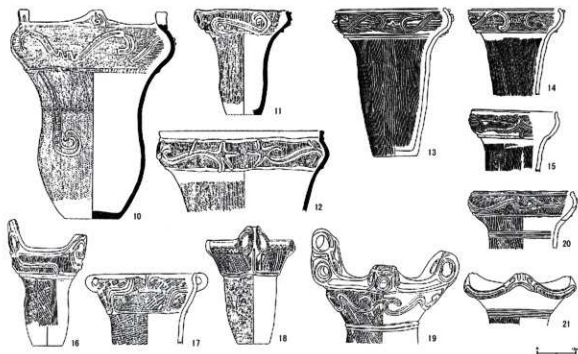
那珂川上流域右岸の支流に、高原山、塩原溪谷から東南流する箒川がある。那珂川と箒川に挟まれた約40,000 m²の紡錘形の一帯は「那須野が原扇状地(台地)」と呼ばれる。扇状地のため湧水点が限られるが、その付近には縄文時代中期の大規模集落が点在する。前述した槻沢遺跡、湯坂遺跡のほか、今回取り上げる長者ヶ平遺跡が存在する。箒川合流点以南、那珂川両岸には河岸段丘が発達する。箒川に近い右岸の河岸段丘上に浄法寺遺跡、三輪仲町遺跡が立地する。那須野が原と那珂川を挟んだ東側は八溝山地となる。本稿で取り上げる浅香内8H遺跡は、八溝山地の西麓部に位置する。なお、本稿では、那須野が原および対岸の八溝山地、箒川を挟んで南側に接する河岸段丘上を「那珂川上流域」として扱う。

那珂川が八溝山地を分断する栃木・茨城の県境付近を、本稿では「那珂川中流域」とする。箒川の南側は、北西の高原山から南東の八溝山地まで標高150~300 mの喜連川丘陵が連なる。喜連川丘陵の中央部を東南流する荒川の右岸に小鍋前遺跡、八溝山地との境をなす逆川の左岸に絵の木遺跡が立地する。両遺跡は、喜連川丘陵でも八溝山地に近いところに位置している。八溝山地は、八溝、鷺子、鶏足、筑波の4つの山塊で構成される。那珂川の北側に鷺子山塊、南側に鶏足山塊である。鷺子山塊の東側には、南流する緒川(那珂

阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器



加曾利E I式古段階の標準的な土器



1～4・9 槻沢遺跡 5 曲畑遺跡 6～8 湯坂遺跡 10～12 中山谷遺跡 11号住居址
13～15 岩の上遺跡第23号住居址 16～21 花積貝塚2A号住居址

第1図 阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器と加曾利E I式古段階の土器

川の支流)を境として、那珂川左岸に那珂台地が広がる。緒川に近接した那珂川を眼下に見下ろす台地縁辺に滝ノ上遺跡が立地する。

那珂川下流域の右岸には東茨城北部台地が広がる。その南部は、瀬沼川¹⁹⁾(河口付近で那珂川に合流する)の支流により、いくつもの支谷が開析されているが、こうした支谷に望む台地縁辺に宮後遺跡が立地する。また、瀬沼と太平洋に挟まれた細長い鹿島台地北端の瀬沼を西に見下ろす台地縁辺に千天遺跡が立地する。

4 分析方法

那珂川流域で、発掘調査報告書が刊行され、土器様相が明らかになった遺跡を取り上げ、加曽利EⅠ式古段階の資料を抽出する。那須地方では「浄法寺類型」が組成の主体を占めることが分かっているため、どこまで主体となる遺跡が広がるかを確認し、伴出する土器の類型化を行う。那珂川下流域で、細い貼付粘土紐で口頸部に渦巻文や波状文を描く平縁の加曽利EⅠ式土器の存在が明らかになっている宮後遺跡と千天遺跡の土器を類型化する。更に、両地域の間にあたる、鷲子・鶴足山塊周辺地域の遺跡の土器を分類する。類別された3地域の土器から、標準的な類別を選定し、相互に比較して、その異同を明らかにする。

5 年代の把握

(1) 年代の把握方法

ところで土器様相の違う地域においてどのように共時性を把握するかという問題がある。

本稿で取り扱う加曽利EⅠ式古段階の把握方法について触れる。従来、摺糸文を地文とし、口頸部文様帯に、沈線を沿わせない貼付隆帯で横「S」字文を配す土器が、関東地方南西部の標準とされた。東京都中山谷遺跡、埼玉県岩の上遺跡の土器が代表例である(第1図10～15)。これに並行する土器が各地の加曽利EⅠ式古段階となる。東関東の土器が縄文地にクランク文を配す土器であることを安孫子昭二が指摘した(安孫子1978)。埼玉県でも花積2A号住の共伴例(第1図16～21)を根拠に、並行する東関東の加曽利EⅠ式を指摘した(宮崎ほか1982)。

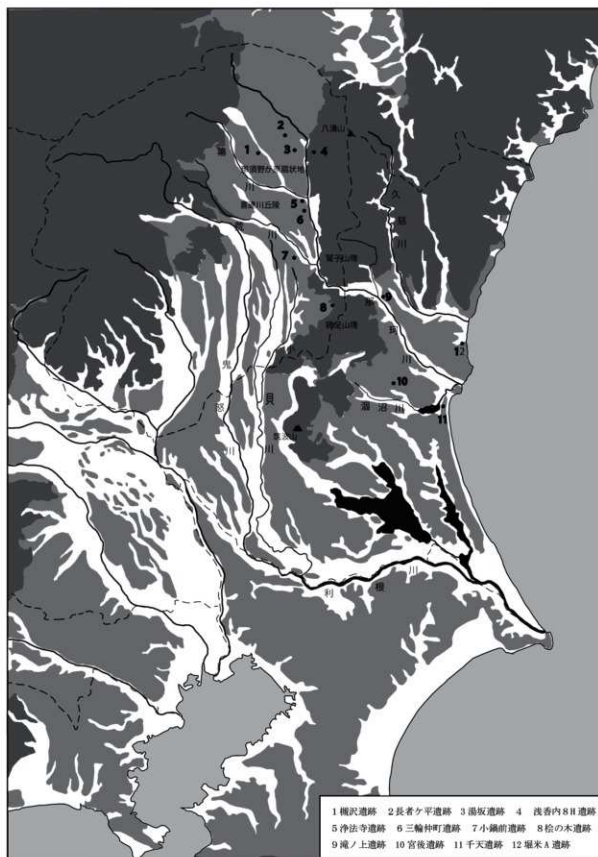
一方、下総考古学研究会による中韓式の設定がある(下総考古学研究会1976)。下総考古学研究会は、同会が発掘調査した中韓貝塚の土器から5個体を選び、型式学的な特徴を把握したうえで、勝坂式、阿玉台式と加曽利EⅠ式の間の中韓式が存在することを指摘した。中韓式については賛否両論があったが、ある年代を単独で占める土器群ではなく、勝坂式、阿玉台式終末から加曽利EⅠ式期に並行して存在する土器群との評価があり(宮崎ほか1982)、後に下総考古学研究会の後身もこの見解を支持した(下総考古学研究会1998)。

筆者も、関東地方北東部の土器を分析する過程で、関東地方南西部の中山谷遺跡、岩の上遺跡に並行する土器の把握に努めた。地域差の激しいこの段階の土器の共時性把握には苦慮したが、関東地方北東部から東部に後半に分布する阿玉台式土器を欠くこと、沈線を沿わせない貼付隆帯によるモチーフが見られること、沈線に沿う隆帯によるモチーフが見られないこと等を主な根拠として一括資料を抽出し、各地域の土器様相を把握してきた。

(2) 年代幅の問題

しかし、この段階の把握方法にも問題点はある。

江原英は、寺野東遺跡SK-333出土例を取り上げ、加曽利EⅠ式古段階と阿玉台式が共伴することを明らかにした。単に遺構内共伴ということだけではなく、製作手法の共通性を捉えての指摘であり(江原



第2図 那珂川流域の地形概念図

1999)、妥当性がある。更に、阿玉台IV式系土器は加曾利E I式に並存することを指摘した(江原2006)。その後阿玉台IV式土器と加曾利E I式古段階の土器が共伴する事例が増え、今回もそうした資料を取り上げた。一方で、阿玉台IV式を伴わない加曾利E I式古段階も存在する。阿玉台IV式を伴う加曾利E I式、阿玉台IV式を伴わない加曾利E I式という推移も想定可能となる¹⁹⁾。

浄法寺遺跡報文(塚本1997)では、浄法寺遺跡第16号土坑出土の浄法寺類型の土器(第7図1)を加曾利E I式古段階に位置付けた。阿玉台IV式期には浄法寺類型は伴わないので、最古段階となる。突如として完成された土器が出現するとの不自然さを感じた。この土器の祖型となると考えているのが浅香内8H遺跡F.6の平縁の浄法寺類型の土器(第6図18)である(田代ほか1975)。浅香内8H遺跡の土器は、渦巻文の先端に付く三つの環状粘土を組合せた突起が、中空となっていない。一方、浄法寺遺跡例は中空化している。浅香内から浄法寺への型式学的変化が考えられる。把手の中空化、大形化という変化の方向である。浅香内8H遺跡と同様な例が増え、伴出する他の土器群にも違いが認められれば将来細分も可能であろう。

しかし、阿玉台IV式の共伴の有無、浄法寺類型の型式学的変化以外に、他の土器群に差異を見出せないため、現時点では一段階として一括して扱う。したがって、対象とする年代幅は広がる。

6 土器様相の把握

(1) 那須野が原周辺(那珂川上流域)

本地域の良好な一括資料として、長者ヶ平遺跡SK-4(第6図1~15)、浅香内8H遺跡F.6(第6図16~20)、浄法寺遺跡第16号土坑(第7図1~3)、第18号土坑(第7図4~12)、三輪仲町遺跡SK-050(第7図13~20)がある。

1) 浄法寺類型(A類)について

那須地方では浄法寺類型(第3図1~5)が主体を占めることは既に指摘してきた(塚本1997等)。今回提示した資料では、長者ヶ平遺跡SK-4で15点中9点、浄法寺遺跡第18号土坑で9点中4点、三輪仲町遺跡SK-050では8点中4点で、44~60%の割合を占める。浄法寺類型の分布はほぼ栃木県全域から福島県会津・中通地方に及ぶが、那須地方を除くと、組成の中で占める割合は少なくなる。三輪仲町遺跡から約12km南にある小鍋前遺跡では、殆ど存在しない。

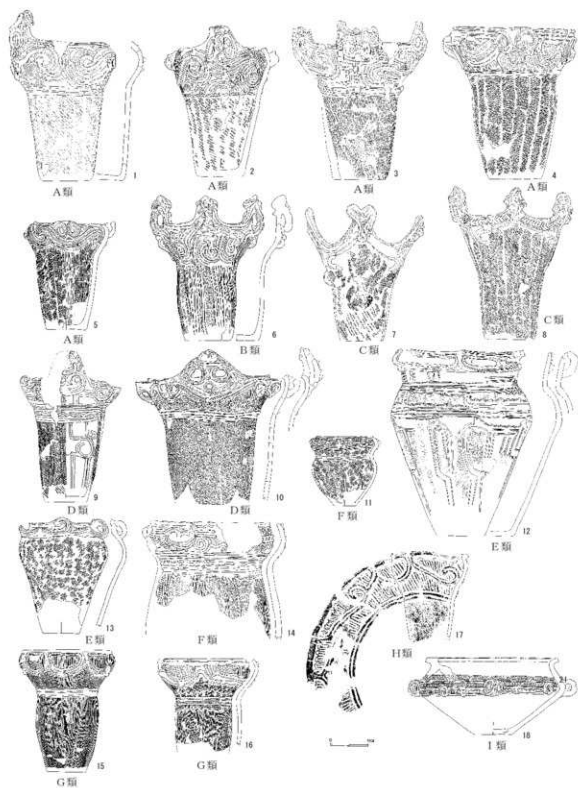
平縁を基本とし、キャリバー形深鉢の口頭部に、太い隆帯(基隆帯)で、横「S」字文や渦巻文を描く。基隆帯と同方向に隆帯や沈線を密に沿わせ、口頭部を充填する。多くは、同時期の大木8a式土器と同様の中空把手を配す。口頭部の文様帯以下には縄文を施文する。縄文の多くは、同時期の大木8a式土器と同様縦方向施文で、2段LRが多い。間隔施文も目立つ。

新潟県中越・下越地方の火炎土器に類似する“火炎系土器”が、阿玉台III式期から加曾利E I式期に福島県会津・中通地方と栃木県北部を中心に分布する。火炎系土器を祖型とし、部を在地的な手法で縄文施文したことにより、浄法寺類型が生成したと考えられる。年代的には加曾利E I式期を通じて存在し、磨消縄文が出現すると消滅する。火炎系土器が個体ごとの変異が大きいのに対し、浄法寺類型は規範が強く、各個体の類似性が高い。他の大木式系土器同様、中空把手は型式学的に変化する。環状の粘土紐を組み合わせて作るこの種の把手は、次第に中空化、大形化する。

2) 浄法寺類型と共伴する土器

B類 火炎系土器(第3図6)

波状口縁で、波状口縁正面にトンボ眼鏡状の中空把手を付ける。口頭部には基隆帯で渦巻文を配し、それ



1・10・12・14・16 浄法寺遺跡 3・4・7・8・15 長者ヶ平遺跡
 2・5・6・11・13・17・18 三輪仲町遺跡 9 浅香内8H遺跡

第3図 那須野が原周辺の加曾利E I式古段階の土器

と同方向の隆帯と沈線で器面を埋める。体部は縦方向の沈線と刺突を配す。

C類 縄文を施す火炎系土器（第3図7・8）

火炎土器に見られる王冠形に近い波状口縁の器形で、器面に縄文を施文する。近年、前述の浄法寺類型とは異なる縄文を施文した火炎系土器の出土例が増えた。浄法寺類型をも含めた火炎系土器全体を再整理する必要がある。

D類 中空把手を持ち、口頸部に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す土器（第3図9・10）

口頸部が内彎気味に開く器形で、体部と頸部の境に横位の沈線を巡らす。口頸部の施文域には、貼付隆帯によって渦巻文に連繋する横方向に展開するモチーフを配している。体部は渦巻文や縦方向の沈線を展開させるものと地文のみのものがある。

E類 体部は張る器形で、口頸部に2条の隆帯を巡らし、渦巻文や区画文を配す土器（第3図12・13）

頸部と体部の境を幅広い横方向の沈線で区切り、頸部と体部に縦方向の沈線を展開させる土器と口縁部下を地文のみとする土器がある。

F類 口頸部に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す平縁の土器（第3図11・14）

口頸部が内彎するキャリバー形を呈す。D類の突出する中空把手を欠き、口縁部が内屈したものである。体部上位に横方向の沈線を巡らし、体部に縦位沈線等を施文する。14は頸部の素文帯を省略している。

G類 燃糸文を地文とし、口頸部区画内に縦位沈線を充填する土器（第3図15・16）

地文燃糸文という関東地方南西部の要素、口縁部区画内に充填する縦位短沈線という関東地方東部の要素を取り入れ、体部上位の括れ部に沈線を巡らす在地の手法をとる土器である。

H類 下総台地型の加曾利E I 式土器（第3図17）

口頸部文様帯の地文は縦位短沈線である。

I類 所謂中峠式土器（第3図18）

浅鉢形土器である。

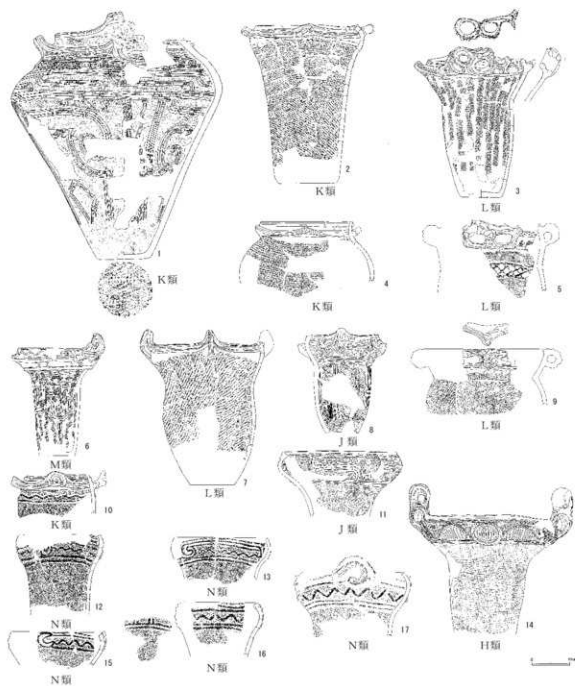
那須野が原周辺では、約半数を占める浄法寺類型の土器（A類）に火炎系土器（B類）、縄文施文の火炎系土器（C類）と在地の大木8 a 式土器が伴う。大木式8 a 式土器には、口頸部に横方向の貼付隆帯を配す土器（中空把手を持つD類と持たないF類）と体部が張る、口縁部に2条の隆帯を巡らす土器（E類）がある。これらは頸部括れ部に横位の沈線を巡らし、体部は縦方向に沈線文を展開するか地文のみとする。燃糸文地文で口縁部区画内に縦位短沈線を配す土器（G類）、下総台地型加曾利E I 式土器（H類）と中峠式土器（I類）も一定量存在する（第12図）。

（2）八溝山地鷺子・鷺足山塊周辺（那珂川中流域）

八溝山地鷺子・鷺足山塊に近接する喜連川丘陵東南部と那珂台地西縁の遺跡を対象とする。喜連川丘陵南東部は、小鍋前遺跡（栃木県那須烏山市）、松の木遺跡（栃木県茂木町）、那珂台地西部は滝ノ上遺跡（茨城県常陸大宮市）を取り上げる。良好な一括資料としては、小鍋前遺跡SK-80（第8図1～7）、SK-1101（第8図8～10）、SK-1118（第8図11～15）、松の木遺跡A628土坑（第8図17～20）、滝ノ上遺跡第34号土坑（第8図24・25）、第63号土坑（第8図16・21・23）、第252号土坑（第8図22・26～28）がある。

B類 火炎系土器（第8図1～3）

喜連川丘陵でも比較的那須野が原に近い小鍋前遺跡（塚原2008）では、火炎系土器がある程度みられるが、



1・8・11・14 小鍋前遺跡 2・3・4・7・10・12・15・16 滝ノ上遺跡
5・6・9・13・17 桜の木遺跡

第4図 八溝山地鶯子・鶏足山塊周辺の加曾利E I式古段階の土器

椀の木遺跡や滝ノ上遺跡ではほとんど見られなくなる。

J類 口頸部に貼付隆帯で横位のクラク文等を配す平縁の土器（第4図8・11、第8図5）

中空把手を持つものもある（第8図5）。

K類 口縁部の狭い無文帯直下に背を沈線で割った高い隆帯を巡らす土器（第4図1・2・4・10）

背の高い隆帯は4単位突出させ、この部分で背割り沈線が途切れる。隆帯直下には、横位沈線を多段に幅広く配すものが多い（第4図1・2・4）。横位沈線下にモチーフを描く土器もある（第4図1）。器形は、キャリバー形と体部が張る変形がある^{43）}。

L類 口縁部に2条の隆帯を巡らし、以下をほぼ地文のみとする土器（第4図3・5・7・9）

中空把手を付けるもの（第4図3・5）と付けないもの（第4図7・9）がある。

M類 キャリバー形の口頸部に細い貼付隆帯でモチーフを配す土器（第4図6）

体部が細く、背の高いスマートなキャリバー形の器形が特徴的である。本地域ではあまり多い土器ではない。後述するとおり、那珂川下流域に多い器形である。

N類 キャリバー形の口頸部に比較的太い貼付隆帯で波状文や渦巻文を配す土器（第4図12・13・15～17）

胴部が太い寸胴なキャリバー形の器形が特徴的で、貼付隆帯はやや太めで、モチーフは波状文や渦巻文が多い。本地域に比較的多くみられる土器である。

H類 下総台地型の加曾利EⅠ式土器（第4図14）

口縁部に交互刺突文がみられ、口頸部文様に勝坂式起源の円文を残すなど、常総台地方面の土器の特徴をよく示しているが、体部に横位沈線を多段に幅広く配し（J類と同じ手法）、本地域の土器の文様がみられ、在地で製作されたと思われる。

J類・K類・L類が大木式系土器、M類・N類・H類が加曾利EⅠ式系土器といえよう。K類の「狭い無文帯下に背割り隆帯を巡らす土器」、L類の「2条隆帯と中空把手以下を地文のみとする土器」、N類の「口頸部に比較的幅太の貼付隆帯を配す寸胴のキャリバー形深鉢」が鷺子・鷲足山塊周辺の代表的な土器と言えよう。K類にみられる横位沈線を多段に幅広く配す手法も特徴的である。そして那須野が原周辺同様に、少ないながら一定量の下総台地型の加曾利EⅠ式土器がみられる。

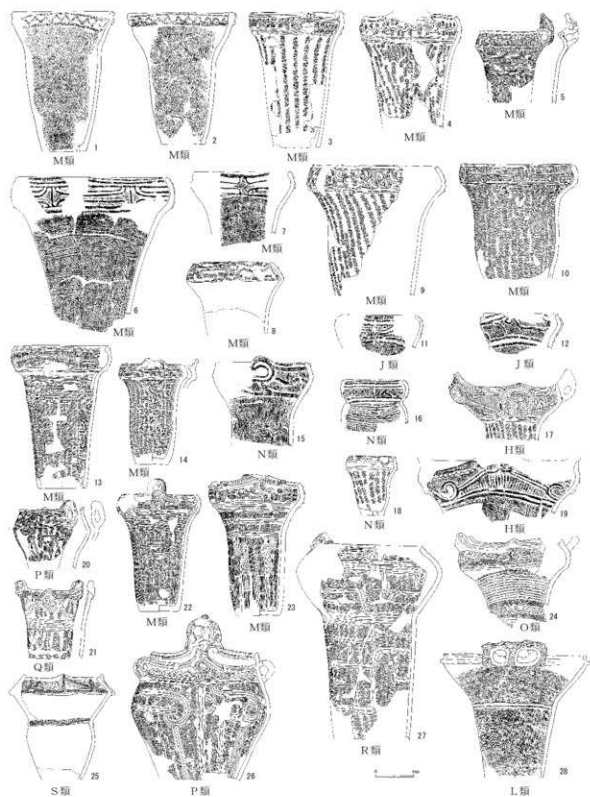
（3）那珂川下流域

宮後遺跡（吹野2002・2005）と千天遺跡（寺内2014）の2遺跡を取り上げる。良好な一括資料としては、宮後遺跡第371号土坑（第9図1～7）、第601号土坑（第9図8～15）、第637号土坑（第9図16～20）、第642号土坑（第9図21～29）、第1623号土坑（第10図1～4）、千天遺跡第44号土坑（第10図5～11）、第66号土坑（第10図12～24）がある。

M類 キャリバー形の口頸部に細い貼付隆帯でモチーフを配す土器（第5図1～10・13・14・22・23）

本地域に多く見られる。宮後遺跡第321号土坑では7点中3点、同遺跡601号土坑では8点中3点、同遺跡第737号土坑では5点中3点、同遺跡642号土坑では10点中2点、同遺跡1623号土坑では4点中3点、千天遺跡第44号土坑では7点中1点、同遺跡66号土坑では13点中3点の割合を占める。ばらつきがあるが概ね20～60%である。モチーフは波状文が目立つ。他に渦巻文、クラク文、対向カスガイ文（第5図6）等がある。鷺子・鷲足山塊周辺に多いM類とは、モチーフは共通するが、器形と隆帯の太さが異なる。

J類 口頸部に貼付隆帯による横位のクラク文等を配す平縁の土器（第5図11・12）



1~4・6・9・11・12・15・17・18・19・23・26・27 宮後遺跡

5・10・13・14・16・20~22・24・25・28 千天遺跡

第5図 那珂川下流域の加曾利E I式古段階の土器

N類 キャリバー形の口頸部に比較的太い貼付隆帯で波状文や渦巻文を配す土器（第5図15・16・18）

寸胴なキャリバー形を呈す器形で、鷺子・鷲足山塊周辺に多いが、本地域でも一定量存在するようである。

H類 下総台地型の加曾利E I式土器（第5図17・19）

本地域でも量は多くないものの、一定量存在するようである。

O類 口縁部の狭い無文帯直下に背を沈線で割った高い隆帯を巡らし、以下口頸部文様帯に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す土器（第5図24）

K類と共通するが、体部が脹る器形ではなく、キャリバー形の深鉢で、口頸部文様帯に貼付隆帯による主文様を配す点で異なる。頸部に横位沈線を多段に幅広く配す点は共通する。

P類 張り出す体部に渦巻文と縦横に連繋する沈線でモチーフを描く土器（第5図20・26）

口縁部を省略したものと簡素な区画文を配した土器がある。

Q類 押捺を加えた隆帯を口縁に巡らし、頸・体部境に横位沈線を巡らし、頸部と体部に沈線文を配す土器（第5図21）

阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期に那須地方に多く見られる大木式系土器（第1図1～4）と同じ文様構成で、器形が直線的で、文様が省略もしくは簡素化している。

R類 口縁部に狭い楕円形区画を配し、頸部、体部にクランク文を展開させる土器（第5図27）

L類 口縁部に2条の隆帯を巡らし、以下をほぼ地文のみとする土器（第5図28）

顔面状の中空把手が付く例がみられる。

S類 勝坂式系の土器（第5図25）

那珂川下流域は、細い貼付隆帯でモチーフを配すスマートなプロポーシヨンのキャリバー形深鉢（M類）が主体を占め、やや太めの貼付隆帯でモチーフを配す寸胴な器形の土器（J・N類）も少量伴う。下総台地型の加曾利E I式土器（H類）、勝坂式系の土器（S類）と各種大木式系土器（L・P・Q・R類）が存在する。狭い口縁部無文帯下に背割り隆帯を巡らし、頸部に横位沈線を多段に幅広く配す。鷺子・鷲足山塊周辺と共通する文様も確認されたが（O類）、器形や主文様の有無で異なる。

7 結論

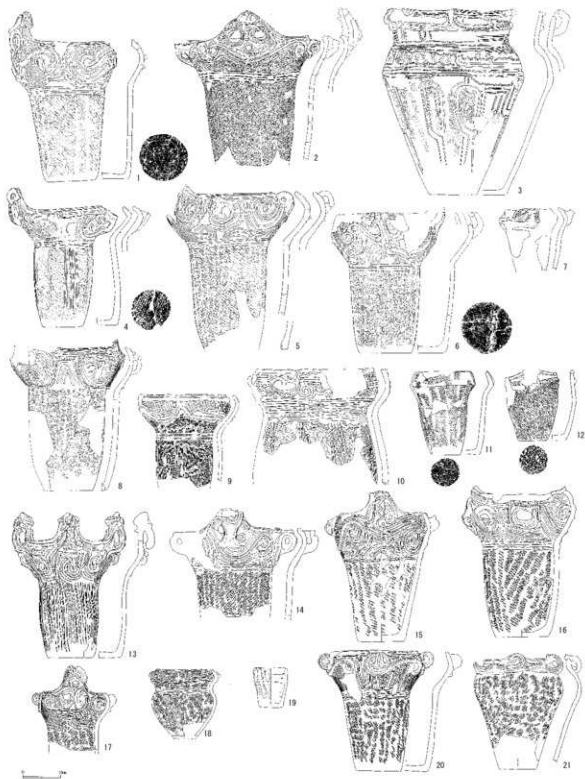
筆者がかつて指摘したとおり、加曾利E I式古段階には那珂川上流域の那須地方には浄法寺類型が、那珂川下流域には口頸部に細い貼付粘土紐で波状文や渦巻文を配し、スマートなキャリバー形を呈す土器が、組成の中で大きな割合を占めて分布することが確認できた。

浄法寺類型が組成の中で主体を占める地域は、那須野が原およびその南に隣接する那珂川左岸の河岸段丘上（旧那須郡小川町周辺）である。一方、細い貼付粘土紐で波状文・渦巻文を配すスマートなキャリバー形の土器が主体を占める地域は、宮後遺跡と千天遺跡以外からどこまで広がるかは現時点では不明である¹⁰⁾。那珂川中流域にあたる八溝山地鷺子・鷲足山塊に接する喜連川丘陵、那珂台地西部の遺跡では大木式系土器が主体を占めるようである。しかし、その大木式系土器の標本的な土器は、今回呈示できなかった。口縁部の狭い無文帯下に背の高い隆帯を巡らす手法、頸部の横位沈線を多段に幅広く配す手法がこの地域の大木式系土器の特徴となることが予想される。一方、比較的太い隆帯で口頸部に波状文や渦巻文を配す寸胴な器形のキャリバー形の深鉢が一定量存在することが判った。火炎系土器、浄法寺類型の土器、細い貼付隆帯で波状文等を配すスマートなキャリバー形の土器はあまりみられないようである。



1～15 長者ヶ平遺跡 SK-4 16～20 浅香内8H遺跡 F.6

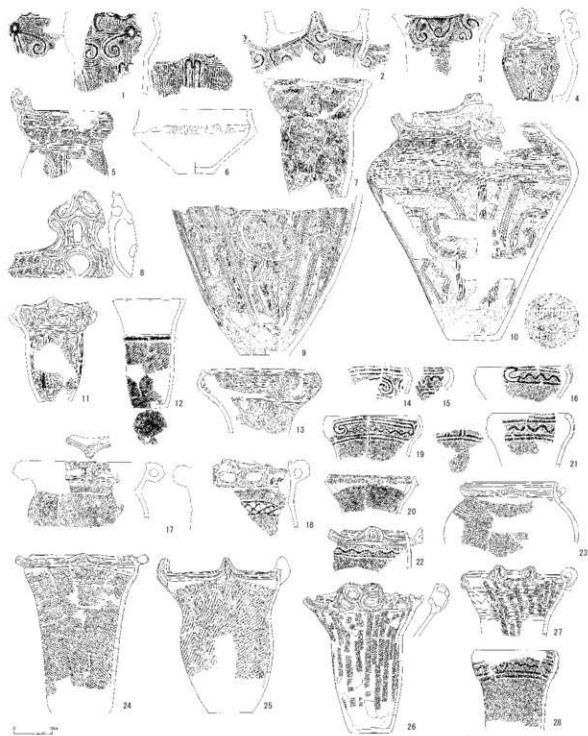
第6図 那須野が原周辺の加曾利E I式古段陶の一括資料(1)



1～3 浄法寺遺跡第16号土坑 4～12 浄法寺遺跡第18号土坑

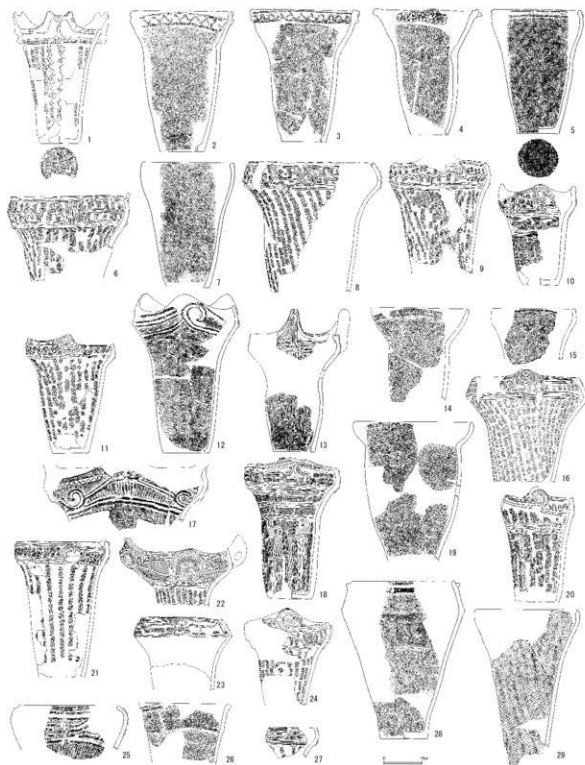
13～20 三輪仲町遺跡SK-050

第7図 那須野が原周辺の加曾利EⅠ式古段甕の一括資料(2)



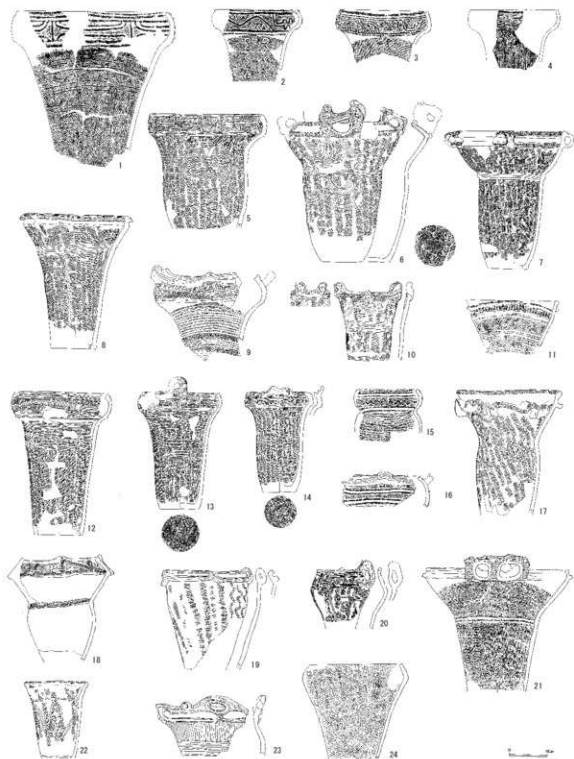
1～7 小鍋前遺跡SK-80 8～10 小鍋前遺跡SK-1101 11～15 小鍋前遺跡SK-1118
 17～20 桜の木遺跡A628土坑 16・21・23 滝ノ上Ⅰ遺跡第63号土坑
 22・26～28 滝ノ上遺跡第252号土坑 24・25 滝ノ上遺跡34号土坑

第8図 八溝山地鷺子・鷲足山塊周辺の加曾利EⅠ式古段階の一括資料



1～7 宮後遺跡第321号土坑 8～15 宮後遺跡第601号土坑
 16～20 宮後遺跡第637号土坑 21～29 宮後遺跡第642号土坑

第9図 那珂川下流域の加曾利EⅠ式古段階の一括資料(1)



1～4 宮後遺跡第1623号土坑 5～11 千天遺跡第44号土坑
12～24 千天遺跡第66号土坑

第10図 那珂川下流域の加曾利E I 式古段階の一括資料(2)

各地域の代表的な土器を提示すると以下のとおりとなる(第11・12図)。

那須地方;浄法寺類型の土器(A類)

火炎系の土器(沈線地文;B類、縄文地文;C類)

中空把手を持ち、口頸部に貼付隆帯によるモチーフを配す土器(D類)

把手を付けず、口頸部に貼付隆帯によるモチーフを配す土器(E類)

燃糸文地文で、口頸部の区画文内部に縦位の短沈線を充填する土器(G類)

下総台地型の加曾利E I式土器(H類)

八溝山地鷲足・鷺子山城周辺

口縁部無文帯下に背の高い隆帯を巡らし、以下に横位多段に幅広く沈線を施す土器(K類)

比較的太い隆帯で口頸部に波状文や渦巻文を配す寸胴な器形の土器(N類)

2条隆帯と中空把手以下を地文のみとする土器(L類)

下総台地型の加曾利E I式土器(H類)

那珂川下流域の土器

細い貼付隆帯でモチーフを配すスマートなキャリバー形の土器(M類)

やや太めの貼付隆帯で波状文を配す寸胴な器形の土器(N類)

やや太めの貼付隆帯でクランクを配す寸胴な器形の土器(J類)

下総台地型の加曾利E I式土器(H類)

各種大木式系土器(L・P・Q・R類)

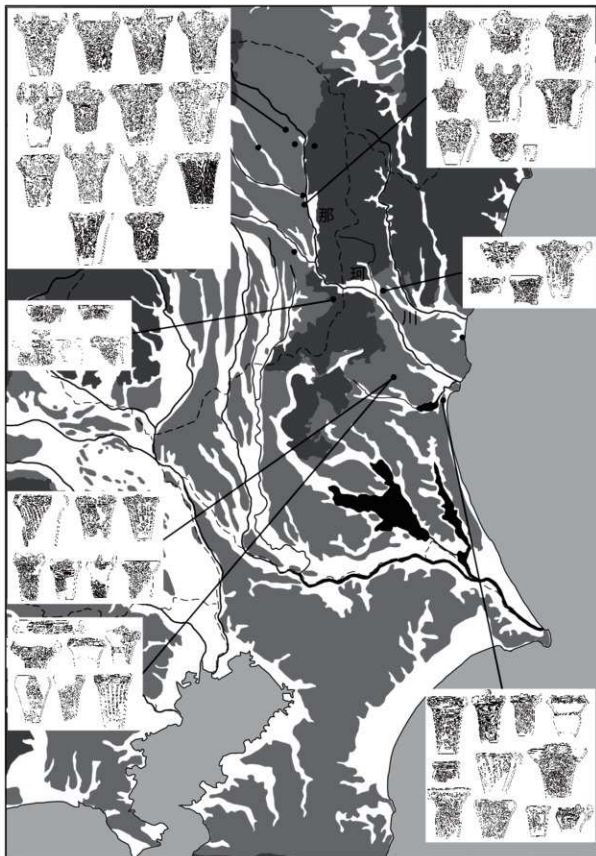
今後、那須地方で存在した中空把手と口頸部貼付隆帯によるモチーフの大木式系土器(D類)とは異なる大木式系土器が、鷺子・鷲足山城周辺(那珂川中流域)及び那珂川下流域、さらには茨城県北部で発見されることが予想され、これらの類型化がなされれば、栃木・茨城県北半部の加曾利E I式古段階の土器様相がより明らかになるであろう。

本稿を草するにあたり、以下の方々からご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

青池紀子 伊沢加奈子 大竹弘高 坂上直嗣 田中浩江 中村信博

註

- (1) この種の土器は、古く平林西遺跡の資料紹介(青木1964)以来知られており、海老原郁雄により「浄法寺タイプ」と命名され(海老原1979)、内容も示された(海老原1981a)。浄法寺タイプの「タイプ」は、日本考古学では「型式」と訳され、縄文時代研究においては大きく二つの意味で使用される。一つは山内清男の「型式」で、「地方差年代差を示す年代学的の単位」(山内1932)、「一定の内容を持ち、一遺物層、一地点又は一遺跡から純粋にそればかり出て、他の型式とは内容を異にして発見される。」(山内1935)ものである。「浄法寺タイプ」は、中心地域においても他の土器群と共存するため、山内清男の「型式」には該当しないと考えた。一方小林達雄の「型式」は、強く共通する属性によって認識される土器群で、「範型」の表現形態としての「型式」を意味する(小林1977等)。「浄法寺タイプ」の中には、小林達雄による「型式」がいくつか内在する。そこで、「タイプ」の名称は好ましくないと考え、1990年代以降よく使われている「類型」を用い「浄法寺類型」と呼ぶこととした(塚本1997)。
- (2) 海老原郁雄は、湯坂遺跡の報文で、阿玉台Ⅲ式を伴う湯坂遺跡T1-V区土壌出土土器の段階を「大木8a式の初原

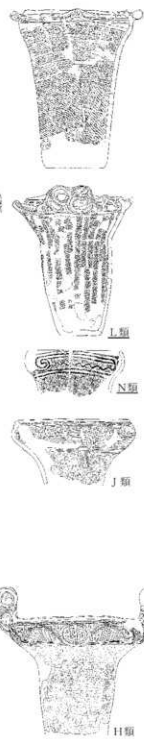


第11図 那珂川流域の上・中・下流域の一括資料

那須野が原周辺
(那珂川上流域)



鷺子・菊足山塊周辺
(那珂川中流域)



那珂川下流域



第12図 那珂川上・中・下流域の代表的な土器

的段階、阿玉台式を伴わない段階を「大木8a式の第2段階」、巨大な箱状把手を持つ段階を「大木8a式の第3段階」と3細分した(海老原1979)。1981年の日本考古学協会栃木大会では、阿玉台Ⅲ・Ⅳ式に並行する大木8a式を2細分し、阿玉台式消滅後の大木8a式と併せて3段階区分をとった(海老原1981)。現在多くの研究者が援用する大木8a式の古・中・新に近い区分である。なお、海老原は阿玉台Ⅲ式とⅣ式の区分には積極的ではなく、以後阿玉台式に伴う段階と阿玉台式を伴わない段階の2細分案をとることが多い。「Ⅰ 阿玉台Ⅲ、大木8a式古」「Ⅱ 阿玉台Ⅳ、大木8a式中」「Ⅲ 加曾利EⅠ式、大木8a式新」の3細分は、企画展『はなひらく縄文文化』の図録が明瞭である(上野1984)。筆者は、浄法寺遺跡の報文で、大木8a式が加曾利EⅠ式に並行する「型式」として制定されたこと、湯坂遺跡の発掘調査担当者の渡辺龍雄が、湯坂遺跡の阿玉台Ⅲ式並行の土器を「奥羽の大木7b式の新型式比定」とした(渡辺1963・1967)という学史を踏いた(塚本1997)。こうした学史的な経緯から、筆者は阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器を「大木8a式」とは表現しない立場に立ち、「阿玉台Ⅲ式に並行する大木式系土器」等の不明瞭な表現をしている。筆者の立場は殆ど無視されており、近年浄法寺報文を知らない若い世代から「大木8a式古」「大木8a式中」のレクチャーを求められ、応じることもある。海老原依徳は阿玉台Ⅲ式期とⅣ式期を分けたい立場をとっている。筆者は、阿玉台Ⅲ式とⅣ式は積極的に区分するが、並行する大木式系土器は現時点では分けられないと考えている。

- (3) 現在沼沼川は、河口付近で那珂川に合流しており、千天遺跡は那珂川水系に立地する遺跡である。しかし、縄文時代においては、沼沼川は内海となっていたと予想され、その意味では那珂川流域という表現は必ずしも適切ではない。
- (4) 江原英が指摘するように阿玉台Ⅳ式系土器が、加曾利EⅠ式期を通じて存続するかどうかは、阿玉台Ⅳ式の定義を踏まえて議論する必要がある。この時期“御堂前型深鉢”(下総考古学研究会2011)など縄文施文の簡素な土器が増えるが、それらをすべて阿玉台式系と捉えることは適切ではないと考えている。この問題については、今後の課題としたいと考えている。
- (5) 浄法寺報文執筆時、加曾利EⅠ式中段階に、突如として口縁部にやや幅広い無文帯を持つキャリバー形深鉢が出現することに違和感を覚えていた。本類を介在させれば、加曾利EⅠ式中段階のやや幅広い無文帯の存在は素直に理解できる。但し、その他の文様の系譜等については、未だ不明である。
- (6) 那珂川流域ではないが、海岸部を北上した、粟米A遺跡では、この種の土器が主体とならず、むしろ滝ノ上遺跡等と様相が類似している。北側にはあまり分布が伸びないようである。

参考文献

- 青木義徳 1964「栃木県大田原市平林西遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』21
- 浅岡 陽 2014『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第19集 滝ノ上遺跡Ⅰ』常陸大宮市教育委員会
- 安孫子昭二ほか 1978『文京区動坂遺跡』動坂貝塚調査会
- 上野修一 1984『第7回企画展 はなひらく縄文文化』栃木県立博物館
- 江原 英 1999「第5章 成果と問題点」『栃木県埋蔵文化財調査報告書第224集 寺野東遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
- 江原 英 2006「阿玉台式土器の伝統と『中鉢式O地点型』の成立(覚書)」『栃木県考古学協会誌』第27集、栃木県考古学会
- 海老原依徳 1979『湯坂遺跡』大田原市教育委員会
- 海老原依徳 1980a「栃木県埋蔵文化財調査報告書第34集 槻沢(つきのきざわ)遺跡—栃木県那須郡那須野町—」栃木県教育委員会
- 海老原依徳 1980b「加曾利EⅠ式の変遷について(栃木県)」『奈和』第18号、奈和同人会
- 海老原依徳 1981a「第二章 縄文時代 三 縄文土器 4 中期の土器」『栃木県史』通史編1・原始古代1、栃木

県

- 海老原郁雄 1981 b 「北関東の大木式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- 海老原郁雄 2002 『長者ヶ平遺跡発掘調査報告書 エヌ・ティ・ティ携帯電話基地局の建設に伴う記録保存』大田原市教育委員会
- 小林達雄 1977 「型式・様式・形式」『日本原始美術大系1 縄文土器』講談社
- 下総考古学研究会 1971 『特集』中峠式土器の研究『下総考古学』6
- 下総考古学研究会 1998 「<特集>中峠式土器の再検討」『下総考古学』15
- 高野浩之 2013 『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第15集 赤岩遺跡Ⅱ-三美中道遺跡Ⅰ』常陸大宮市教育委員会
- 田代 寛ほか 1975 『黒羽高校社会部研究報告第4集 浅香内8日遺跡-栃木県那須郡黒羽町浅香内8日遺跡発掘調査報告-』栃木県立黒羽高等学校社会部
- 塚原孝一 1994 『栃木県埋蔵文化財調査報告第143集 三輪仲町遺跡 一般国道293号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塚原孝一 2008 『栃木県埋蔵文化財調査報告第313集 小鍋前遺跡 経営体育成基盤整備事業荒川南部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塚本師也 1997 『栃木県埋蔵文化財調査報告第196集 浄法寺遺跡 県営園地整備事業小川西部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 塚本師也 2004 「栃木県南部域の土器と焼町土器 分布圏外の焼町土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集、国立歴史民俗博物館
- 塚本師也 2006 「田木谷遺跡出土の縄文時代中期中葉の土器について(2)-縄文時代中期中葉の霞ヶ浦北岸における土器様相-」『玉里村立史料館報』第11号、玉里村立史料館
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曾利E1式期の土器-日間城町西原遺跡第61号住居跡出土土器の位置付け-」『茨城県考古学協会誌』第22号、茨城県考古学協会
- 塚本師也 2014 「近接する遺跡間における同年代の縄文土器の比較-栃木県益子町御堂前遺跡と茂木町松の木遺跡の中期縄文土器を対象として-」『研究紀要』第22号、(公財)とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2015 「近接する遺跡間における同年代の縄文土器の比較(2)-八溝山地西麓と東麓の中期縄文土器を対象として-」『研究紀要』第23号、(公財)とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
- 寺内久水 2014 『茨城県教育財団文化財調査報告書第384集 千天遺跡』茨城県
- 中村信博 2005 『松の木遺跡Ⅰ』松の木遺跡調査団
- 中村信博 2006 『松の木遺跡Ⅱ』松の木遺跡調査団
- 吹野富美夫ほか 2002 『茨城県教育財団文化財調査報告書第188集 宮後遺跡1』茨城県
- 吹野富美夫ほか 2005 『茨城県教育財団文化財調査報告書第240集 宮後遺跡2』茨城県
- 宮崎朝雄ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化(1)-縄紋土器文化の真相-」『ドルメン』第1巻第4号
- 山内清男 1932 「縄紋式文化」『ドルメン』第4巻第6号
- 渡辺龍端・辰巳四郎 1963 「栃木県大田原市湯坂遺跡」『日本考古学年報』10、日本考古学協会
- 渡辺龍端 1967 「第四章 縄文時代 一二 湯坂遺跡」『栃木県史 資料編 考古-1』栃木県

東日本前期古墳埋葬施設の基礎的検討 (集成編)

いし げし ひろし
石 橋 宏¹⁾

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 中期古墳の埋葬施設の評価 |
| 2. 集成にあたっての分析視点 | 5. おわりに |
| 3. 東日本の前期古墳埋葬施設の集成 | |

東国¹⁾では舟形木棺2類と箱形木棺が卓越した分布状況を示し、近畿の様相とは明らかに異なることを木棺形式分布図と集成図を示すことで明示した。岩崎卓也氏の指摘した前期後半の粘土椀+割竹形木棺の齊一的波及や土器様相などから王権の段階的な影響力の強化²⁾を読みとる見解が現在も影響を与えていると考え、再検討の必要性を指摘するとともに、前期古墳の棺の評価は中期古墳の棺の評価とも関わることを予察した。

1. はじめに

前稿(石橋2015)で東日本の前期古墳の埋葬施設についての若干の見通しを述べた。近年いくつかの前期古墳の木棺について関わることもあり、それぞれの地域の周辺の事例を集成しているうちに長大な刳枝式木棺の事例が割竹形木棺ではないことに気が付き、岩崎卓也氏の指摘した東日本型埋葬施設(岩崎1987)を再構築できる可能性があるものの、前期後半に粘土椀とともに割竹形木棺が波及するという理解には警鐘を鳴らすことが目的であったが、筆者の力量不足により充分には伝えきれなかった。

特に一番問題なのは、東日本の埋葬施設が判明した前期古墳が大幅に増加し、全てを把握するのが難しくなっていることである。1981年の日本考古学協会の栃木県でのシンポジウム(日本考古学協会1988)の集成や岩崎卓也氏の検討(岩崎1987)以後、事例が多数増加したものの、改めて再検討することはなかったように思う。前稿や今後の考察の妥当性を判断していただくには、事例を一度集成し、表示することが必要なのではないかと考えるに至った。

完全ではないが、傾向を把握する程度の資料は集成したと思われるので、本稿に集成図と基本文献を掲載した。かなりの紙数を割いたため、東日本の前期古墳の埋葬施設の地域性と畿内の前期古墳の様相との比較は本稿と対になる次稿(比較検討編)で述べる予定である。

2. 集成にあたっての分析視点

木棺についての研究史は一度触れたことがあるが、不十分であり、かつ堅穴式石椀や粘土椀などの棺を納める施設に関わる研究史についても関連させてまとめる必要がある。本来であれば本稿に載せるべきであるが、今回は集成を目的としたものであることから、詳細な研究史は次稿にゆずり、前稿と同様に木棺形態については岡林孝作氏の見解(岡林2009)を基準に、特に舟形木棺2類は石崎氏と筆者の成果を踏まえた分類基準(石崎2001・石橋2013)を採用する。

岡林氏は木棺遺存資料を集成し、古墳時代の木棺を構造から刳枝式木棺(割竹形木棺・舟形木棺1類・舟

1) 平成27年4月～ 東北大学埋蔵文化財調査室

形木棺2類)、組合式木棺(箱形木棺・長持形木棺)、釘付式木棺に大別し、形態分類を加えて整理する。

割竹形木棺は小林氏の定義に従い、「…大きな樹木をたてに2つに割り、それぞれ内部を割りぬいて、蓋および身とした円筒形の木棺」で、端から他端に向けて幅が狭まり、小口を垂直に仕上げたものを指し(小林1959)、端部が開放される貫通式と端部を割り残す非貫通式に分ける。さらに小口部に着目し、木棺の痕跡から端部が直線的なA型、平面「コ」の字形になるB型、外側から板で抑えられるため、「H字」状になるC型に分けられることを明らかにした(岡林2008)。

割竹形木棺は定形的であり、遺存資料に加え、粘土椁内部に木棺痕跡が残りやすい。奈良県下池山古墳では、非貫通式の割竹形木棺棺身(図1-1)の大半が遺存しており、基本的には半円形で、一部平端に削られた面があることが明らかにされ、棺痕跡の横断面が全て半円形を呈するわけではないことが判明した(奈良県立橿原考古学研究所2008)。石川県雨の宮1号墳では粘土椁に木棺痕跡が良好に遺存しており(図1-2)、副葬品の配置も考慮にいれて3区画に区分された突起を持つ割竹形木棺が復元された(鹿西町教委2005)。同様に粘土椁に木棺痕跡が良好に遺存していた大阪府和泉黄金塚古墳中央粘土椁(図1-3)では、木棺小口部分に別材の板をあてたことが判明している(末永・島田・森1954)。貫通式については滋賀県市三宅東遺跡で溝から割竹形木棺の蓋と考えられる製品(図1-4)が出土し(野洲市教委2010)、弥生時代後期には出現していることが明らかとなった。大阪府久宝寺1号墳では定形の割竹形木棺(図1-5)が検出され((財)大阪府文化財センター2003)、形態と構造について重要な情報が蓄積した。

舟形木棺1類は、棺底が全体に緩やかな舟底状で、横断面の曲率が緩く、全体に扁平な形状な木棺である。幅は一端が狭く他端が広いが、軸先と軸の区別がないものである。遺存資料が存在しないため、特に蓋の形態が良くわからない。割竹形木棺より先行して前期前半を中心に西日本の大型古墳に採用されていることが予測される。

良好な遺存資料がないため、竪穴式石椁の粘土棺床の横断面が割竹形木棺に比べ緩いことなどが注目され、滋賀県雪野山古墳の調査において粘土棺床に環状縄掛突起の痕跡を持つ横断面の緩い木棺痕跡(図1-6)が確認され(八日市市教委1996)、これが佐賀県熊本山古墳の舟形石棺(図1-7、佐賀県教委1967)に似ることから、ある種の舟形石棺に類似するのではないかと考えられている。

舟形木棺2類は丸木舟など釣船を意識したもので、軸先と軸を造り分け、小口端部が斜めになるなど大きな特徴がある。従来からその存在は指摘されていたが、特に石崎善久氏は丹後の弥生時代から古墳時代の木棺の痕跡を丹念に検討し、舟の形を呈する木棺を「舟底状木棺」と呼称した。丸木舟との比較から、丸木舟の転用か丸木舟あるいは準構造舟の下部構造を模倣したもので、両小口の平面形が丸みを持つもの、左右対称にならず、一方の小口が鋭角に弧状を呈するA類(筆者のC形式)、A類同様両小口が丸みを持ち、左右対称となるB類(筆者のD形式)、小口が隅丸方形となるC類(筆者のE形式)という3形式に分類した(石崎2001)。筆者も石崎氏の分類基準を基に若干の追加を加え(図2)、全国的に集成した(石橋2013)。今回もこの分類基準を採用する。

弥生時代後期は方形台状墓を中心に丹後に分布の中心があり、古墳時代では静岡県と千葉県を中心とする関東地方に類例が多い。愛知県名古屋市平手町遺跡方形周溝墓Dで弥生時代中期のA形式の事例(図1-8)が確認されており、今後認識が進めば、さらに検出事例が増えることが予想される。

なお箱形木棺の形態については特に東日本では遺存資料が少なく、構造が不明な点が多い。弥生時代の事例については福永伸哉氏の分類(図4)が関東にも援用できると考えている(福永1985)、古墳時代にも同様な箱形木棺の痕跡が存在している事例があり、参考にしたい。



図1 割竹形木棺と舟形木棺の構造



図2 舟形木棺2類の分類

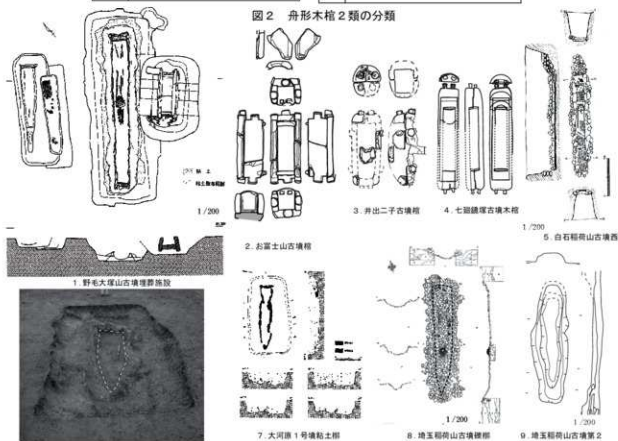


図3 中期古墳の埋葬施設

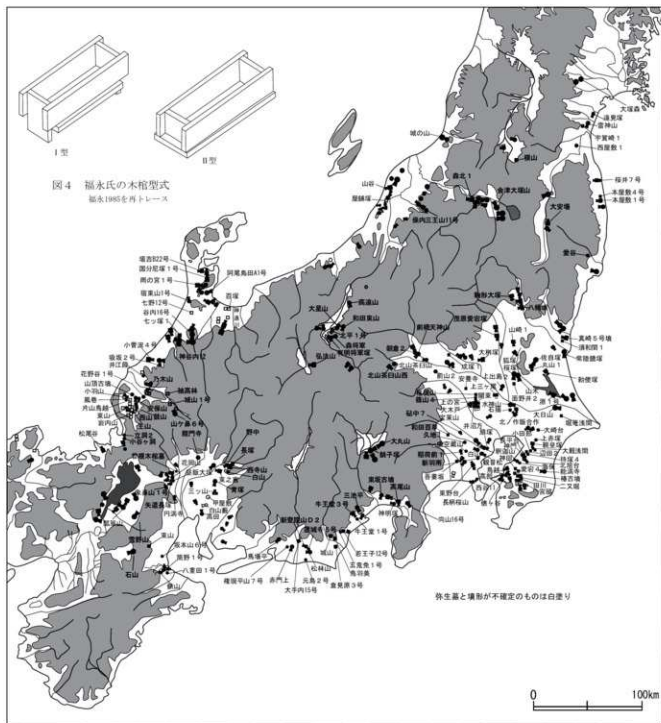


図5 集成古墳位置図

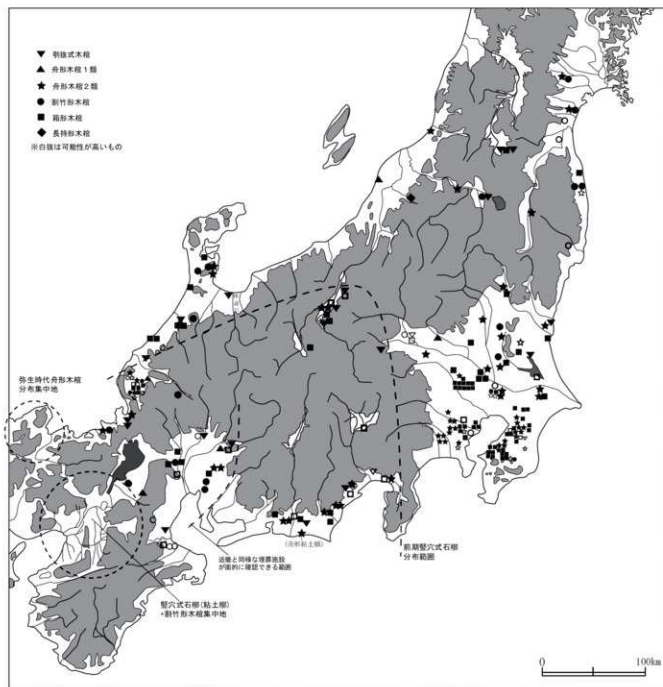


図6 東日本前期古墳木棺形式分布図

上記の木棺形式を念頭に東国の埋葬施設を考えるにあたって、特に木棺直葬の事例については非常に注意が必要である。粘土槨ないし粘土床、あるいは小口に粘土を置いて押さえとする事例については木棺痕跡が通りやすく、棺形式を把握しやすい。一方で木棺直葬の場合、墓壇の形態がそのまま木棺形式に反映しているわけではないことは多くの事例より判明している。墓壇と木棺の間に土をつめ、押さえとする箱形木棺や割抜式木棺の事例は多いので、土層や写真を参考に復元しなければならないが、検討事例の全てが基準を満たしているわけではない。それでもあえて木棺形式図(図6)を作成したのは、遺存木棺や粘土槨の痕跡から舟形木棺2類の存在は明らかで、割竹形木棺とは区別し、今後批判的に検討していただきたいからである。

3. 東日本の前期古墳の埋葬施設の集成

古墳時代の時期区分は和田晴吾氏の成果に拠る(和田1987)。古墳時代に大型古墳が築造された近畿中核(大阪・奈良・京都南部)を便宜的に「畿内」とし、古墳時代の開始とともに形成された首長連合について特に和田晴吾氏の指摘(和田1994)する「畿内首長連合」及びその相対的権力を倭王権とする。なお墳墓における埋葬施設の名称と定義は和田晴吾氏に従い、「棺」、「槨」、「室」の用語を利用する(和田1989)。

また、埋葬施設の図面の掲載にあたり、弥生時代終末期(庄内式期併行)について、北陸地方は方形区画墓(台状墓・周溝墓)とその周縁墓の良好な調査が多く、割抜式木棺と思われる事例は掲載したが、最も普遍的な箱形木棺は掲載していない。関東地方では弥生時代終末期から古墳時代前期の方墳(方形周溝墓)の埋葬施設の判明する事例が千葉県以外に少なく、判明する事例はなるべく図面を掲載した。これは弥生時代の動向を加味して検討できるようにするためである。また、一部中期初頭に下る可能性のある事例も掲載している。

ただし、棺形態分布図については弥生時代終末期の事例は前方後円形墳丘墓(前方後方形墳丘墓)の事例を除き除外し、古墳時代の事例を反映させた。

集成の範囲は太平洋側を三重県以東、日本海側を福井県以東としているが、これは筆者の力量不足で、滋賀県や京都府などの状況まで整理が及ばなかったことによる。

今回の集成で、前方後円墳(含前方後円形周溝墓)50基、前方後方墳(含前方後方形周溝墓)39基、円墳34基、方墳(含む方形区画墓)83基、石槨墓2基(図5)の埋葬施設268基の図面(集成1~15)を掲載した。基本的傾向は前稿で指摘した通り、広範囲に箱形木棺が多数分布し、関東地方や東海地方には、加えて舟形木棺2類が多いことが読みとれる(図6)。愛知県や岐阜県では面的に近畿地方の典型的な埋葬施設である竪穴式石槨や粘土槨、割竹形木棺が確認され、愛知県高田古墳(粘土槨+割竹形木棺)の位置を目安に近畿と同様な埋葬施設の情報が共有される範囲の境界と指摘できる。これはコウヤマキ製木棺の明確な選択的材材範囲の東限である愛知県西部、岐阜県南部(岡林2006)とも対応するものであろう。

箱形木棺の事例が多いのは、弥生時代の方形区画墓(台状墓・周溝墓)からの延長で捉えられる方墳の埋葬施設の事例の多くが箱形木棺であることに理由があるが、大型古墳の箱形木棺の事例も同様の構造の木棺(Ⅱ型木棺か(図4))が復元できる可能性は充分にある。一方で畿内では粘土槨の成立が箱形木棺という棺形式と結びついて成立し、関東地方にも波及した可能性を指摘する上田直弥氏の研究成果があり(上田2015 a・2015 b)、粘土槨+箱形木棺の事例については慎重な検討が必要となる。

舟形木棺2類は弥生時代後期から終末期に日本海沿岸部など北陸地方に事例が多く、古墳時代前期前半にかけて東北・関東地方の前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳と幅広い階層に認めることができ、筆者は畿内の古墳文化の波及のみで説明できないと考える¹⁰⁾。関東地方は粘土槨の多い地域であるが、粘土槨に採

用される事例も多く、粘土槨+割竹形木棺の齊一的波及については成り立たないと考える。

細かく見ていけばさらに細かい地域様相や地域間交流について言及できるが、次稿で今回集成して判明した成果に、堅穴式石槨・粘土槨・木炭槨などの棺を覆う槨の情報を加えて、畿内も含めた地域間の影響関係を考察したいと考える。

4. 中期古墳の埋葬施設の評価

本稿を閉じる前に筆者の立場と東国の中期古墳について予察を述べたい。

古墳時代の棺の機能について筆者は基本的に和田氏の見解に賛同して研究を進めている。氏は古墳時代は血縁関係や婚姻関係といった同族関係が集団と集団との結合の基本原則を示した社会であり、棺は特定の同族ないしは、特定の同族を中心とした地域集団によりその形態や素材が習慣的に定まっており、葬送の場において、同族関係を端的に示すものとして有効に機能し、首長専用の棺が作り出され、階層による棺、槨の使い分けが進むと一層の政治色を強めつつ、複数の地域首長間の同族的結合を保障する制度的習慣として行なわれるようになると推察している(和田1994)。

筆者は基本的に前期に舟形木棺2類と大部分の箱形木棺は階層差も含みつつ東国の首長層の棺として定着したと考えており、この点を踏まえ関東の中期古墳の事例をいくつか取り挙げたい。

多摩川下流域周辺は前期に100m級の前方後円墳が相次いで築造され、中期初頭には帆立貝形前方後円墳の野毛大塚古墳(約82m)が築造される(野毛大塚古墳調査会編1999)。4基の埋葬施設が時期ごとに確認できるのであるが(図3-1)、第1主体部では粘土槨に典型的な割竹形木棺が納められていた。第2主体部には箱形石棺が埋設されており、これは畿内の中期の長持形石棺の影響が及んだと考えられる。

群馬県の太田天神山古墳(前方後円墳208m)やお富士山古墳(前方後円墳125m)の長持形石棺(図3-2)は畿内の竜山石製と比較しても同様の形態・技法が確認され、石工工人が派遣されており、被葬者は倭王権と強い結びつきが確認できる。

一方で、群馬県西部の白石稲荷山古墳(和田6期、前方後円墳140m)の後円部2基の埋葬施設のうち、西側の埋葬施設は舟形の礎床(図3-5)であり(後藤・相川編1936)、木棺が納められたとしたら、舟形木棺2類である可能性は充分ある。また、『辛亥』銘鉄剣が出土したことで著名な埼玉稲荷山古墳(和田9期、前方後円墳120m)の礎床(図3-8)も南側が軸先状に尖り、縦断面からA形式の舟形木棺2類の可能性が高い。第2埋葬施設(図3-9)も同様である(埼玉県教委1980)。ほぼ同時期の古墳として埼玉県大河原1号墳(円墳17.6m)の粘土槨では、稲荷山古墳と類似するA形式の舟形木棺2類(図3-7)が納められていたことが明らかにされ(坂戸市教委2012)、栃木県の中期古墳牧の内34号墳の粘土槨に納められた木棺(図3-6)もその痕跡から同形態に復元⁽⁴⁾できる。これは前期以降も継続して舟形木棺2類が採用されていたことを示すものである。

関東の中期古墳の埋葬施設のこうした様相は二つの重要な視点を与えてくれる。

一つ目は図6の示すように前期は割竹形木棺は限定的な存在であり、中期古墳に割竹形木棺や長持形石棺、長持形石棺を模倣した箱形石棺など倭王権と関係のある棺の採用は前期からの段階的な棺情報の刷新と捉えるべきではなく、中期に倭王権との直接的間接的な関係を強め、畿内のな棺を使用したことを示す。

二つ目は、中期古墳も継続して舟形木棺2類と箱形木棺が使用されており、前期と同様大型古墳から小円墳まで幅広い階層で確認できることであろう。

この二つの側面は相反するものではなく、表裏の関係にある。

これを示してくれるのが群馬県の舟形石棺である。群馬県西部では5世紀後半に舟形石棺が採用されるが、当初(和田8期)は岩鼻二子山古墳(前方後円墳115m)など限定的で、形態は長持形石棺を模倣したもので倭王権との関係や権威を示したものであろう。次の和田編年9期の井出二子山古墳(前方後円墳108m)の段階で群馬県西部の各地の古墳に舟形石棺が階層性をもって採用され、舟形石棺地域圏(右島1990・右島・徳田1998)が成立する。

井出二子山古墳の舟形石棺(図3-3)は平面形が隅丸方形で、形態の系譜は栃木県七廻鏡塚古墳(円墳約30m、図3-4)などの舟形木棺2類の形態を基にしたものである。地域首長連合内の同族結合を象徴する棺の形態は伝統的な舟形木棺2類に求められたことが注目されよう⁹³⁾。

筆者は、地域首長連合を代表する首長は各地の地域首長連合や倭王権との関係を直接的・間接的に結んでおり、その時の被葬者の立場が棺に表象されると考えており、倭王権側との関係(擬制なものも含む)が強化され、その関係や権威を倭王権や地域首長連合内に示す必要性のある時期は畿内のな棺を採用し、地域首長連合内の同族結合や舟形木棺を採用する地域首長連合との関係を示す際に在地的な舟形木棺2類を採用することがあり、それが群馬県西部の舟形石棺の二つの形態に表出していると考え⁹⁴⁾。また、倭王権の影響力も時期により強弱があることが指摘されており(小野山1970)、地域によっても影響力が異なることも念頭に置く必要があろう。

5. おわりに

本来ならば中期古墳について触れずに、次稿に継続する予定であったが、東国では中期古墳の埋葬施設の研究が少なく、前期の研究から独立しているように感じたので、蛇足を承知で予察を加えたものである。中期古墳の埋葬施設には堅穴式小石塚や箱形石棺などさらに多様な状況も示すが、次稿の成果を踏まえてどのような階層や集団に採用されるのか、今後検討を加えたい。

註

- (1) 本稿の東日本ないし東国は近畿地方以東というおおまかな範囲を示す用語として使用している。
- (2) 土器様相や地域最大級の大型前方後円墳の出現など前期後半の画期の重要性は筆者も認めているが、粘土槨+割竹形木棺というように棺形態の情報まで刷新されたという理解に再検討が必要なのである。
- (3) 岡林氏が「古墳の棺柩の流れと弥生時代以来の姿で存続していたいわば在地的な埋葬施設の流れが相互に影響を及ぼしあいながら、一定の階層性、地域性をもって重層的に存在した姿が、前・中期の堅穴式の埋葬施設」と指摘(岡林2012, p. 278)した具体的様相を把握するのが前稿からの目的である。
- (4) 小山市教育委員会秋山隆徳氏から多くの点をご教授いただき、小山市教育委員会から画像の掲載許可を頂いた。
- (5) 群馬県の舟形石棺については特に石橋2013に詳説した。
- (6) このような様相は前期から確認できると推測しており、和田編年2期に築造された石川県分尾塚1号墳(前方後円墳約52.5m)がある種の木棺内部に割竹形木棺を納めるのに対し、後続する2号墳(前方後円墳33m)が異なる形態の棺と推測(和田1984)される棺(舟形木棺2類か)であることや、和田編年3期後半から4期に築造された墳丘長64mの前方後円墳雨の宮1号墳が典型的な粘土槨と割竹形木棺であるのに対し、ほぼ同時期に築造され、同様の規模である富山県阿尾島田A1号墳(前方後円墳70m)が舟形木棺2類であることは、多様な地域関係の中での被葬者の立場やその後の立場の変化を棺が端的に示していると考えている。かならずしも畿内のな棺が採用されたとして

もその後に継続して定着するわけではない。

参考文献

- 赤塚次郎 2001「付論6 墳丘墓と槽形木棺墓について」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集 川原遺跡』
- 石橋 宏 2013「古墳時代石棺秩序の復元的研究」六一書房
- 石橋 宏 2015「研究ノート 東日本前期古墳埋葬施設研究覚書」『研究紀要』第23号、(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 石崎善久 2001「舟底状木棺考一丹後の割技式木棺一」『京都府埋蔵文化財論集第4集、(財)京都府埋蔵文化財センター伊勢崎市 1987『伊勢崎市史』通史編1、原始古代中世
- 岩崎卓也 1987「埋葬施設からみた古墳時代の東日本」『考古学叢考 中』吉川弘文館
- 上田直弥 2015 a「粘土椽の展開課程とその画期一畿内の事例を中心に」『考古学研究』第62巻第3号、考古学研究会
- 上田直弥 2015 b「粘土椽の展開とその背景」『ヒストリア』第253号、大坂歴史学会
- 大平町教育委員会 1974『七廻り饒塚古墳 栃木県下都賀郡大平町』
- 岡林孝作 2006「古墳時代木棺の用材選択に関する研究 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)」
- 岡林孝作 2008「割竹形木棺の小口部構造をめぐる問題点」『菅谷文則編 王権と武器と信仰』同成社
- 岡林孝作 2009「I 遺存木棺資料による古墳時代木棺の分類」『古墳時代におけるコウヤマキ材の利用実態に関する総合的研究 平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)』
- 岡林孝作 2012「古墳各論 I 壙穴系埋葬施設(含棺)」『古墳時代研究の現状と課題』上、土生田純之・亀田修一編、同成社
- 小野山 節 1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号、考古学研究会
- 鹿西町教育委員会 2005『史跡雨の宮古墳群 国指定史跡雨の宮古墳群整備事業に伴う発掘調査報告書』
- 後藤守一・相川龍雄編 1936『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告 第3輯 多野郡平井村白石稲荷山古墳』群馬県
- 小林行雄 1959「こうやまき」『図解 考古学辞典』水野清一・小林行雄編、東京創元社
- 埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』
- 佐賀県教育委員会 1967『佐賀県文化財調査報告書第16集 熊本山船型石棺墓』
- 坂戸市教育委員会 2012『大河原遺跡2』
- (財)大阪府文化財センター 2003『久宝寺遺跡・龍華地区発掘調査報告書V』
- 末永雅雄・島田 暁・森 浩一 1954『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会
- 高崎市教育委員会 2009『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書』
- 名古屋市健康福祉局 2010『愛知県名古屋市 平手町遺跡第6次発掘調査報告書』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008『橿原考古学研究所研究成果 第9冊 下池山古墳の研究』
- 日本考古学協会編 1988『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』、学生社
- 野毛大塚古墳調査会編 1999『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会
- 福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号、考古学研究会
- 野洲市教育委員会 2010『野洲市埋蔵文化財調査概要報告書 平成21年度』
- 右島和夫 1990「古墳からみた五・六世紀の上野地域」『古代文化』第42巻7号、古代学協会
- 右島和夫・徳田誠志 1998「東国における石製模造品出土古墳」『高崎市史研究』第9号、高崎市史編さん委員会
- 八日市市教育委員会 1996『雪野山古墳の研究 報告編 考察編』雪野山古墳発掘調査団編
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐる」『考古学研究』第34巻第2号、考古学研究会

和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』、都出比呂志編、講談社

和田晴吾 1994「古墳築造の諸段階と政治的階層構成—五世紀代の首長制の体制に触れつつ—」『古代王権と交流5 ママト王権と交流の諸相』、荒木敏夫編、名著出版

和田晴吾 2009「古墳の地界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集、国立歴史民俗博物館

【集成図出典報告書】

三重県

一志町・桶野町遺跡調査会 1991『天花寺山』、一志町教育委員会

津市教育委員会 1970『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』

松坂市 1978『松坂市史』第2巻・資料編、考古

松坂市教育委員会 1981『八重田古墳群発掘調査報告書』

三重県 2005『三重県史』資料編考古1

岐阜県

大垣市 2011『大垣市史』考古編

大垣市教育委員会 1997『曾根八千町遺跡』

可見市 2005『可見市史』第1巻、通史編、考古・文化財

関西大学考古学研究室 1968「岐阜県円満寺山古墳調査報告 岐阜県海津郡南濃町庭田」『関西大学考古学研究年報』2、

関西大学考古学研究会

岐阜県可見市教育委員会 1999『前波の三ツ塚』

岐阜市 1979『岐阜市史』資料編、考古・文化財

藤井治左衛門 1929「岐阜県不和郡青墓村大字矢道長塚古墳」『考古学雑誌』第19巻第6・7・9号、日本考古学会

養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1998『養老町埋蔵文化財調査報告第2冊 象鼻山1号古墳—第2次発掘調査の成果—』

愛知県

愛知県 2005『愛知県史』資料編3、考古3、古墳、愛知県史編さん委員会

赤塚次郎 2005「13 三ツ山古墳群」『愛知県史』資料編3、考古3、古墳、愛知県史編さん委員会

赤塚次郎 2005「14 小木古墳群」『愛知県史』資料編3、考古3、古墳、愛知県史編さん委員会

大山市教育委員会 2014『大山市埋蔵文化財調査報告書第12集 史跡 東之宮古墳』

小牧市教育委員会 1980『三ツ山古墳』

南山大学人類学研究所 1977『人類学研究所紀要第6号 白山藪古墳発掘調査報告』

服部哲也 2005「122 高田古墳」『愛知県史』資料編3、考古3、古墳、愛知県史編さん委員会

静岡県

芦川忠利 2013「三島市向山16号墳の調査成果」『駿河における前期古墳の再検討』、静岡県考古学会

磐田市教育委員会 1973『磐田市竹之内原古墳発掘調査記録報告』

後藤守一 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』、静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会

後藤守一 1958『吉原市の古墳』、吉原市教育委員会

財団法人浜松文化協会 1988『妙法塚古墳』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『元島遺跡』1

- 静岡県 1990『静岡県史』資料編2、考古2
- 静岡県教育委員会 1968『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳一個別報告編一』
- 静岡県立浜名高校・静岡県浜北市教育委員会 1966『遠江赤門上古墳』
- 静岡県磐田市教育委員会 2006『新豊院山道跡発掘調査報告書Ⅲ 新豊院山古墳群 D地点の発掘調査』
- 島田市教育委員会 1981『城山古墳第3次調査概報』
- 豊岡村教育委員会 2000『大手内古墳群』
- 沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
- 藤枝市教育委員会 1983『志太広域都市計画蓮華寺池公園事業に伴う文化財調査概要 若王子・釣瓶落古墳群』
- 焼津市教育委員会 1981『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
- 焼津市教育委員会 1982『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
- 長野県**
- 更埴市森林軍塚古墳館編 2002『更埴市内前方後円墳範囲確認調査報告書一有明山特軍塚古墳・倉科特軍塚古墳一』
- 明治大学和田東山古墳群発掘調査団 1995『和田東山古墳群一和田東山古墳群第3号墳発掘調査概報一』
- 長野県考古学会 1993『信濃における古墳出現期の現状と課題』
- 長野県更埴市教育委員会 1992『史跡森林軍塚古墳一保存整備事業発掘調査報告書一』
- 長野県更埴市教育委員会 1992『史跡森林軍塚古墳一保存整備事業発掘調査報告書一』
- 長野県埋蔵文化財センター 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 大星山古墳・北平1号墳』
- 長野県埋蔵文化財センター 1994『年報10 東平古墳群』
- 中野市教育委員会 2000『長野県中野市 高遠山古墳 発掘調査概報』
- 松本市教育委員会 1978『弘法山古墳』
- 山梨県**
- 中道町 1975『中道町史』
- 茂木雅博編 2007『伊斐 大丸山古墳 一埋葬施設の調査一』、博古研究会
- 神奈川県**
- 安藤広道 2015「観音松古墳の研究2－新発見の写真と図面からみた墳丘と主体部の形態と構造－」、『史学』第85巻第1・2・3号、三田史学会
- 江藤 昭 1988『吾妻坂古墳 前期古墳の調査概報』、吾妻坂古墳道跡調査団
- 坂本 彰 1986「第5章 古墳時代 1、稲荷前古墳群」『横浜緑区史』資料編第2巻
- 柴田常忠・森貞成 1953『日吉加瀬白山古墳』、三田史学会
- 逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 2012『国指定史跡 長柄松山古墳群第1号墳発掘調査報告書』
- 玉川文化財研究所 2006『横浜市港北区 新羽南道跡・新羽南古墳』
- 日本産業史研究所 1990『横浜市緑区虚空蔵山道跡』
- 久地伊屋之免道跡調査団編 1987『川崎市高津区久地伊屋之免道跡、高津区書友の会郷土史研究部 横浜市ふるさと財団 1992「東野台古墳群調査報告書」『調査研究集録』第9冊
- 東京都**
- 扇塚古墳発掘調査団編 2001『扇塚古墳発掘調査報告書』、扇塚古墳発掘調査団
- 東京都指定史跡宝菜山古墳調査会 1998『東京都指定史跡宝菜山古墳』

多摩都市計画道路事業 1・3・1号線関連遺跡調査団編 1986『東京都多摩市和田・百草遺跡群』、多摩都市計画道路事業 1・3・1号線関連遺跡調査会

野本孝明 2011『木炭標考』『國學院大學学術資料館考古学資料館紀要』第27輯、國學院大學考古学資料館

千葉県

市原市教育委員会 1968『南大広遺跡・海保古墳群』

市原市教育委員会・(財)市原市文化財センター 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』

市川道行 2003『246 北ノ作古墳群』『千葉県の歴史』資料備考古2、(財)千葉県資料研究財団編、千葉県

大塚初重 1949『上総能満寺古墳発掘調査報告』『考古学集刊』第1巻第3号

上総因分寺台遺跡調査団 1976『南向原-上総因分寺台遺跡調査報告Ⅱ-』

木更津市教育委員会 1990『請西遺跡群発掘調査報告書』

木更津市教育委員会 2001『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』

木更津市教育委員会 2002『高部古墳群Ⅰ千葉県木更津市千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』

君津市文化財センター 1998『常代遺跡群』『君津市文化財センター研究紀要』8

(財)市原市文化財センター 1990『北旭台遺跡』

(財)市原市文化財センター 1999『市原市大瓶茂間様古墳調査報告』

(財)市原市文化財センター 2006『市原市長平台遺跡』

(財)印旛郡市文化財センター 1988『神々廻遺跡群』

(財)君津郡市文化財センター 1988『小浜遺跡群Ⅰ 俵ヶ谷古墳群』

(財)君津郡市文化財センター 1988『宮脇遺跡』

(財)君津郡市文化財センター 1993『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』

(財)君津郡市文化財センター 1995『神田遺跡・神田古墳群』

(財)君津郡市文化財センター 1996『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』

(財)君津郡市文化財センター 1997『谷の台遺跡Ⅱ』

(財)君津郡市文化財センター 1998『谷の台遺跡』

(財)君津郡市文化財センター 2000『-千葉県木更津市板井- 西谷古墳群・西谷遺跡』

(財)山武郡市文化財センター 1997『森の台遺跡(北野支群)』

(財)千葉県資料研究財団 2003『千葉県の歴史』資料備考古2、千葉県

(財)千葉県都市公社 1974『市原市大瓶遺跡』

(財)千葉県文化財センター 1974『菊岡遺跡』

(財)千葉県文化財センター 1977『東寺山石神遺跡』

(財)千葉県文化財センター 1978『佐倉市飯合作遺跡』

(財)千葉県文化財センター 1982『千葉県東南部ニュータウン13-上赤塚1号墳・狐塚古墳群』

(財)千葉県文化財センター 1992『椿古墳群3号墳の調査について』『研究連絡誌』36

(財)千葉県文化財センター 1993『北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』

(財)千葉県埋蔵文化財センター 1994『石揚遺跡』

(財)千葉県埋蔵文化財センター 2001『千葉県文化財センター研究紀要』21

山武町教育委員会 1994『島戸境1号墳』

白井久美子 2003『209 神門古墳群』『千葉県の歴史』資料備考古2、(財)千葉県資料研究財団編、千葉県

杉山晋作 1972『古墳時代研究』1

杉山晋作 1973「千葉県木更津市手古塚古墳の発掘調査速報」『古代』第56号

杉山林謙 2003「183 鳥越古墳」『千葉県の歴史』資料編考古2、(財)千葉県資料研究財団編、千葉県

田川道跡群発掘調査会 1980『田川道跡群発掘調査報告書』

千葉県教育委員会 1970『千葉県香取郡下総町・大日山古墳』

千葉県教育委員会 1996『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』

千葉市史編纂委員会 1976『千葉市史』資料編1、原始・古代・中世、千葉市

野田市教育委員会 1991『上三ヶ尾宮前』

堀籠浅間古墳群調査会 1984『堀籠浅間古墳』

茨城県

茨城県 1994『茨城県史料』考古資料編、古墳時代

岩井市教育委員会 1975『上出島古墳群』

岩瀬町教育委員会 1969『常陸孤塚古墳』

大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勸使塚古墳」『考古学集刊』第2巻第3号

上川名宏他 1972『茨城県筑波町山木古墳』、茨城考古学会

(公財)茨城県教育財団 2014『面野井古墳群』

後藤守一・大塚初重 1957『常陸丸山古墳』、丸山古墳顕彰会

斎藤忠 1974「佐自塚古墳」『茨城県史料』考古資料編、古墳時代

増田清一編集代表 1981『筑波古代地域史の研究 昭和54年度～56年度文部省特定研究経費による調査研究概要』、筑波大学

茂木雅博 1972『常陸須和間遺跡』、雄山閣

茂木雅博 1976『常陸浮島古墳群』、浮島研究会

茂木雅博・高橋和成 2006『常陸真崎古墳群』茨城大学人文学部考古学研究室編、東海村教育委員会

栃木県

宇都宮市教育委員会 1990『茂原古墳群』

前沢輝政 1977『山王寺大樹塚古墳』、早大出版部

三木文雄・村井嘉雄 1957『那須八幡塚』

三木文雄編著 1986『那須駒形大塚』、吉川弘文館

山ノ井清人 1984「1 山崎古墳群」『真岡市史』第1巻考古資料編、真岡市

群馬県

群馬県史編さん委員会 1981『群馬県史』資料編3、原始古代3

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『成塚山古墳群』

前橋市教育委員会 1970『前橋天神山古墳図録』

埼玉県

浦和市道跡調査会 1986『井沼方道跡発掘調査報告書(第8次)』

浦和市道跡調査会 1994『井沼方道跡発掘調査報告書(第12次)』

江南町 1995『江南町史』資料編1、考古

- 大宮市遺跡調査会 1988『中里遺跡・麓山遺跡』
上尾市教育委員会 1978『栗師耕地前遺跡』
上福岡教育委員会 1984『郷土資料第30集埋蔵文化財の調査(VI)』
埼玉県史編さん室 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』
埼玉県教育委員会 1977『東谷・前山2号墳』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『与野市 小村田西/小村田/関東』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『大宮市 上ノ宮遺跡』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009『鴻巣市 安養寺古墳群』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『さいたま市 大木戸遺跡II』

福島県

- 伊藤信夫・伊藤文三 1964『会津大塚山古墳』、会津若松市史出版委員会
いわき市教育委員会 1985『愛谷遺跡 第1編』
郡山市教育委員会 1998『大安場古墳群-第2次発掘調査報告-』
福島県原町市教育委員会 2001『板井古墳群上沖佐支群7号墳発掘調査報告書』
法政大学文学部考古学研究室 1985『元屋敷古墳群の研究』

宮城県

- 仙台市教育委員会 1983『史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報』
辻 秀人 2008「大塚森古墳の研究」『歴史と文化』東北学院大学論集第43集
角田市教育委員会 1992『西屋敷1号墳・吉ノ内1号墳発掘調査報告書』
宮城県教育委員会 1980『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳』

福井県

- 青木豊昭 1986「108川島古墳群」『福井県史』資料編13、考古、本文編
大野市教育委員会 1980『大野市文化財調査報告第1冊 山ヶ鼻古墳群』
大野市教育委員会 1993『大野市文化財調査報告第5冊 山ヶ鼻古墳群II』
斉藤 優 1960『足羽山の古墳』
清水町教育委員会 2002『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』
清水町教育委員会 2003『風巻神山古墳群 風巻丘陵における古墳の調査』
清水町教育委員会 2004『片山島越墳墓群・方山真光寺跡塔址』
福井県教育委員会 1976『安保山古墳群』
福井県教育委員会 1976『岩内山遺跡』
福井県教育委員会 1977『立洞2号墳・山の上1号墳』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 1999『袖高林古墳群』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 2000『城山古墳群』
清水町教育委員会 2002『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』
清水町教育委員会 2003『風巻神山古墳群 風巻丘陵における古墳の調査』
清水町教育委員会 2004『片山島越墳墓群・片山真光寺跡塔址』
福井市立郷土歴史館 2010『小羽山墳墓群の研究 越地方における弥生時代墳墓の研究 資料編』
福井市立郷土歴史館 2010『小羽山墳墓群の研究 越地方における弥生時代墳墓の研究 研究編』

- 鯖江市教育委員会 1967『福井県鯖江市 王山・長泉寺山古墳群』
 鯖江市教育委員会 1973『鯖江市 西大井古墳群』
 鯖江市教育委員会 1987『鯖江市埋蔵文化財調査報告 西山古墳群』
 福井県 1986『福井県史』資料編13、考古 本文編・図版編
 福井市 1990『福井市史』資料編1、考古
 福井市教育委員会 1965『鼓山古墳発掘調査報告書』
 福井市教育委員会 2012『福井市古墳発掘調査報告書Ⅰ 酒生古墳群・花野谷古墳群・熊野山古墳群・足羽山古墳群・西大味古墳群』

森川昌和 1986『113小谷ヶ洞古墳群』『福井県史』資料編13 考古 本文編

若狭三方縄文博物館 2006『松尾谷古墳—前方後方墳の発掘調査—』

石川県

- 石川県教育委員会 1974『金沢市セツ塚墳墓群』
 石川県立埋蔵文化財センター 1997『宿東山遺跡』
 石川県立埋蔵文化財センター 1997『垣吉遺跡』
 加賀市教育委員会 1990『吸坂丸山古墳群』
 鹿西町教育委員会 2005『史跡 雨の宮古墳群』
 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター） 2004『石川県金沢市神谷内古墳群C群』
 七野古墳群発掘調査会 2010『七野墳墓群発掘調査報告書』
 田嶋明人 1988「小菅波4号墳」『定形化する古墳以前の墓制』第Ⅱ分冊—近畿、中部以東—埋蔵文化財研究会
 和田晴吾 1984「石川県国分尼塚1・2号墳」『月刊 文化財』11号

富山県

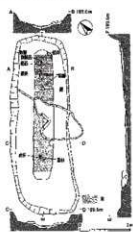
- 富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
 富山大学人文学部考古学研究室・小矢部市教育委員会 1989『谷内16号墳』
 富山大学人文学部考古学研究室編 2007『阿尾島田古墳群の研究—日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究—』
 米見市教育委員会 2001『柳布尾山古墳 第3次調査の成果』

新潟県

- 三条市教育委員会 1989『保内三王山古墳群 測量・発掘調査報告書』
 胎内市教育委員会 2013『第1回城の山古墳シンポジウム 眠りから覚めた城の山古墳』
 寺泊町教育委員会 2004『新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』
 新潟大学考古学研究室編 1993『越後山古墳』新潟県巻町教育委員会

山形県

- 米沢市教育委員会 2000『遺跡詳細分布調査報告書第13集別冊 横山古墳』



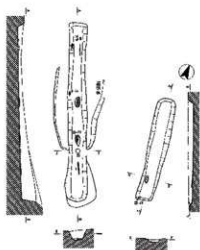
三重縣東山古墳



坂本山6号墳

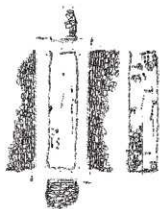


礪山古墳

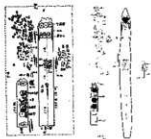


八重田1号墳第1

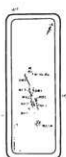
同第2



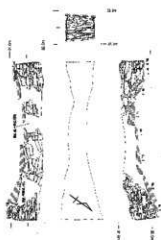
嵯峨鹿門法寺古墳



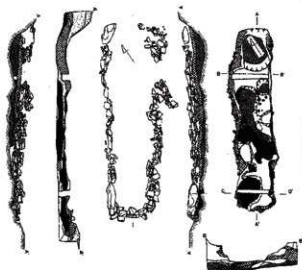
矢道長塚古墳



春日山1号墳



春日大塚古墳

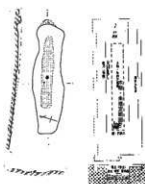


花岡山古墳

管根S22



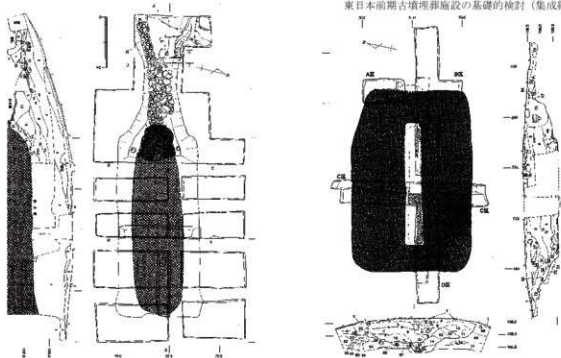
鹿門寺1号墳



鹿門寺13号墳

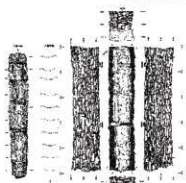
舟橋山白山古墳



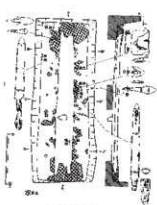


城原馬前波長塚古墳後部

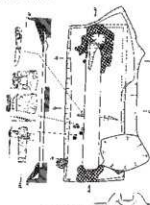
前波長塚古墳前部



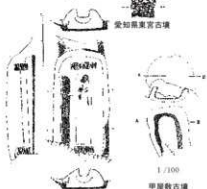
愛知馬塚古墳



三ツ山1号墳



三ツ山2号墳



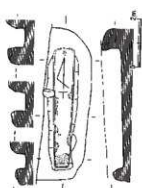
白山古墳

1/100

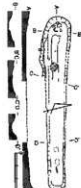
甲屋敷古墳



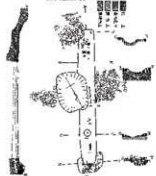
高野古墳



静岡馬塚平古墳



権現平山第7号墳

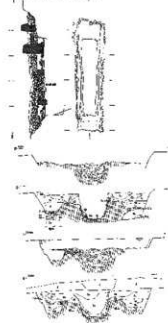


井門上古墳

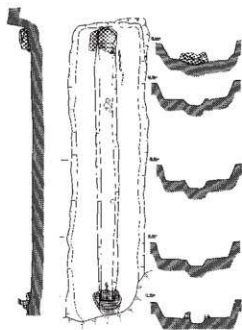


大平内15号墳

集成2



新豊院D-2号墳



遠威寺5号墳

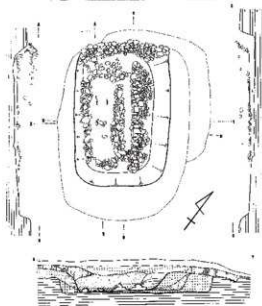


松林山古墳



元鳥古墳
1/100

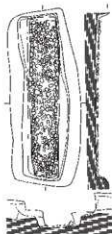
城山古墳



僧正原3号墳



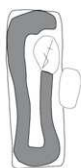
高羽美古墳



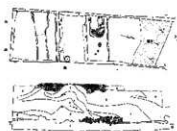
玉免1号墳



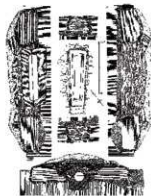
若王子12号墳



牛玉堂1号墳



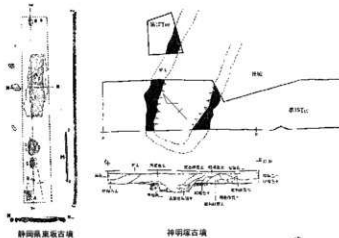
牛玉堂3号墳



三池平古墳

集成3

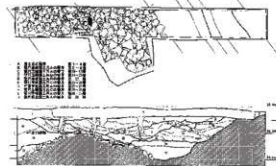




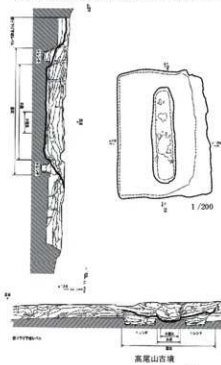
神岡風東墓古墳

神明塚古墳

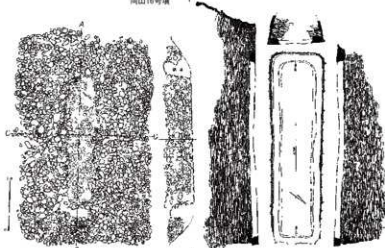
④



向山16号墳



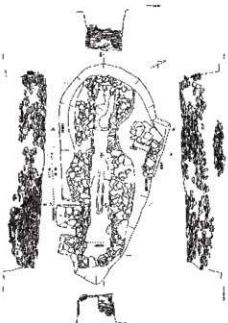
高麗山古墳



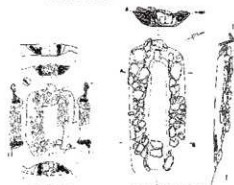
長野県弘法山古墳



森野塚古墳



有明野塚山古墳



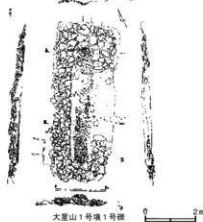
北平1号墳



大壘山3号墳1号石部

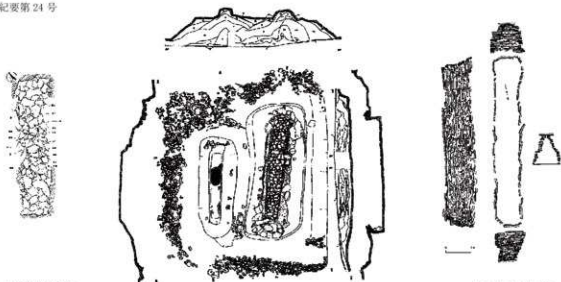


大壘山3号墳2号石部



大壘山1号墳1号墳

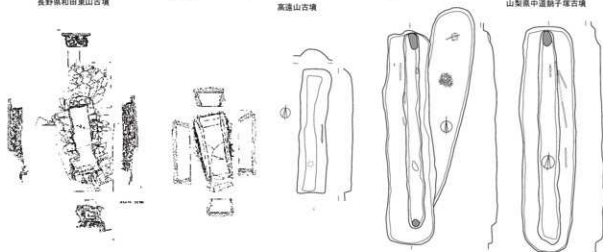
集成4



長野県和田原山古墳

高遠山古墳

山梨県中道獅子塚古墳



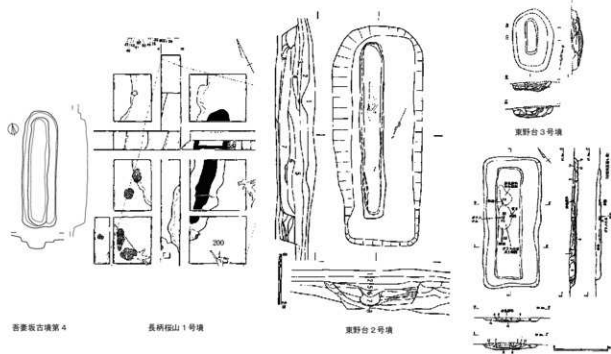
大丸山古墳石部

大丸山古墳石棺

神奈川県吾妻坂古墳第1

吾妻坂古墳第2

吾妻坂古墳第3



吾妻坂古墳第4

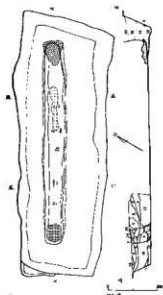
長柄柗山1号墳

東野台2号墳

東野台3号墳

新羽南古墳

集成5



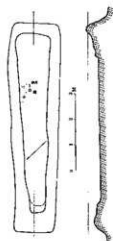
虚空蔵山古墳2号



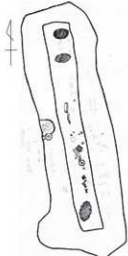
神奈川県虚空蔵山古墳1号



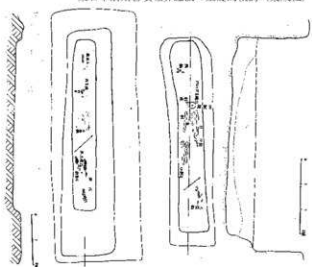
加瀬白山古墳南粘土層



加瀬白山古墳前方粘土層

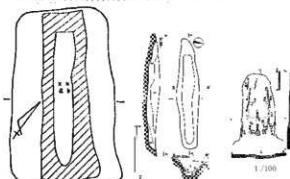


観音粘土古墳粘土層



加瀬白山古墳北粘土層

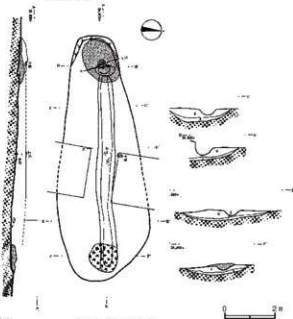
加瀬白山古墳木炭層



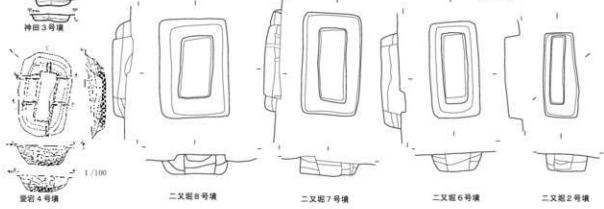
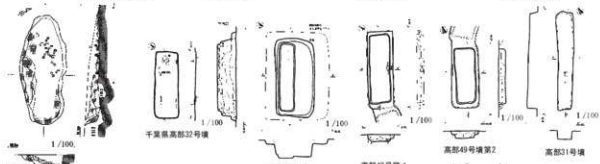
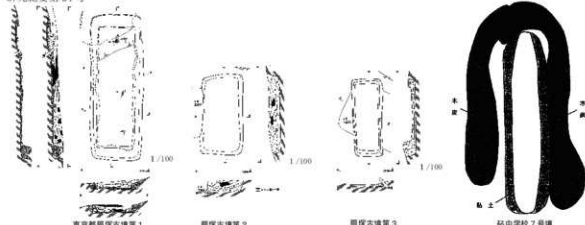
久地伊羅之免古墳2号 東京都宝塚山古墳



稲荷前1号墳

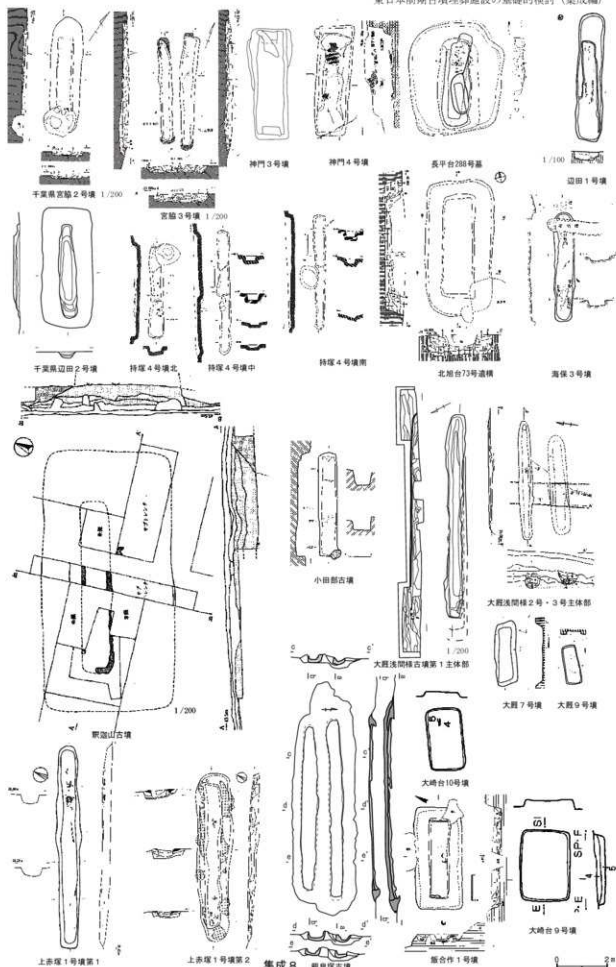


久地伊羅之免古墳1号



集成7







千栗原大日山古墳

堀籠流間1号墳

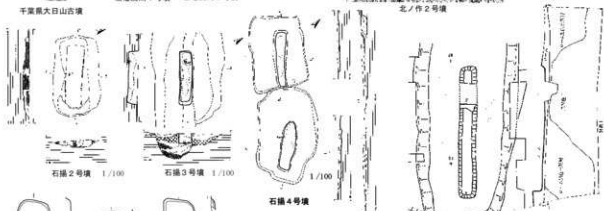
堀籠流間2号墳

木炭

北ノ作1号墳

北ノ作2号墳

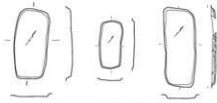
石籠1号墓 1/100



石籠2号墳 1/100

石籠3号墳 1/100

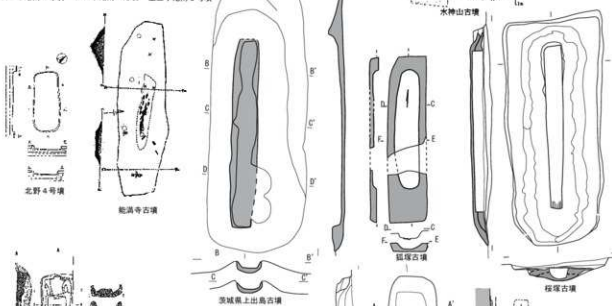
石籠4号墳



上三ヶ屋南1号墳

上三ヶ屋南2号墳

上三ヶ屋南3号墳



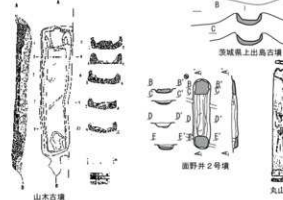
北野4号墳

龍満寺古墳

水神山古墳

狐塚古墳

塚塚古墳



山本古墳

浪城系上出島古墳

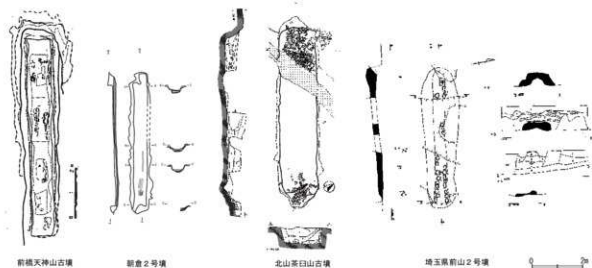
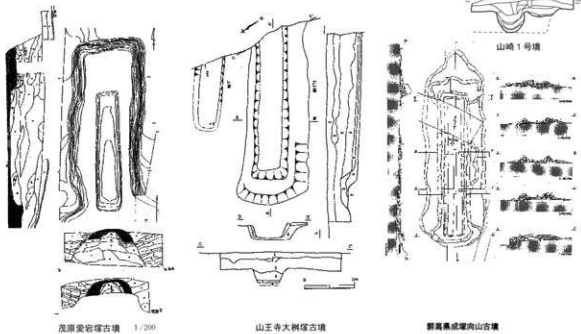
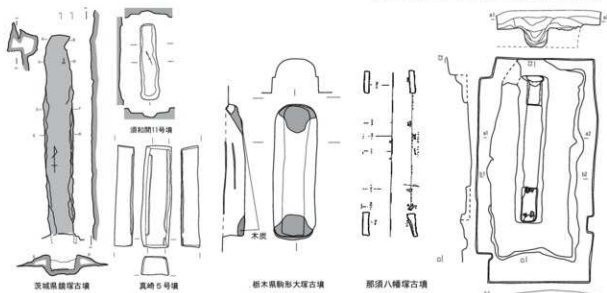
面野井2号墳

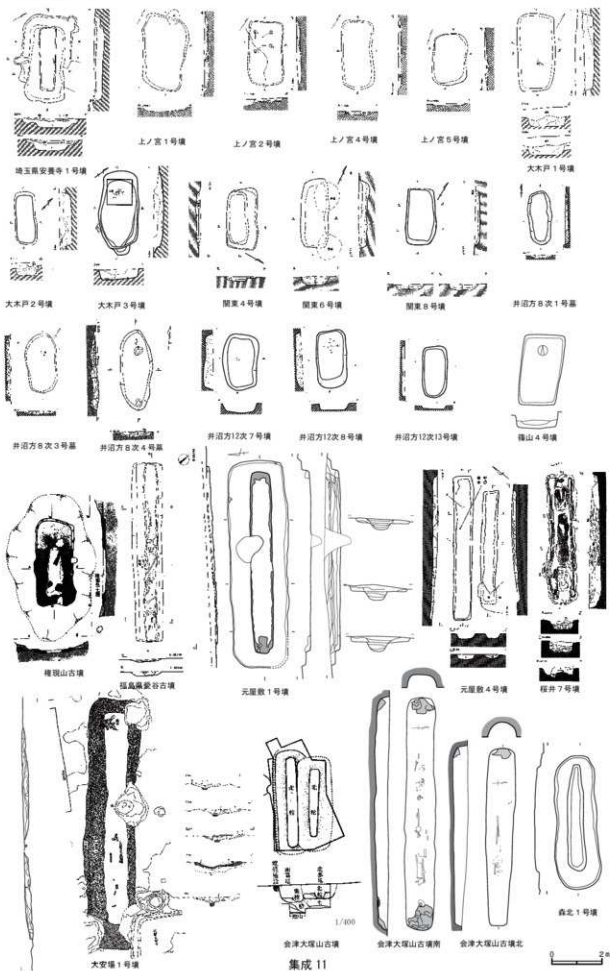
丸山1号墳



源1号墳

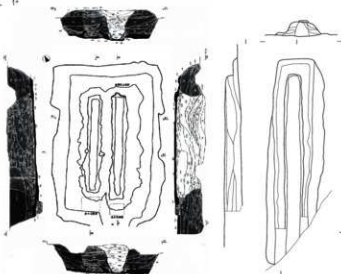
勸使塚古墳





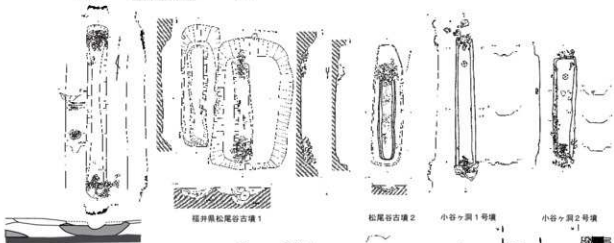


宮城縣遠見塚古墳



大塚森古墳

西屋敷1号墳



福井縣松尾谷古墳1

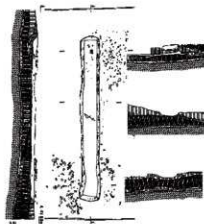
松尾谷古墳2

小谷ヶ岡1号墳

小谷ヶ岡2号墳



宇賀崎1号墳



立沢2号墳



岩内山11号墓



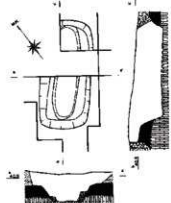
岩内山9号墓



岩内山17号墓



岩内山石棚墓

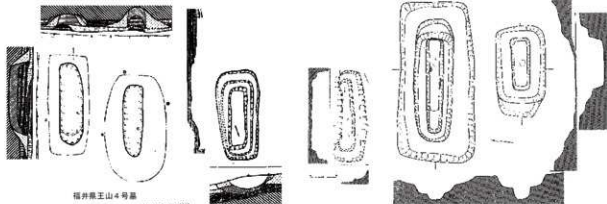


西山1号墓



西山3号墓



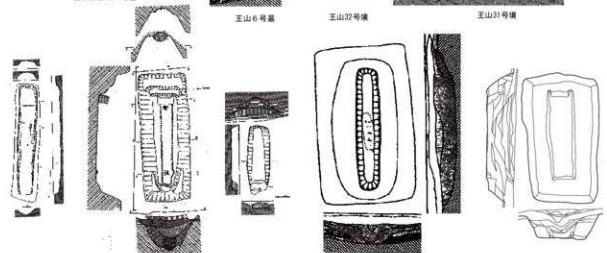


福丹麻王山4号墓

王山6号墓

王山22号墓

王山31号墓



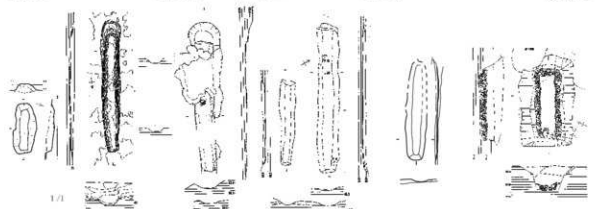
高山2号墓

高山3号墓1

高山3号墓第2

高山4号墓

小羽山50号墓



小羽山33号墓

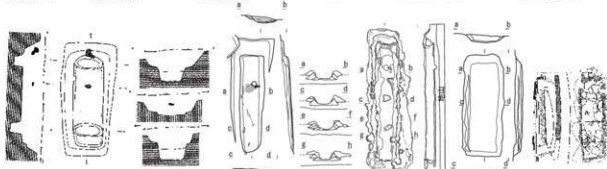
小羽山2号墓

小羽山12号墓

小羽山25号墓

風巻古神山4号墓

片山鳥越5号墓



栗山1号墓

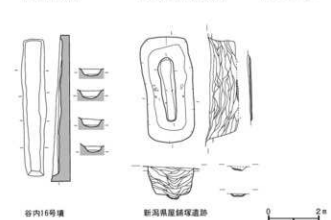
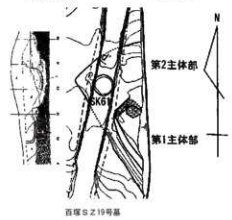
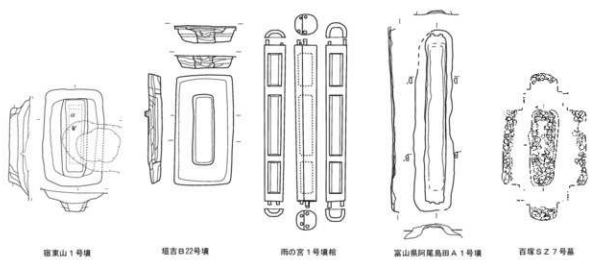
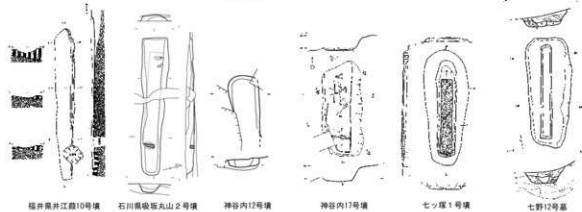
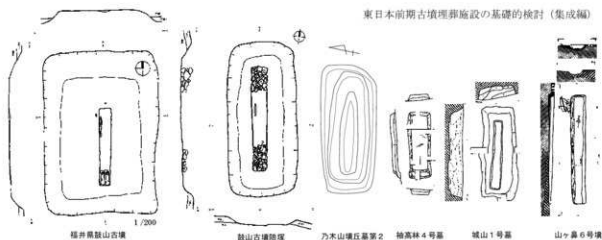
花野谷1号墓

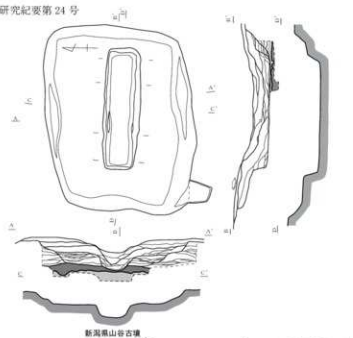
安保山1号墓

安保山2号墓

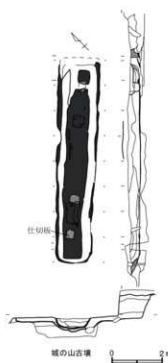
山頂古墳



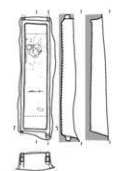




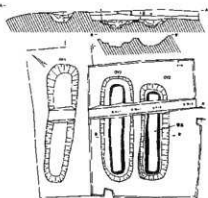
新高原山古墳



城の山古墳



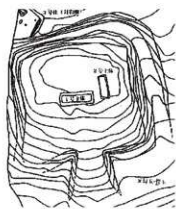
保内三王山111号100



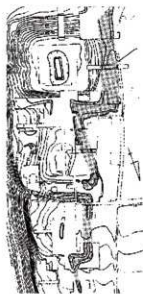
山形縣横山古墳



佐白塚古墳埋葬施設(茨城県1974より引用)



石川縣小菅渡4号墳



石川縣園分1号墳・同2号墳



茨城県佐白塚古墳

1/1000

栃木市都賀町愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪

岡 山 亮 子・曾 我 真 実 子

はじめに	4 分析
1 遺跡の位置及び概要	5 考察
2 栃木県内の低位置突帯埴輪と愛宕塚古墳の位置付け	おわりに
3 資料報告	

栃木市都賀町木所在の愛宕塚古墳より採集された未報告の低位置突帯埴輪について報告する。本資料群で完形品は無い。しかし未報告であること、従来の低位置突帯埴輪の集成ではみられない赤津川流域に所在すること、旧都賀町で唯一の前方後円墳から出土したことから資料報告をおこなうこととした。また低位置突帯埴輪は類例が多くない。そのため筆者の覚え書きとして、低位置突帯埴輪の分析・検討をおこなった。

はじめに

今回報告する資料は、栃木市都賀町木に所在する愛宕塚古墳^①から採集された埴輪である。県道栃木栗野線拡幅工事の際に墳丘西側裾部より採集され、栃木市都賀歴史民俗資料館の収蔵庫内に所蔵されていた。本資料は栃木市教育委員会が主体となって実施した栃木市遺跡分布調査の際に存在を確認し、調査に参加した國學院大學栃木短期大学が部分的に整理作業を行った。また、筆者も調査補助員として調査に参加していたため本資料の整理報告を行うこととなった。埴輪は段ボール2箱に水洗いせずに収容されていた。後述するが、資料は底部から口縁部まで一連の完形資料は無く、全体長は把握できない。しかし、底部の観察から低位置突帯^②を有する埴輪が含まれていることが判明した。また愛宕塚古墳は、旧都賀町で唯一の前方後円墳で、墳長80m級の可能性を指摘される重要な古墳でありながら史跡指定や墳丘測量がされていない。そのため西側は道路に、北側は葬儀場及び墓地により削平を受けている。本古墳の位置付けをおこなう必要がある。そして出土した埴輪は従来の研究で集成されている低位置突帯埴輪の分布では確認されていない。そのため所蔵資料の中から報告遺物を抽出し、紙面の許す限り拓本・実測図及び事実に記載の報告をおこなう。また低位置突帯埴輪について検討するために、本資料のハケメ及び第一段突帯について分析し、若干の考察をおこなう。

1 遺跡の位置及び概要

愛宕塚古墳は、赤津川左岸に位置する。西側には丘陵が広がり、この丘陵端部には市指定史跡の華嚴寺跡などの古墳時代から近世までの遺跡が数ヶ所所在している。現在の赤津川の東側は水田が広がる沖積地となっているが、本古墳に祀られている愛宕神社の敷地が現行の県道より若干の高地であることが確認できるため、県道で切断された西側裾を含む周辺地形は宅地や県道による削平を受けている可能性が高い。

愛宕塚古墳の北側には木村古墳群の存在が周知されていたが、現在では行人塚古墳のみしか確認できない。平成7年におこなわれた栃木県教育委員会の確認調査では、堅穴住居より古墳時代後期の土器がまとまって



図1 遺跡の位置

出土している。遺構外から馬形埴輪が出土しており、木村古墳群内に形象埴輪を持つ古墳が存在していたことが確認された（江原・大野 2014）。また、栃木市教育委員会が平成 23 年～26 年にかけて遺跡詳細分布調査を行い、田都賀町を含めた栃木市の遺跡及び埋蔵文化財包蔵地を確認した（栃木市教育委員会 2015）。しかし、発掘調査の事例は多くはなく、愛宕塚古墳周辺の様相は明らかになっていない。

今回報告する資料は、都賀町史に記載がある西側裾部分を通る県道工事の際に出土したものである。しかしそれ以後は、墳丘測量や発掘調査は実施されておらず、愛宕塚古墳については未だ不明な点が多い。前述の通り、田都賀町では唯一の前方後円墳であり、全長は 80～90 m、高さ 3～8 m と考えられている大型の古墳である。内部主体については、平成 27 年の栃木県重要遺跡確認視察調査にて周辺住民より石室の中に入ったという証言があり、後円部の窪みに横穴式石室がある可能性を指摘している（津野 2015）。遺物については、同調査と本報告資料以外は確認されていない。現況では埴輪片が採集できるが、土師器や須恵器等遺物は確認できない。埴形や埴長から本古墳は、当該地域の首長墓であり栃木県内でも重要な古墳の一つである。

2 栃木県内の低位置突帯埴輪と愛宕塚古墳の位置づけ

低位置突帯埴輪の研究史及び論説は小森哲也の論文に詳しい（小森 2015）。同論文においても集成がされているが、本古墳の他にも、低位置突帯埴輪の例が増加したので、分布図を作成した（図 2）。様相に関して既存の研究と大きく変わった点はない。伝来品である大和久古墳群例を除けば、本古墳を含めて鬼怒川以西の県南地域から出土する。古墳出土例は 15 例、表採や遺構外出土は 6 例、窠跡からの出土は 1 例の計 22 例となっている。栃木県は非常に多くの河川が流れている。中村享史が、「河川は兩岸を結びつけるものと

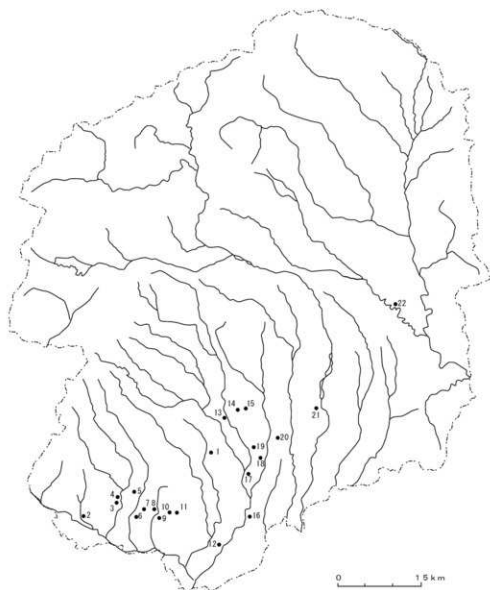


図2 栃木県における低位置突帯埴輪の分布

- 1 愛宕塚古墳 2 口明塚古墳 3 小基山2号墳 4 中山6号墳 5-瓶塚稲荷神社古墳 6 佐野城 7 鹿沼ゴルフ場埴輪塚跡
 8 米山塚古墳 9 黒神台遺跡 10 岩舟甲塚古墳 11 豊岡遺跡 12 観音山古墳 13 判官塚古墳 14 羽生田茶臼山古墳
 15 羽生田富士山古墳 16 足尾塚古墳 17 園分寺甲塚古墳 18 星の宮神社古墳 19 みふ塚古墳 20 石橋塚古墳
 21 鶴本古墳 22 大和久古墳群

見なされており、境界と見られることはない」としているが（中村 2015）、そのため鹿沼市判官塚古墳（13）や壬生町羽生田茶臼山古墳（14）など同一河川流域から出土することも多い。しかし愛宕塚古墳が立地する赤津川流域においては、他に低位置突帯埴輪の出土例がない。赤津川流域では他に西方山6号墳等が存在するが、出土しているのは普通円筒埴輪である（秋元 2016）。従来の研究史においては、岩舟甲塚古墳（10）が立地する三杉川と、観音山古墳（12）が立地する思川流域の間は、低位置突帯埴輪の空白地帯と考えられていたが、赤津川流域でも出土したことから、県南地域において地域差なく古墳に導入されていたと考えられる。

3 資料報告

所蔵されていた184点の埴輪片から今回報告する資料点数は103点である。接合した結果、そのうち53点の実測図及び拓本を報告する。なお、今回報告しない資料についても水洗及び注記作業¹³⁾は行った。実測図については、反転復元が可能なものに関しては、復元した実測図を記載した。

前述しているが、本資料群には完全資料はない。残存度の高いものでも底部から第二段突帯までを確認できるのみである。資料の内訳は胴部片が最も多く、次いで底部、口縁部の順に続く。また、形象埴輪の可能性のある個体も何点か確認した。底部については全点が低位置突帯を持つ個体である。栃木県内の埴輪に関しては、佐野市唐沢ゴルフ場埴輪窯跡と壬生町羽生田が産地として知られている。愛宕塚古墳の資料の胎土は既出の窯跡とは異なるが、焼成が不良であるという特徴から唐沢ゴルフ場埴輪窯跡系の埴輪である可能性が高い¹⁴⁾。本資料は、各個体で明瞭な胎土の違いはない。焼成も不良なものがほとんどである。一部胎土に雲母を含む個体が確認できたが極々微量なため、観察表には記載しなかった。また調整では、今回報告する資料には外面に縦ハケが施されているが、小森哲也氏採集品の中には横ハケが施されている個体があった。底部資料の中には製作時に敷いていたであろう植物の圧痕が残っている個体が何点かあった。埴輪底部の植物圧痕については高岡正之氏が壬生町富士山古墳出土の資料1～3の3個体で植物の同定をおこなっている(高岡1998)。その中で、節や葉鞘がない幅9.0mm～14mmの平行した圧痕が幅10cm間隔で並ぶ特徴を持つ植物はササ類であると断定している。今回報告する資料の圧痕も幅1mm前後のものが多く、また節などがみられる資料はみられなかった。そのため富士山古墳出土例にみられるササ類ではないかと推定する。それでは以下に主要な個体に関して記載する。

(1) 円筒埴輪 (1～5)

反転復元が可能な個体は5点である。1は低位置突帯埴輪である。底部から第一段突帯までは約2cmである。底部が他の個体と比べて非常に厚く、3.5～4.0cmである。底部から第二段突帯までを確認し、同一個体である突帯を持つ胴部片があることから3条以上の埴輪であることがわかる。底部に植物圧痕が確認できる。突帯は台形状である。2は低位置突帯埴輪である。底部から第一段突帯まで残存している。底部から突帯までは約2.5cm、底部の厚さは2.7～3.4cmである。突帯は幅が約1cmと狭く長く、上辺が突出する短矩形に近い台形である。底部の突帯を貼り付けた粘土を底部下部まで貼り付けた痕跡が観察できる。底部の製作方法は不明である。3は円筒埴輪の胴部である。外面は過焼成により硬質であるが内面は焼成不良で脆弱。突帯は台形状である。外面はハケ状工具で縦ハケを施した後に突帯を貼り付けている。突帯は上部を丁寧なナデで貼り付け、上面と下部はナデで調整している。4は低位置突帯埴輪で、今回の報告資料のうち最も残存度が高い。2条の突帯を確認した。底部から第一段突帯までは2.2～2.7cm、底部の厚さ2.0～2.5cmである。突帯は台形状で低い。高さ約10cmの粘土板で基部を成形し、その上を粘土紐で輪組みをしている。突帯については縦ハケの後、貼り付けている。突帯の上部はナデで下部はケズリもおこなっている可能性もある。上面についてはナデで調整している。他の個体に比べ、比較的丁寧に突帯の貼り付けをしている。底部に植物圧痕が確認できる。5は低位置突帯埴輪である。2条の突帯を確認した。底部から突帯までは約2cm、底部の厚さは2.1～2.5cmである。2枚以上の板状粘土を組み合わせて成形し、低い台形状の突帯を貼り付けている。突帯の上部はナデによりしっかりと貼り付けているが、下部はナデが甘く突帯が基部に完全に張り付いていない。内面の整形は一部にナデとケズリが確認可能ではあるが粗雑である。また、摩擦等により内外面の整形は現状では確認できない。底部には製作時の植物圧痕が確認できる。

(2) 口縁部 (6～9)

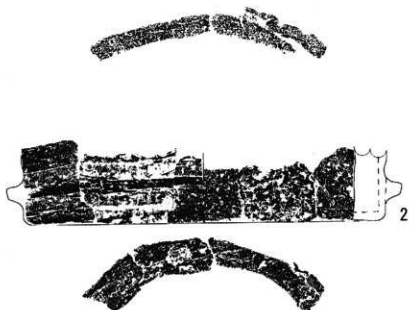
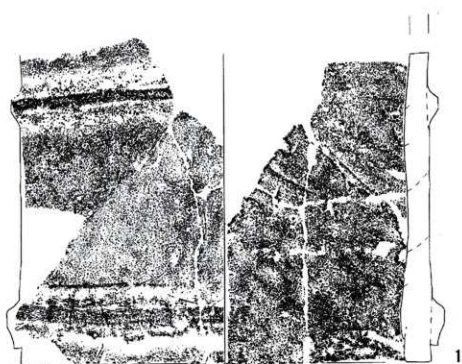


図3 埴輪実測図(1)



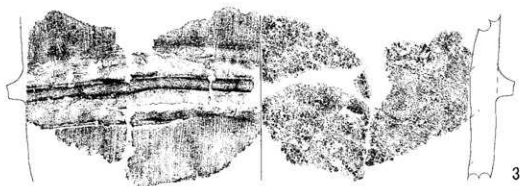


図4 円筒植輪実測図(2)

口縁部の破片は非常に少なく、4点のみしか確認できなかった。他の遺跡において、低位置突帯と共伴が多く見られる折り返し口縁はみられない。4点の口縁部は、つまみだして口唇部に沈線を作ることで口縁部としている。6の口唇部には明瞭なつまみだしが確認できる。7と8は同一個体であると考えられ、口唇部に緩やかなつまみだしがみられる。6～8の断面形はL字である。9は口唇部にごく緩やかなつまみだしを持つものの、他の3点とは異なり、直立した立ち上がりを持つ。

(3) 胴部 (10～40)

最も多くの点数を確認した。焼成不良等により摩耗しているものもあるため、内外面の観察が困難な個体も存在する。細片が多く、接合できた個体は少なかった。ハケ状工具による整形が確認できる個体を観察すると、内外面と同様の工具を使用している。胴部破片の中には、内外面に焼成時に付着したと思われるススが見られる個体があった。胴部は点数が多いが、細片であることから本項において一点一点の事実記載はおこなわず、次章にてハケメの観察をおこなうこととした。

(4) 底部 (41～45)

底部のみの個体は5点である。41は内外面ともに摩耗が激しい。42は底部から第一段突帯までは約1.5cm、底部の厚さは約3.3cmである。内外面ともにハケ状工具で整形している。突帯は台形状で低い。底部に植物圧痕がみられる。43は底部から突帯までは0.8～1.2cm、底部の厚さは約3cmである。44は内外面ともに摩耗が激しい。底部から突帯までは2.0～2.5cm、底部の厚さは約3cmである。45は底部から突帯までは約2cm、底部の厚さは約2.5cmである。突帯の断面形が三角状である。41・43・44は、突帯の貼り付けが非常に粗雑であり、突帯の形が保たれていない。突帯下部の粘土貼り付けが特に粗雑である。

(5) 形象埴輪 (46～53)

円筒埴輪と認められない個体が8点ある。全点が形象埴輪といえるかは今後検討を行う必要がある。またこれらの形象埴輪の可能性を持つ個体で底部が残存しているのは皆無である。46、48は中央部に膨らみを持ち、反対に47は中央に向かったすばまりをみせるといったそれぞれ円筒埴輪とは異なった形状を持つことから形象埴輪であると考えられる。50は三輪玉と考えられる円形状の剥離がみられることから大刀形埴輪の可能性がある。49も同様の形状を呈しているため、同器種の埴輪であろう。

4 分析

今回、報告した資料で2項目について述べていく。1点目はハケ状工具について、2点目は低位置突帯埴輪の基底部から第一突帯までの高さについてである。

まず、ハケ状工具についてである。ハケ状工具での整形が40点の個体で確認できた。その内35点についてハケメ幅の観察が可能である。低位置突帯埴輪が出土した古墳においてハケメによる分析をおこなった例が少ないため、まず古墳内での埴輪工人集団の想定をすることを目的として、ハケメの幅を計測し、分類をおこなう。埴輪のハケメの同工品論については城倉正祥の研究が詳しい(城倉2009)。城倉は、母材から切り出して刷毛を製作し、使用実験をおこなっている。その中で、「木目の走り方は近接した場所においても、歪みが存在する」、「同一工具においても、柁目であることを強く意識して製作された工具でない限りは、木目の現れ方に変異の幅があるとういうことになる」ことを指摘している。そのためハケメ分析には、属性分析とハケメの観察が必要であるとしているが、今回は簡易的な肉眼による観察をした。全個体が同一仕様で計測をおこなえるよう2.0cm幅の中で、ハケメが何本かを計測した。その結果、2.0cmあたりのハケメは(A)7～9本、(B)12～13本、(C)16～18本と3種類に分類できた。各個体のハケメについては観察表に記



图5 埴輪実測图(3)

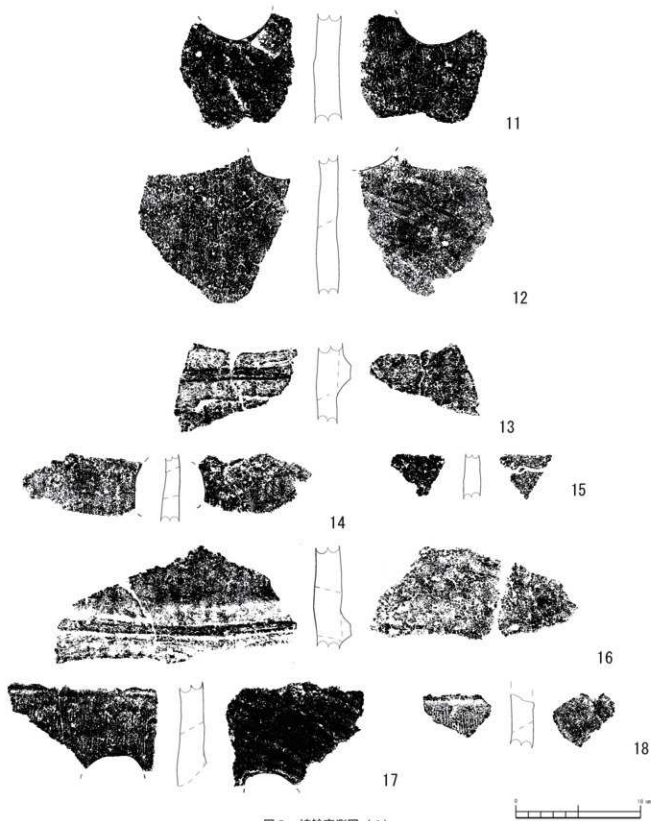


図6 埴輪実測図(4)

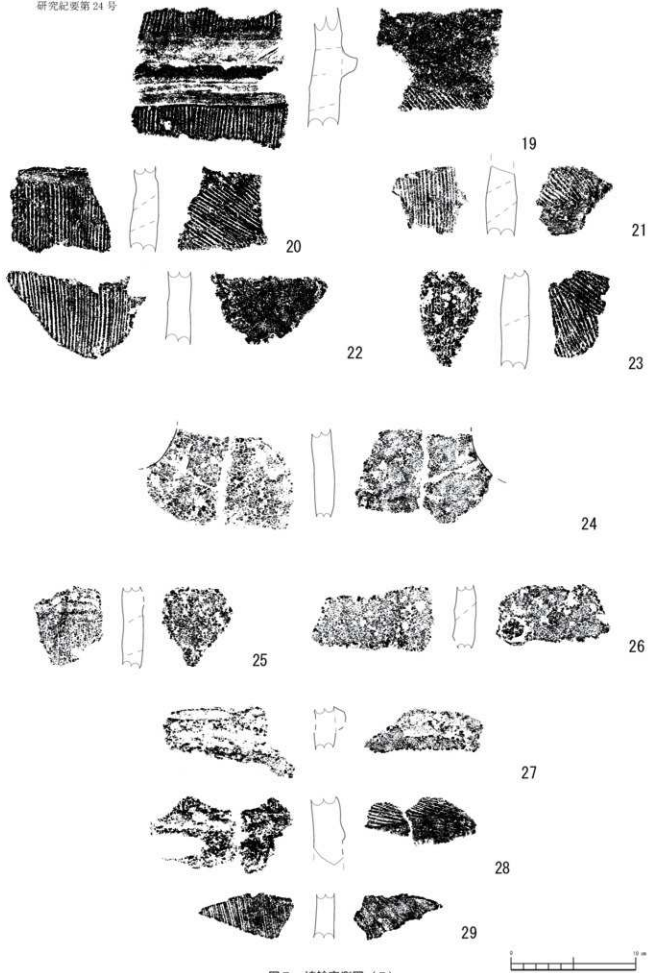


图 7 植輪実測圖 (5)

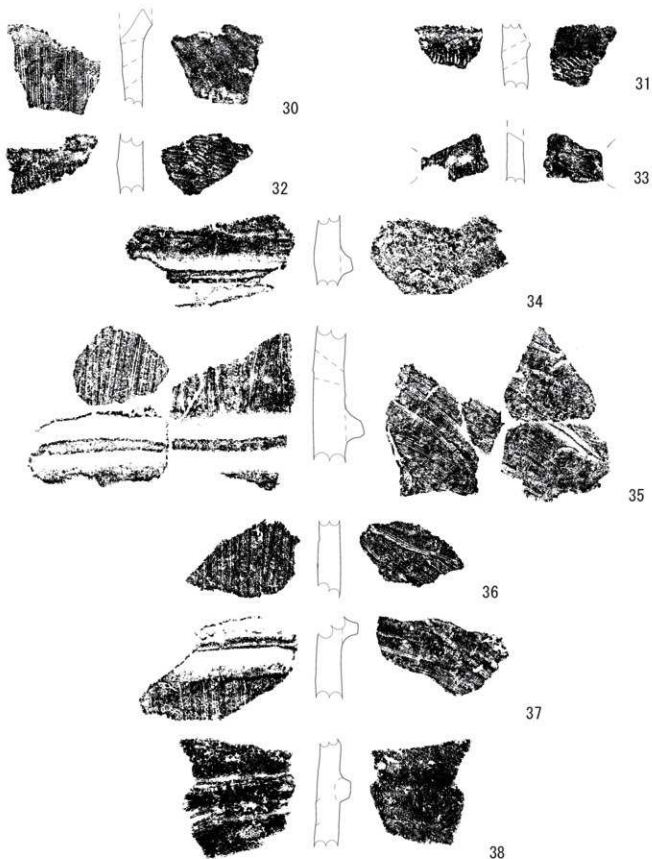


図8 埴輪実測図(6)



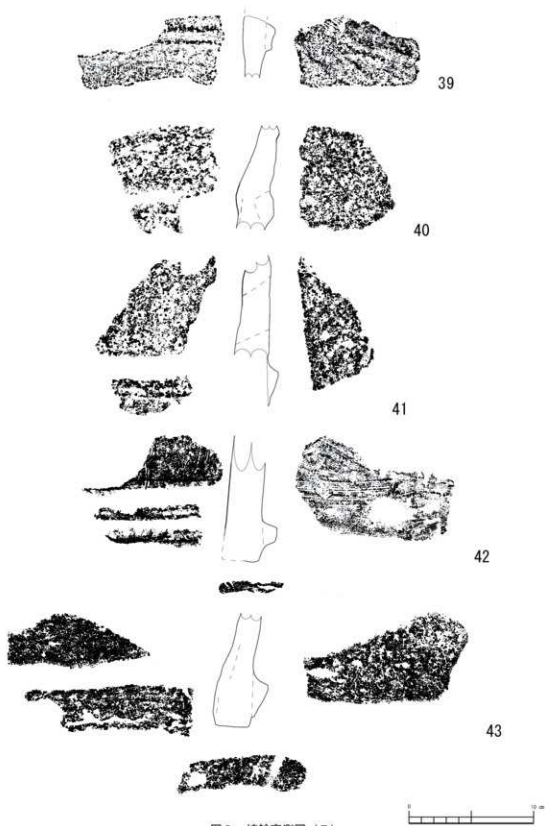


図9 埴輪実測図(7)

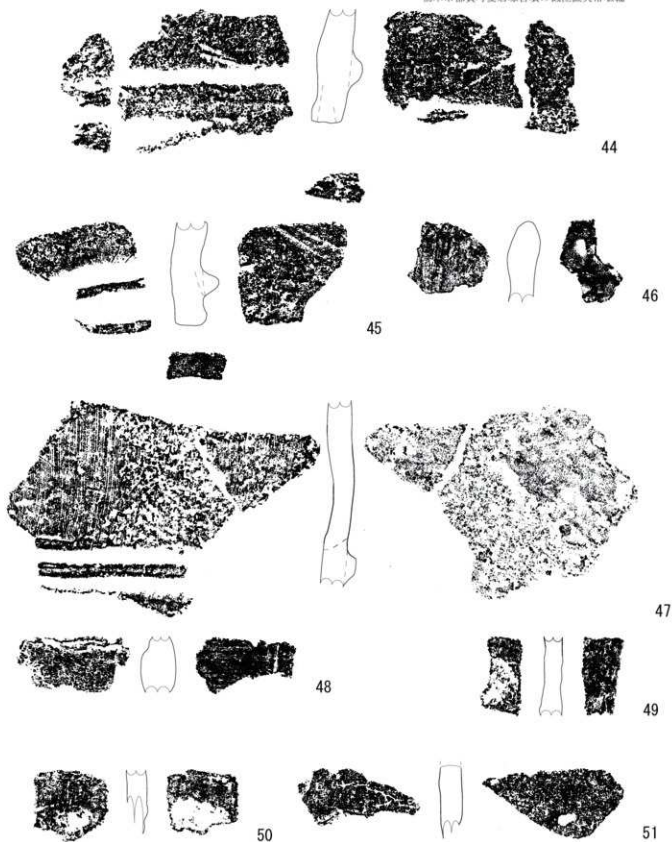


図10 埴輪実測図(8)

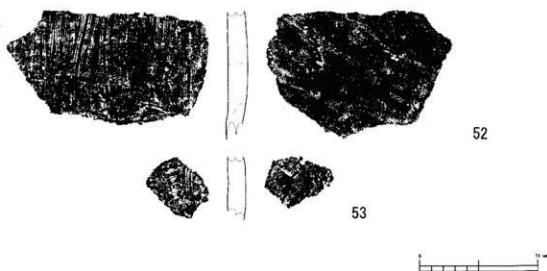


図 11 埴輪実測図 (9)

表 1 埴輪観察表

調査番号	器種	計測値	胎土	胎面		装成	特徴	工具	備考
				外面	内面				
1	底蓋	底蓋 径 28.0 cm	白色・赤色紋, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2192/4 (12.51+赤褐色)	不具	外面縞ハケ、内面ナメ方向のハケ・底部近くではナゲナメ方向のハケ	A	
2	底蓋	底蓋 径 27.0 cm	砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2194/3 (12.51+赤褐色)	2194/4 (12.51+赤褐色)	不具	内面ナメ方向のハケ、底面製物時の縞物加工ミスとよばれる赤色の付着物あり	—	31, 42と同一致様か
3	胴部	胴部 径 25.40 cm	砂粒、赤色紋	2192/2 (12.51+黄褐色上) 2192/5 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	(外) 透眼成 (内) 不具	外面縞ハケ後黄帯縞を付けたナゲ、内面ナメ方向のナゲ	C	
4	底蓋	底蓋 径 24.4+25 cm	砂粒、赤色紋, 3mm 以下の透眼成, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	不具	外面縞ハケ後黄帯縞を付けた、内面ナメ方向のハケ、底部付近はムビオナメ後、ハケで調整	C	
5	底蓋	底蓋 径 22.40 cm	砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面ナゲ・ナメリ、内面ナメ方向のナゲ	—	
6	口縁部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2194/3 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	不具	調整の高さが一律ではない	A	
7	口縁部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2194/3 (12.51+赤褐色)	2194/4 (12.51+赤褐色)	不具	底面は黄帯の粘土混み合わせで成形	—	8と同一致様か
8	口縁部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2194/3 (12.51+赤褐色)	2192/4 (12.51+赤褐色)	不具	底面は黄帯の粘土混み合わせで成形	—	7と同一致様か
9	口縁部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の透眼成, 3mm 以下の縞	2192/4 (12.51+赤褐色)	2192/4 (12.51+赤褐色)	不具	外面ハケナメ・調整工具によるナゲ、内面縞ハケナメ方向のハケ	B	
10	胴部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の透眼成, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	不具	外面縞ハケ、内面縞やのびオビオナメ	B	32, 39と同一致様
11	胴部	スリム丸 径 18.20 cm	砂粒, 3mm 以下の縞	2194/3 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面縞ハケ、内面ナメ方向のハケ・ナゲ	B	
12	胴部		砂粒、赤色紋, 6mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面縞ハケ、内面ナゲもしくはナゲで調整	C	
13	胴部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の透眼成, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面縞ハケ後黄帯縞を付けた、内面ナゲナメ方向のハケ	△	
14	胴部		砂粒、赤色紋	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	不具	外面縞ハケ、内面ナメ方向のナゲ	B	
15	胴部		砂粒, 3mm 以下の透眼成	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	不具	外面ナゲ、内面製物時とよばれる正面	—	
16	胴部		砂粒、赤色紋, 3mm 以下の縞	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	(外) やや不具 (内) 不具	外面ナゲ後黄帯縞を付けた、内面ナメ方向のナゲ	—	
17	胴部	スリム丸 径 13.20 cm	砂粒、赤色紋, 透眼成	2194/3 (12.51+赤褐色)	2. 2192/4 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面縞ハケ、内面ナメ方向のナゲ	B	
18	胴部		砂粒、赤色紋	2194/3 (12.51+赤褐色)	2194/3 (12.51+赤褐色)	やや不具	外面縞ハケ、内面縞やのびナゲ	B	

19	銅板、赤色紙、透明紙、5mm以下の線	2.000/6 (透明紙色)	7.000/3 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面上部縁やハケキズより内面ナメ方向のハケキズ付着	A
20	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面ナメ方向のハケ 内面裏にススの付着	A
21	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向のハケ キズなし	A
22	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/3 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向の縁やハケキズあり	A
23	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/0 (銅色)	不貞	外面銅ハケ、内面銅ハケナメ方向のハケ	A
24	銅板、赤色紙、2mm以下の透明紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ方向のキズあり、内面ナメ方向のハケキズあり	△
25	銅板、赤色紙、5mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ後実態取り付け	C
26	銅板、赤色紙、5mm以下の線	2.000/3 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	内面ナメ方向のハケ、製作時に付着した錆とあり	△
27	銅板、赤色紙、透明紙、5mm以下の線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケナメ方向のハケ 実態の剥離	C
28	銅板、赤色紙、3mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面キズもしくはナメ方向ハケ	C
29	銅板、赤色紙、5mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向のキズあり	B
30	銅板、赤色紙、2mm以下の透明紙、5mm以下の線	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面ナメ方向のキズあり	B
31	銅板、赤色紙、2mm以下の透明紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	7.000/3 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面ナメ方向のハケキズもしくはナメ方向調整	A
32	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/3 (銅色)	7.000/3 (銅色)	不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面ナメ方向のキズあり	B
33	銅板、透明紙、赤色紙	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	やや不貞	外面銅ハケ、内面不明瞭な錆ハケ キズなし	B
34	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/3 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅板後実態取り付け、内面ナメ方向のハケ	B
35	銅板、赤色紙、5mm以下の線	000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向のハケキズあり 内面裏にススが付着（埋め時に付着）	C
36	銅板、赤色紙、3mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向ハケナメ 外面にススが付着（埋め時に付着）	C
37	銅板、5mm以下の赤色紙、5mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面ナメ方向のハケ一様ハケ	C
38	銅板、赤色紙、7mm以下の線	000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ後実態取り付け、内面縁やハケキズ 方向のハケキズあり	△
39	銅板、赤色紙、5mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向のキズあり ハケキズあり、実態剥離	B
40	銅板、赤色紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	内外面共に磨料が磨きこも確認できず	—
41	銅板、5mm以下の赤色紙・線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	内外面共に磨料が磨きこも確認できず	—
42	銅板、赤色紙、3mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケナメ、内面ナメ方向のハケキズあり 銅板製作時の錆付あり、内面裏に一気ススの付着	C
43	銅板、赤色紙、7mm以下の線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	実態磨き6mm、敷瓦具でキズあり懸念、実態キズ は不明瞭な錆付あり、内面銅ハケ	C
44	銅板、赤色紙	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面に磨料が磨きこも、内面裏面スリ ありでキズあり	—
45	銅板、赤色紙、5mm以下の線	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面ハケナメ確認できない実態のみ磨きこも が確認されている、実態の磨きこもはあり、 内面ナメ方向のハケキズあり	—
46	銅板、赤色紙	2.000/4 (銅色)	000/3 (銅色)	不貞	外面銅ハケナメキズあり、内面銅キズあり キズあり	B
47	スラン孔 径(1.4) 5mm以下の線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	内面銅ハケ、内面キズあり 内面スラン孔、ハケ剥離、やや強く外反する	B
48	銅板、赤色紙	000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ	A
49	銅板、赤色紙	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	キズで調整あり	—
50	銅板、赤色紙	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	外面に銅板磨あり	—
51	スラン孔 径(1.4) 5mm以下の線	2.000/6 (銅色)	000/6 (銅色)	不貞	実態の取り付けが平行ではない	—
52	銅板、5mm以下の赤色紙、3mm以下の線	2.000/4 (銅色)	2.000/4 (銅色)	不貞	外面銅ハケ、内面ナメ方向のハケキズあり 内面スラン孔、一部反り付ばりあり	△
53	銅板、赤色紙	2.000/4 (銅色)	000/4 (銅色)	不貞	内面ナメ方向ハケ、内面銅方向ハケ や反り付ばりあり	B

※1 () は難定

※2 表内の「△」は形象輪の可能性が指摘された銅板

※3 「凡」の△は本文中の分類による

△はハケが一部確認できるが、分類が困難であるもの

表2 低位置突帯埴輪出土

NO	遺跡名	市町村	墳形	高さ (cm)	備考
1	愛宕塚古墳	栃木市	前方後円墳	1~2.5	
2	口明塚古墳	足利市	円墳	3.2-4	
3	小峯山2号墳	佐野市	円墳	2	表採
4	中山8号墳	佐野市	円墳	-	
5	一瓶塚稲荷神社古墳	佐野市		3	表採
6	佐野城	佐野市		3	遺構外
7	唐沢ゴルフ場埴輪窯跡	佐野市	窯跡	1-3	
8	米山東古墳	佐野市	方墳	-	
9	黒袴台	佐野市		2.5	遺構外
10	岩舟甲塚	栃木市	円墳	2cm前後	
11	曇岡遺跡	栃木市		2cm前後	遺構外
12	観音山古墳	小山市	前方後円墳	2.6	
13	判官塚古墳	鹿沼市	前方後円墳	1.5	
14	羽生田茶白山	壬生町	前方後円墳	2cm前後	
15	羽生田富士山	壬生町	前方後円墳	2cm前後	
16	足尾塚古墳	小山市	円墳	2	
17	国分寺甲塚	下野市	帆立貝	2	
18	星の宮神社古墳	下野市		2cm前後	表採
19	みぶ車塚	壬生町	円墳	-	
20	横塚古墳	下野市	前方後円墳	2cm前後	
21	橋本古墳	上三川町	円墳	2	
22	大和久古墳	那須烏山市	不明	2.2	出土古墳不明

※1 「-」は報告書での記載は確認できるが、実際の資料は確認できないもの

※2 みぶ車塚遺跡は、小森哲也氏ご教示による

載している。(A)類10点、(B)類15点、(C)類10点で最も(B)類が多かった。肉眼での簡易な観察だが、ハケメの幅がここまで分類できるということは、3人の工人もしくは、集団内のグループが3グループあったと推定できよう。また低位置突帯埴輪であることが確実な底部では、摩耗が激しく見えない個体が多いが、(A)類と(C)類のみ観察できて、(C)類が多い点が特徴である。低位置突帯埴輪を製作していたのは特定の工人であったのだろうか。そして資料全体でみると埴丘規模に対して、多くない人数での埴輪製作を想定することができる。しかし、今回の報告資料では点数も少なく、細片であり、西側裾部分の資料という限られた条件であるため今後の成果によっては、異なる見解がみえる可能性が大いにあるだろう。

2点目は、低位置突帯の定義について分析したい。註2にもある通り、昭和55年に森田久男・鈴木勝が発表した低位置突帯の定義が、現在まで踏襲されている。しかし、定義の中にある底部から第一段突帯までが「5cm」という数字は、どこから導き出されたのか、そして現在までに出土している低位置突帯埴輪のそれと合致するものなのかを考えた。まず報告資料内の低位置突帯についてだが、底部～突帯までは5cm前後という基準の中では1.5～3.6cmという極めて低い位置にある。それでは他の遺跡出土例と比較して高さに違いが出るのかを検討したい。現在までに栃木県内で出土している低位置突帯埴輪の底部から第一段突帯までを、既出の報告書及び論文を用いて計測してみた。その結果が、表1である。栃木県内の低位置突帯埴輪は高さ3cm前後に収まるものが、ほとんどであった。また佐野市以西の埴輪の第一段突帯の高さ

が、以東のそれより比較的高く、出土する古墳の埴輪は円埴が多い。佐野市以東の低位置突帯埴輪が出土する古墳の埴輪は前方後円埴が比較的多いようにみられる。そこで佐野市・足利市に近接している群馬県の低位置突帯の埴輪はどのようになっているか考える必要がある。新山保和が、群馬県出土の低位置突帯を集成している(新山 2007)。新山は、低位置突帯埴輪の第一段の高さが、「基底部にあるもの」、「3cm前後」、「5cm前後」で分類し、それぞれをⅠ～Ⅲ類としている。そこで愛宕塚古墳と同じ低位置突帯であるⅠ類を抽出すると、富岡市・安中市・藤岡市・高崎市・玉村町・前橋市・太田市と群馬県中央部からまんべんなく出土しているようにみえる。しかしⅠ類出土古墳数は多くはない。また、玉村町小泉大塚越3号墳出土埴輪のようにⅠ類～Ⅲ類まで出土している例も多くあり、Ⅰ類だけ出土している古墳は限られてくる。愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪は2cm前後のものが多い。基底部から第一段突帯までの高さで計測箇所が異なる場合、個々の高さで1cm羽の前後ある可能性がある。今回は、基底部から突帯の下部で計測をおこなった。その結果、新山分類のⅠ類とⅡ類の間であらう個体がでてきた。また、愛宕塚古墳の低位置突帯埴輪は2cm前後の埴輪が多い。これは、群馬県及び栃木県の既出資料の中では比較的に低い低位置突帯埴輪であるといえるであろう。しかし、前述した計測箇所が異なる可能性もあるため、今後は同様の基準を設けて資料の観察を必要がある。また愛宕塚古墳の資料では、底部の第一段突帯は以下の3種類に分類できた。(a) 台形状の突帯、(b) 三角もしくは幅が非常に狭く高い突帯、(c) 突帯上部はナゲ等の調整が確認できるが下部については複雑なつくりで、形を成してない突帯。それぞれ (a) 類—2・4・5・42、(b) 類—1・43・44、45、(c) 類—41 が分類される。新山の論文でいうⅠ類に近い形状は愛宕塚古墳資料だと (c) 類といえるが、そのまま「基底部になる」とはいえないと考える。新山はⅠ・Ⅱ類を「本来の低位置突帯埴輪」、Ⅲ類を「低位置突帯埴輪類型」としているが、今回の検討で栃木県内の低位置突帯埴輪においても3cm前後に収まることから、栃木県内にもこの考え方が当てはまると考える。栃木県内では口明塚古墳や一煎塚稲荷古墳、佐野城、唐沢ゴルフ場埴輪窯跡の一部などでは3cmを超える低位置突帯埴輪が検出している。そのため、佐野市以西の県西部では低位置突帯埴輪類型が多く栃木県内でも地域差が出ると考えられる。

5 考察

前項までに愛宕塚古墳出土埴輪の資料報告をおこなった。低位置突帯埴輪は、従来の研究から6世紀中葉から後葉に位置付けられる(小森 2015)。愛宕塚古墳は低位置突帯埴輪以外に出土していないため、帰属する年代は6世紀中葉から後葉(MT85～TK43)としておく。今後墳丘測量の実施や、以前開口されていた石室の精査・検討をおこなうことが課題である。また今回報告では、点数が少ないが、低位置突帯埴輪で既存の集成にない地点の報告ができたことが成果である。さらに研究に寄与するためには、低位置突帯埴輪だけでなく、栃木県全体の古墳編年や、埴輪の中で位置付けるために検討をおこなうことに加え、胎土分析で産地同定をおこなうべきである。またハケメも他遺跡と比較して分析をおこなうべきであった。最後に、分析で言及した低位置突帯埴輪について述べる。低位置突帯埴輪は大型品の歪みの集成、基底部の歪みを隠す低位置の突帯の貼り付け、底部調整、倒立技法によるものと製作理由について多くの説が唱えられている。今回の資料を概観すると、底部に突帯をつけたままあまり調整をおこなわない例がみられた。これは底部を意識しており、突帯をつけることに意義があったのではないかと考えられる。愛宕塚古墳の低位置突帯は埴輪の大型化に伴う底部調整という技法の一つとしても考えられる。その点から考えると佐野市以西の高い第一段突帯はより丁寧な底部調整で、以東のものは突帯を貼り付けることに意義があったのではないだろうか。しかしこの考察を立証するためには、まず低位置突帯埴輪出土古墳の編年をおこない、時期差が地域差の検討と、個体

一点一点の調整方法を観察する必要がある。類例を待ちつつ、それらについては今後検討をおこなうこととする。

おわりに

本資料を報告するにあたり、資料の借用及び掲載等を快く許可して頂いた栃木市教育委員会に感謝致します。また、本稿執筆にあたり、下記の方々から勉強足りない我々に、多大なご教示とご協力をいただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。(敬称略)

秋元 陽光 石橋 宏 内山 敏行 賀来 孝代 小林 青樹 小森 哲也 高見 哲士 塚本 師也
中村 耕作 中村 享史 栃木県古墳勉強会

註

- (1) 本古墳の名称は、「愛宕神社古墳」、「愛宕塚古墳」、「愛宕遺跡」などがあるが、栃木市が使用している表記である「愛宕塚古墳」を使用する。
- (2) 低位置突帯墳輪とは、従来の研究において「器形の大小にかかわらず、基底面からはほぼ5センチ以内に第一段凸帯がつくもの」(森田・鈴木1980)とされており、本論文もこの定義を前提とする。
- (3) 水洗・注記作業に関しては、國學院大學栃木短期大学において中村耕作専任講師の授業の一環でおこなった。
- (4) 愛宕塚古墳が立地する赤津川・水野川流域の古墳群の墳丘・石室の測量、栃木県内の墳輪の胎土分析を含めた研究をおこなっている栃木県古墳勉強会の皆様にご教示いただいた。

参考文献・引用文献

- 秋元陽光・大橋泰夫・水沼良浩 1989 「国分寺町甲塚古墳調査報告」『栃木県考古学会誌』第11集、栃木県考古学会 pp. 181-198
- 秋元陽光 2016 「栃木県赤津川・水野川流域の古墳群」『第21回 東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム 群集墳展開の共通性と地域性-王権・地域首長と群集墳被葬者-発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会、pp. 21-35
- 市橋一郎ほか 1996 『口明塚古墳発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告書第31集、足利市教育委員会文化財保護課 課
- 大川清ほか 1976 『岩舟町豊岡遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 太田嘉彦 2000 『佐野市指定史跡・名勝 佐野城跡(春日岡城)-城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』佐野市埋蔵文化財調査報告書第18集、佐野市
- 大橋泰夫 1986 『星の宮神社古墳』『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県埋蔵文化財報告書第76集、(財)栃木県文化振興事業団
- 江原英・大野淳史 2012 『県営湖場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事立会概要報告書-平成21～23年度緊急雇用創出事業に係る整理事業報告書-』栃木県埋蔵文化財調査報告第344集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団、pp. 3-18
- 君島利行 1998 『富士山古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第14集、壬生町教育委員会

- 小森哲也・田代隆 1985 「横塚古墳」『石橋町史』第1巻 資料編(上)、石橋町、pp.55-101
- 小森哲也 2001 「4 関東北部における低位置凸帯の円筒埴輪」『シンポジウム 縄文人と貝塚 関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会・茨城県考古学協会、pp.136-143
- 小森哲也 2015 『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房
- 坂詰秀一ほか 1987 『大和久古墳群発掘調査報告書』南那須町教育委員会
- 佐野市史編さん委員会 1975 「米山東古墳」『佐野市史』資料編1、佐野市、pp.97-120
- 城倉正洋 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 田沼町史編さん委員会 1984 「一 瓶塚古墳」『田沼町史』第3巻 資料編 原始古代・中世、田沼町、pp.175-187
- 都賀町史編さん委員会 1989 『都賀町史 歴史編』都賀町 pp.22
- 津野 仁 2012 『甲塚古墳-重要遺跡範囲確認調査-』栃木県埋蔵文化財調査報告第343集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 津野 仁・藤原 哲 2015 『栃木県重要遺跡現況確認調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第372集、栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団、pp.86
- 栃木市教育委員会 2015 『栃木市遺跡分布地図』栃木市教育委員会
- 中村享史 2015 「栃木県域の古墳編年」『東北・関東前方後円墳研究会第20回大会シンポジウム 地域編年から考える-部分から全体へ-発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会、pp.107-117
- 新山保和 2007 「群馬県出土の低位置突帯埴輪」『研究紀要』第25号、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.45-60
- 新山保和 2007 「栃木県出土の低位置突帯埴輪」『古墳文化II』國學院大學古墳時代研究会、pp.71-83
- 橋本澄朗ほか 2001 『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財報告書第261集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 矢島俊雄・茂木克美 1989 『小峰山遺跡』佐野市教育委員会
- 安永真一 2001 「判官塚古墳」『鹿沼市史』資料編考古、鹿沼市、pp.244-248
- 森田久男・鈴木 勝 1980 「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相-最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介-」『栃木県史研究』第19号、栃木県教育委員会、pp.71-86
- 森田久男 1981 「八 円筒埴輪」『小山市史』資料編原始・古代、小山市、pp.779-810
- 山越 茂 1979 「判官塚古墳」『栃木県史』資料編考古2、栃木県、pp.501-505

四十八塚古墳群に埋葬された被葬者を考察する

— 遺物・遺構及び人類学的な視点から —

谷 畑 美 帆¹⁾・中 村 享 史²⁾・内 山 敏 行²⁾

はじめに

1. 佐野地域の古墳について
- 2 四十八塚古墳群について
3. 分析対象とする人骨資料について
4. 分析結果

①人骨資料と副葬品

- ②横穴式石室からみた四十八塚古墳群の様相
- ③小札甲を出土する群集墳としての四十八塚古墳群
5. 結果と考察
6. まとめ

栃木県城南西部に所在する佐野市四十八塚古墳群の成人人骨と歯牙から、各古墳に3体程度(2~4体)を北頭位で埋葬したことを推定した。横穴式石室は無袖型長方形と両袖型馴張形に大きく分類できることと、古墳周溝や主体部の間に重複関係がなく、周溝を回避する事例があることを指摘した。石室内に複数体を埋葬する一方で栃木県中央部のような周溝内埋葬をしないことの物理的・社会的理由と、北関東西部で後期群集墳の中小円墳に小札甲を副葬する背景を検討した。副葬遺物との関係を検討すると、2体を埋葬するSZ-471とSZ-472は土器型式で1型式または2型式、3体または4体を埋葬するSZ-478では4型式に相当する埋葬期間を持つ。また、石室奥壁付近の被葬者に副葬品が多い傾向がみられた。

はじめに

古墳に埋葬された被葬者を考察する際には、副葬品が重視されることが多い。これに対して、被葬者そのものである人骨についての研究は少ない。これは、その遺存状態が不良であるため考察対象からはずされているのだが、人骨からは性別や年齢といった基本的な情報を抽出できず、出土時にただ破片として取り上げられ、資料としての情報を提示できないことが多かったからである。

しかしながら、人骨は古墳の内部主体から確実に出土しており、発掘調査時の詳細な取上げ作業によって、被葬者に関するある程度の情報を提示することは可能である。

本稿では、こうした状況を踏まえたうえで、遺存状態が不良な人骨資料および副葬品との関係を基に古墳に埋葬された被葬者について考察することとする。

1. 佐野地域の古墳について

渡良瀬川水系の河川のほとんどが足尾山地から流れ出ている。足尾山地は栃木県西部、日光より南に広がる山地である。西側は渡良瀬川によって群馬県域と画され、東側と南側は複数の河川によって開析され、台地、低地に接続し、東麓からは思川、赤津川、巴波川、永野川が、南麓からは三杉川、秋山川、旗川、袋川、松田川、小俣川、桐生川が流れ出ている。

1) 明治大学日本先史文化研究所 2) (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

四十八塚古墳群が所在する佐野市域は、東は三杉川、西は秋山川、旗川の流域にある。旗川には彦間川、出流川が合流する。三杉川流域には米山古墳（木村・大橋 1986）、甲塚古墳（津野 2012）があり、その近隣には唐澤山ゴルフ場墳輪郭跡群（大川 1963）がある。三杉川の下流にはかつて越名沼があったが、現在は干拓で消滅している。秋山川は現在、直接渡良瀬川に合流しているが、かつては三杉川に合流していた。三杉川と秋山川に挟まれた地域には佐野台地、秋山川以西には渡良瀬川低地がある。秋山川と足利市東部の足尾山地南端に挟まれた、赤見町域では十二天塚古墳（矢島・茂木 1988）、中山 8 号墳、四十八塚古墳群（仲山・村田・亀田 2011）、市ノ沢古墳群がある。

四十八塚古墳群は、旗川と彦間川の合流点付近の旗川西岸の出流原台地に位置している。四十八塚古墳群では、1954（昭和 29）年に出流原古墳群として 6 基、2005（平成 17）年～2007（平成 19）年にはとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの調査により、16 基の円墳が調査されている。個々の古墳は、円墳から成り、群内に前方後円墳が存在しない。このうち、SZ-33、SZ-335、SZ-471、SZ-472、SZ-473、SZ-478、SZ-480 の 7 基の古墳に横穴式石室が残存しており、SZ-334 は 1954（昭和 29）年に前澤輝政氏により調査された出流原 5 号墳と考えられる。（中村）

2. 四十八塚古墳群について

出流原古墳群と称されていた時期において、四十八塚古墳群の個々の古墳の墳丘は、すでに大部分が削平されており、横穴式石室と若干の覆土を残すのみであった（前澤 1977）。しかしこのうち 5 基の古墳の石室内から被葬者についての考察を進めていくことが可能な人骨片が出土していた。人骨の鑑定は鈴木尚氏により、複数個体埋葬と推されている。しかし、被葬者の頭位や埋葬姿勢については不明なままである。

その後、先述したようにとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターによる調査から計 16 基の古墳（直径 10-20 m 前後）が確認され、主体部のすべてが横穴式石室であることが明らかになっている。副葬品としては鉄製品（鉄鏃などの武器）、装身具（玉類など）、須恵器のほか、墳丘から埴輪が出土している。しかし、いずれの古墳の主体部においても副葬品と出土人骨は石室内に散乱した状態で見つかった。

中でも出土人骨は、細片や破片を中心としたものであり、こうした場合、形質人類学において重要とされる一部の人骨資料を除いて、骨片に関する詳細な考察はこれまでほとんど行われたことがない。そのため、このような状態で出土した人骨は、個々の部位を点あげし、図面上に落としていくという作業を必要とってくる。とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターでは、被葬者の人数・頭位などを認識することが可能となるように、こうした発掘調査作業を通じて実施している。（谷畑・中村）

3. 分析対象とする人骨資料について

本節では、四十八塚古墳群の中でも、比較的まとまった状態で人骨が出土している SZ-33・SZ-471・SZ-472・SZ-473・SZ-478 の 5 基を取り上げる。いずれの古墳においても墳丘は存在していない。以下、個々の古墳とその人骨資料について概要を記述する。

- ① SZ-33（径 14 × 16 m の楕円形墳）には全長約 3.5 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。この石室は、奥壁部がやや狭まる胴張り形と推定されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室前面では溝の幅が広く深くなっている。この古墳に伴う副葬品はほとんど確認されていないが、細片・破片状態の資料を含む人骨が 176 点出土している。

- ② SZ-471 (径 20m の円墳) には全長 3.4 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。この石室は、奥壁部がやや狭まる胴張り形と推定されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室前面では溝の幅が広く深くなっている。須恵器・土師器は墓道より出土しており、須恵器は周溝覆土からも出土している。このほか、細片・破片状態の資料を含む人骨が 54 点出土している。
- ③ SZ-472 (径 16 m の円墳) には全長 2.6 m を測る無袖型横穴式石室が造営されている。周溝の状況から考えて、SZ-471 より先に造られた可能性がある。本石室の平面形はほぼ長方形であり、奥壁部がやや狭まるものの胴張り形状にはなっていない。周溝は円形に巡る。須恵器は周溝覆土から出土しており、石室からは直刀や鉄鏃など武器を中心とした鉄製品のほか、耳環やガラス玉などの装身具が出土している。細片・破片状態の資料を含む人骨が 28 点出土している。
- ④ SZ-473 (径 9m の円墳) には全長 2.4 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。石室の平面形はほぼ長方形であり、奥壁部がわずかに狭まり胴張り形状と推されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室では溝の幅が広く深くなっている。須恵器は周溝覆土から出土しており、石室からは装身具(耳環)が出土している。細片・破片状態の資料を含む人骨が 36 点出土している。
- ⑤ SZ-478 (径 20m の円墳) には全長 4m の無袖型横穴式石室が築造されている。石室の平面形はほぼ長方形であり、羨道部側がわずかに狭まる程度であり、胴張りではないとみなされる。周溝は円形に巡り、一部は浅く幅が広くなっている。須恵器および埴輪は周溝覆土から出土しており、特に埴輪片は多く本古墳が埴輪を有するものであると考察されている。中でも多く出土している埴輪片の大半は円筒埴輪であることが明らかにされており、人物埴輪と馬形埴輪も出土している。石室からは直刀・鉄鏃などの武器を中心とした鉄製品のほか、髷引手が出土している。この他装身具として耳環 1 点、および玉類が約 100 点(碧玉製管玉 12・土製管玉 2・水晶製切子玉 1・滑石製白玉 4・土製小玉 26・ガラス小玉 94)が出土している。このうち最も多く出土しているガラス小玉は青色のものが多いが、黄色や緑色を呈するものもある。細片・破片状態の人骨が 116 点出土している。

以上、5 基の古墳の石室内より出土した人骨資料の出土地点と部位同定の結果を併せて、被葬者の頭位・人数・副葬品との関係について述べていくこととする。(谷畑)

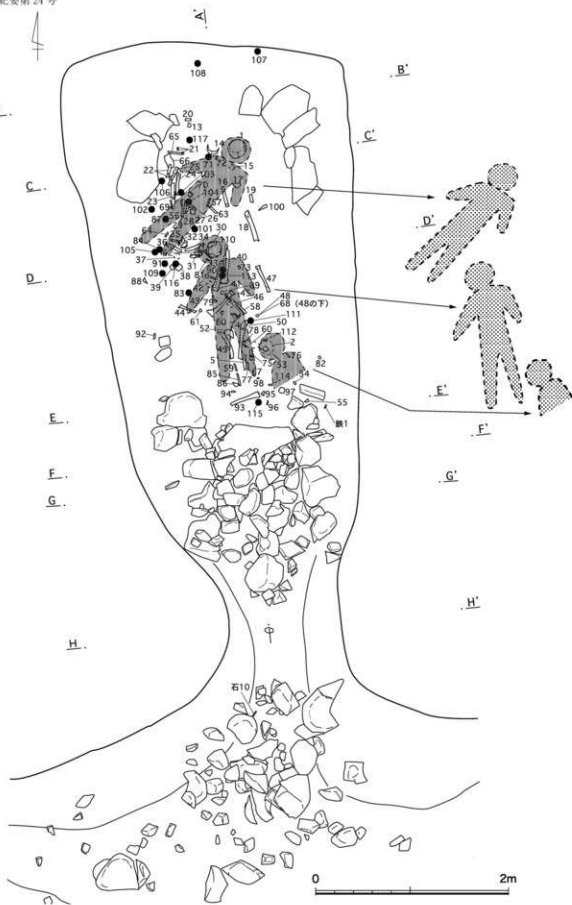
4. 分析結果

① 人骨資料と副葬品

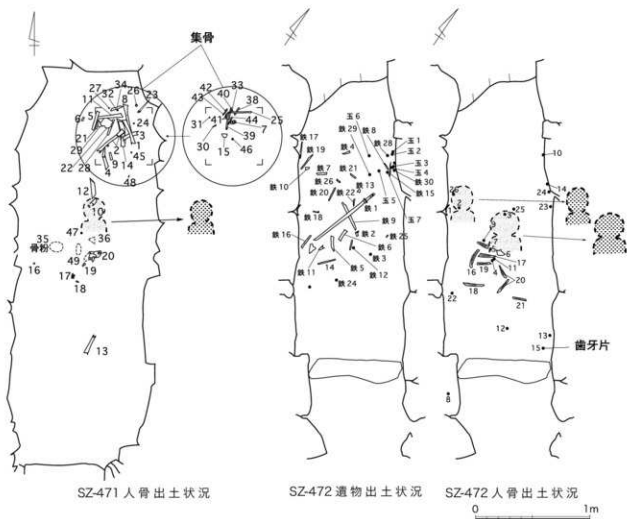
今回観察を実施した四十八塚古墳群出土人骨のほぼすべては破片状態のものである。また中には、粉化しているものも数十点ほど存在しているが、これらは取り扱わず、大きさ 5 cm 程度以上の部位同定が可能な資料のみを観察対象としている。

1) SZ-33

本石室では、大腿骨などの下肢骨片及び頭蓋骨片が 2 地点から出土している。このうち、頭蓋骨片や歯牙片が出土している地点と下肢骨片が出土している地点とでは約 70 cm の距離がある。そのため、奥壁付近に



第1図 SZ-33における人骨の出土状態 (『四十八塚古墳群』2011より転載)



第2図 SZ-471・472における人骨の出土状態 (『四十八塚古墳群』2011より転載)

頭骨を北向きに1体埋葬されていたと推定される。

さらに歯牙片が2つの地点から出土している。このうち2体は頭を奥壁に向けて北向きに頭位をとって埋葬されていたと考えられる。羨道に最も近い残りの1体については頭位が不明であるが、本石室に埋葬されている3体はいずれも成人個体であり、頭位を北向きにとる2体は、歯牙の咬耗から壮年と推定される (Broca I⁴⁰)。また頭位を北向きにとる2個体のうち、奥壁付近の成人個体は女性、玄室中央に位置する成人個体は男性と推定される。

また本古墳では、人骨以外の資料が出土しておらず、それぞれの被葬者に伴う副葬品については不明である。

2) SZ-471

本石室では、奥壁付近に下肢骨を中心とした集骨状態の埋葬が確認されており、下肢骨の中には、やや整状を呈する配置になっているものもある。集骨埋葬は1体以上の埋葬の可能性が高いが、このうち1体は成人男性と推定される。この他、奥壁に向かって、北に頭位をとると推される成人1体が出土している。

また石室入口の墓道部より頭が長くなり口縁端部の段を失う新段階のフラスコ形瓶が出土しており、7世

紀中葉頃の埋葬と考えられる（第5図23）。本石室では埴輪片、及び人骨以外の資料は石室から出土しておらず、副葬品と被葬者の関係は不明である。

3) SZ-472

本石室では、頭位が不明であるが、成人2体の埋葬が確認できる。この他、羨道付近において資料数は少ないものの歯牙が出土しているため、この部分にも1体埋葬されていたと考えられる。

本古墳では、埴輪は出土しておらず、扁平な提瓶と頭がまだ短く口縁端部に段を持つ古段階のフラスコ形瓶と、不均等両側の鉄刀と浅い鍔身間のある長頭阿刀鍔（刀と鍔いずれもTK209期頃）、頭が直立して口縁ラインが水平になった段階の平瓶と均等両側鉄刀と鍔身間の退化した長頭片刀鍔（7世紀中葉ころ）が出土しており、TK209 型式期～7世紀中葉ころまでの年代幅がある（第5図）。玄室からは鉄鍔・直刀などの鉄製品の他、弓金具が出土している。出土地点から鉄鍔・刀子・弓金具は成人2体の被葬者がそれぞれ保持しているが、直刀は玄室中央に埋葬されている被葬者にもみ伴うものと考えられる。このうち、直刀を保持している被葬者は、歯牙の咬耗から壮年と推定される（Broca I¹⁰）。

またサイズと出土地点の異なる耳環が2点出土しており、これらは2体分の装身具とみなされる。しかし、これら2点の耳環の出土地点からは人骨が出土していないため、この地点に、さらに数体の被葬者が埋葬されていた可能性がある。小玉はガラス製のものが83点出土しており、材質が異なるものが3点出土しているが、これらは石室東側および石室全体にちらばった状態で出土しているため、被葬者である人骨と関係は不明である。

4) SZ-473

本石室では、奥壁に向け頭位を北にとって埋葬されている成人2体が確認できる。この他、奥壁よりの西側側壁の一部より歯牙片が出土しており、埋葬姿勢は不明であるがここにも1体の被葬者が埋葬されていたと推定される。

遺存状態が不良であるため詳細は不明であるが、埴輪は出土しておらず、須恵器甕2片が確認されている。また副葬品として銅心銀張耳環が出土しており、その出土地点から、この副葬品は奥壁付近に埋葬されている被葬者のものと考えられる。

5) SZ-478

本石室では、頭を奥壁に向け頭位を北にとって埋葬されている成人3体が確認できる。このうち玄室中央に配されている被葬者は歯牙の咬耗、及び寛骨臼の大きさなどから壮年男性と推される。奥壁付近に埋葬されている被葬者の頭部から管玉やガラス製小玉の一部が出土していることから、これらの玉類を首飾りとして、また耳付近から出土している耳環を被葬者に着装させていたと考えられる。

さらに出土地点から、この被葬者は鉄鍔・直刀・櫛引手も保持していたとみなされる。その他の被葬者に伴うと考察される副葬品は確認できていないが、これはこれらの人物が副葬品を持っていなかったというよりは、追葬により移動したか遺存状態の悪さ等により副葬品として取り上げることができなかったためと考えておきたい。この他、羨道では下肢骨のみが配された状態で出土している。

以上、出土人骨を中心に被葬者に関する考察を実施した。また次節以降において、内部主体である石室及び副葬品の一部である小札を取上げ、被葬者像を考察するための考察を深めることとする。（谷畑）



第3図 SZ-473・SZ-478における人骨の出土状態（『四十八塚古墳群』2011より転載）

② 横穴式石室からみた四十八塚古墳群の様相

四十八塚古墳群の横穴式石室は平面形から大きく二つに分類される¹⁷⁾。

一つは、無袖型で長方形の玄室を持つ石室（無袖型長方形）である。玄室と羨道の側壁が一直線に接続し、石室幅の変化による区画はないが、床面の仕切、段差等で玄室と羨道を区画している。天井は残存するものがなく、特徴が不明確である。玄室は奥側の方が幅広のものと同じ幅のものがある。

もう一つは、両袖型で側壁が曲線を描く胴張形の玄室を持つ石室（両袖型胴張形）である。玄室と羨道の区画が、羨道幅を狭めることによって行われる。他の古墳群では羨道幅はそのままで側壁の一部を突出させることによって区画する疑似両袖型もある。立面的には、多段積みで立柱石を持たない素形と立柱石を持つ玄門形があるが、四十八塚古墳群では立柱石を持つ袖部は見られない。足利市域の横穴式石室では天井は袖部で段差を持つもの、斜めに低くなるものがある。四十八塚古墳群では天井が残存するものはない。

SZ - 472、SZ - 478は無袖型長方形、SZ - 33、SZ - 471、SZ - 473、SZ - 480は両袖型胴張形、SZ - 335は両袖型である。SZ - 479は主体部の石材が確認されたが詳細は不明である。SZ - 01、SZ - 02、SZ - 32、SZ - 81、

SZ-100、SZ-489、SZ-562は周溝のみの確認で、主体部は確認されていない。

確認された中で最大の規模を持つのは、SZ-478の横穴式石室である。無袖型長方形で、全長5.6m、玄室長4.0m、奥壁幅1.05m、羨道前幅0.75mである。側壁は石灰岩の割石を平積みしている。裏込めに石灰岩の割石を多量に使用する。玄室床面の敷石にはチャートと石灰岩角礫が使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれるが、段差は小さく、入口に向かって緩やかに高くなる。入口周辺は低くなるが、墓道は舌状を呈し、周溝に接続しない。無袖型長方形で類似する形態の石室には、黒袴台SZ-860がある。

確認されたもう1基の無袖型長方形のSZ-472は、SZ-478に比べると規模が小さく、全長3.5m、玄室長2.6m、奥壁幅0.7m、羨道前幅0.8mである。石灰岩の割石を使用しているが、側壁最下段を縦置きしている。このため、同じ無袖型長方形としたSZ-478とは別系譜の可能性がある。玄室床面の敷石にはチャートが使用されるが、羨道には平石が一枚残るのみである。周溝に接続する墓道はない。

最大の規模の無袖型長方形のSZ-478に次ぐ規模を持つのは、両袖型胴張形のSZ-33である。全長5.0m、玄室長3.5m、奥壁幅1.0m、最大幅1.5m、羨道前幅0.9mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしている。裏込めに石灰岩の割石を使用する。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べて深く、覆土上位に石室の石材が散乱する。

両袖型胴張形でSZ-33に次ぐ規模を持つのはSZ-471である。全長4.7m、玄室長3.4m、奥壁幅0.8m、最大幅1.1m、羨道前幅0.9mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしており、玄室中央位の石が最も大きい。裏込めに石灰岩の割石を使用する。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。羨道前面から墓道にかけての底面に埴土がある。石室前面の周溝は周囲に比べて深い。

両袖型胴張形でSZ-471に次ぐ規模を持つのはSZ-480である。全長4.1m、玄室長2.7m、奥壁幅0.8m、最大幅1.2m、羨道前幅0.6mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしている。裏込めに石灰岩の割石を使用する。羨道最下段の石に横長の大きめの石を使う。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べてやや深いが、周溝の幅が狭く小規模であるため、SZ-33やSZ-471ほど深くない。

確認された中で最小の規模を持つのは、SZ-473の横穴式石室である。全長3.4m、玄室長2.4m、奥壁幅0.9m、最大幅1.0m、羨道前幅0.7mである。側壁は石灰岩とチャートの割石を横積みしている。左右側壁で袖部の石の使い方が異なる。左側壁が床面の仕切石の位置より奥側で幅を狭めているのに対し、右側壁は横長の石の入口側に床面の仕切石が位置し、幅も狭めていない。このため、無袖型か片袖型のように見えるが、最大幅が玄室中央にあることから両袖型胴張形と考えられる。掘り方と側壁石材の間が狭く、裏込めには石が詰められるが、掘り方が小さいため、少ない。玄室床面の掘り方上には直接チャートの割石が敷かれる。袖部と入口の二ヶ所に仕切となる細長い石が置かれ、その間を埋めるように大きめの割石を詰めるが、仕切石はその大きさが石室幅に満たないため、隙間があったり、複数だったりしている。その上には底面の割石より小さめの敷石、やや大きい閉塞石が載り、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道よりわずかに低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べてわずかに深いが、SZ-33

やSZ-471ほど深くない。

SZ-335は側壁の校正の削平によって失われた部分が多いため、両袖型であること以上に断定できない。全長4.4m、玄室長3.1m、奥壁幅1.5m、最大幅1.8m、羨道前幅0.9mである。側壁の残存と思われる石灰岩の割石が外縁近くに分布している。玄室床面相当部分にはチャートの敷石と思われる石材が多い。羨道は玄室より高かったと思われ、その分だけ削平により側壁、敷石の消失部分が多い。周溝も全周せず、一部にそれと推定される落ち込みが残りのみで、周溝まで突き抜ける墓道は確認できない。

四十八塚古墳群では、足利・佐野市域に分布する、機神山山頂古墳のような無袖型胴張形石室、正善寺古墳のような両袖型長方形石室は確認されていない。無袖型長方形の石室は少なく、両袖型胴張形の石室が主体を占め、後期群集墳的な均質な様相を呈すると言える。しかし、前澤輝政氏調査による出流原5号墳は無袖で胴張があったと報告されているので、他の類型の石室の存在を否定できない。(中村)

③ 小札甲を出土する群集墳としての四十八塚古墳群

四十八塚古墳群は、小札甲を副葬することが注目できる。小札甲を出土した四十八塚古墳群SZ-334とSZ-335の2基は、後期群集墳の中に存在する中小規模の円墳で、他の古墳とくらべて特に規模が大きいわけではない。

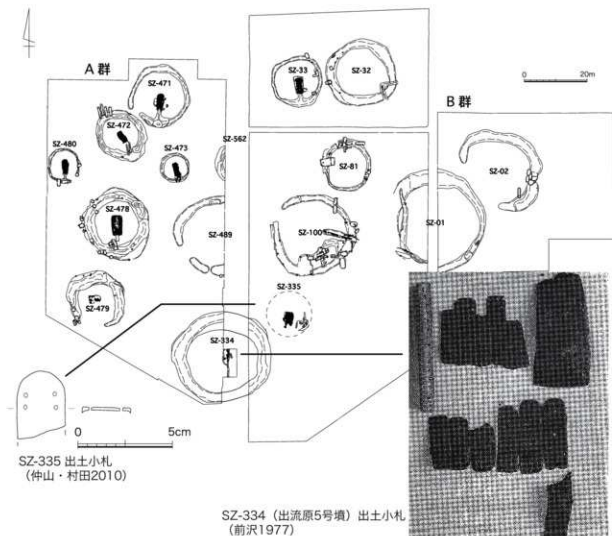
四十八塚古墳群SZ-334は墳径25mの円墳で、これと同一古墳(仲山ほか2011, pp. 25, 513)と考えられる出流原5号墳は、耕地区画整理の道路建設にともなう1954年の調査で横穴式石室から小札甲が出土している(前澤1955・1977)。小札甲の詳細は報告されていないが、公表された写真から判断すると臍孔1列の偏円頭形で礼幅がやや広いと見られるので、後期第3段階(内山2006)、つまりTK43型式並行期・6世紀後葉ころの可能性がある。1954年の調査では古墳時代人骨4体(成人男性3・成人女性1)・小札甲・鉄鏃12・耳環3・轡1・小刀2・勾玉1・丸玉1・小玉75・滑石製紡錘車出土し、高速道路建設に先立つ2005・2006年調査では、埴輪多数・鉄鏃1・鉸具2が出土した。

四十八塚古墳群SZ-335は径15m以下の小円墳と推定され、高速道路建設に先立つ2005年の調査で小札甲が出土した。小札は臍孔2列の円頭形で、6世紀に多い種類であるが、破片1点だけなので詳しい時期を検討することは難しい。SZ-334とSZ-335の小札は種類が異なるので、SZ-334から隣接するSZ-335の石室へ二次的に小札が移動混入したものではなく、それぞれの石室に小札甲が副葬されていたことがわかる。

後期群集墳の中小円墳に小札甲を副葬することは、群馬県域と、それに隣接する栃馬県域西部と埼玉県域北部、つまり北関東西部に目立つ特色である。栃馬県域西部の後期群集墳では、足利市明神山古墳群でも小札甲が出土している(前澤1979)。群馬県域では伊勢崎市蟹沼東古墳群や高崎市山名古墳群(山名原口I・II遺跡)、埼玉県域では神川町青柳古墳群が代表的な事例で、それぞれ墳径10～20m級の複数基の円墳に小札甲を副葬している。

倭における古墳後期の馬具・甲冑・装飾大刀出土古墳数をみても、群馬県域を中心とする北関東西部で最も多く、群集墳での出土例も目立つ。軍事関係者の層が厚く、小札甲の所有・副葬に対する規制が緩かったのだろう。

北関東西部以外の地域では、群集墳中の一般的な円墳から小札甲が出土することはきわめてまれである。このような地域差の背景については、次章で検討を行う。(内山)



SZ-335 出土小札
(仲山・村田2010)

SZ-334 (出流原5号墳) 出土小札
(前沢1977)

第4図 群集墳から小札甲が出土する四十八塚古墳群 (1/1,200)

5. 結果と考察

四十八塚古墳群は6世紀後半から7世紀前半に築造されたもので、計16基の古墳は大きく3つに分けられている。

初期に造営されたSZ-334、SZ-478は墳丘規模が大きく、SZ472からSZ33、SZ471、SZ473、SZ480と新しくなるにつれた墳丘規模は小さくなる。これは報告書にあるように周溝を回避しているためと考えられる。また横穴式石室のほとんどは両袖型のものであり、無袖型長方形のものはSZ-472、SZ-478と少なく、なっている(SZ-33、SZ-471、SZ-473、SZ-480は両袖型胴張形、SZ-335は両袖型)。

四十八塚古墳群の中でも今回取り上げた5基(SZ-33、SZ-471、SZ-472、SZ-473、SZ478)の中でも、最古の造営とされるのはSZ-478である。

SZ-478(無袖型長方形)は、埴輪を持っており、本古墳群の中では最も古い古墳である。また埴輪の中には十字文楕円形鏡板付轡を表現する馬形埴輪(第5図2)が含まれている。

被葬者の人数は成人3-4体程度とみなされ、他の古墳に比して多いというわけではない。埋葬順序は、羨

道側、中央、奥壁と推定される。しかし、副葬品の一つである玉類は豊富に出土しており、奥壁付近に埋葬されている被葬者の頭部から管玉やガラス製小玉の一部が出土していることから、これらの玉類を首飾りとして、また耳付近から出土している耳環を被葬者に装着させていたと考えられる。

また周溝覆土中から TK43 型式でもやや古い特徴を持つ須恵器甕が出土している。さらに鉄鏝には TK10 型式期から TK217 型式期のものが出土しており、年代幅がある（第 5 図）。鉄鏝の多くは奥壁付近から出土しており、直刀の配置などから見ても奥壁付近にもう一体埋葬されていた可能性がある。また出土地点から、奥壁付近の被葬者は鉄鏝・直刀・轡引手も保持していたとみなされ、他の 2 人の被葬者よりも副葬品が多くなっている（3）。しかしそれぞれの被葬者の性別や年齢は不明である。

石室の規模が次いで大きいのは SZ-33（両袖型胴張形）である。本石室に埋葬されている 3 体はいずれも成人個体であり、頭位を北向きにとる 2 体は、歯牙の咬耗から壮年と推定される。埋葬順序は羨道側、奥壁側、中央と推定される。

頭位を北向きにとる 2 個体のうち、奥壁付近の成人個体は女性、玄室中央に位置する成人個体は男性と推定されている。しかし、人骨以外の資料が出土しておらず、それぞれの被葬者に伴う副葬品については不明である。

3 番目に大きな規模を持つのは SZ-471（両袖型胴張形）である。本石室では、奥壁付近に下股骨を中心とした集骨状態の埋葬が確認されており、下股骨の中には、やや盤状を呈する配置になっているものもある。集骨埋葬は 1 体以上の埋葬の可能性が高いが、このうち 1 体は成人男性と推定される。この他、奥壁に向かって、北に頭位をとると推される成人 1 体が出土している。

また石室からではなく墓道から頭が長く葬送儀礼の際に使用されたとみなされる瓶が出土している。このガラス瓶は、口縁端部の段を失っている新段階のものであり、7 世紀中葉頃に埋葬行為を行われたことを示すものである。人骨の配置からみて数回の片付けがなされていることは明らかであるが、被葬者は基本的に玄室中央に埋葬されている。本石室では人骨以外の資料は出土しておらず、副葬品と被葬者の関係は不明である。

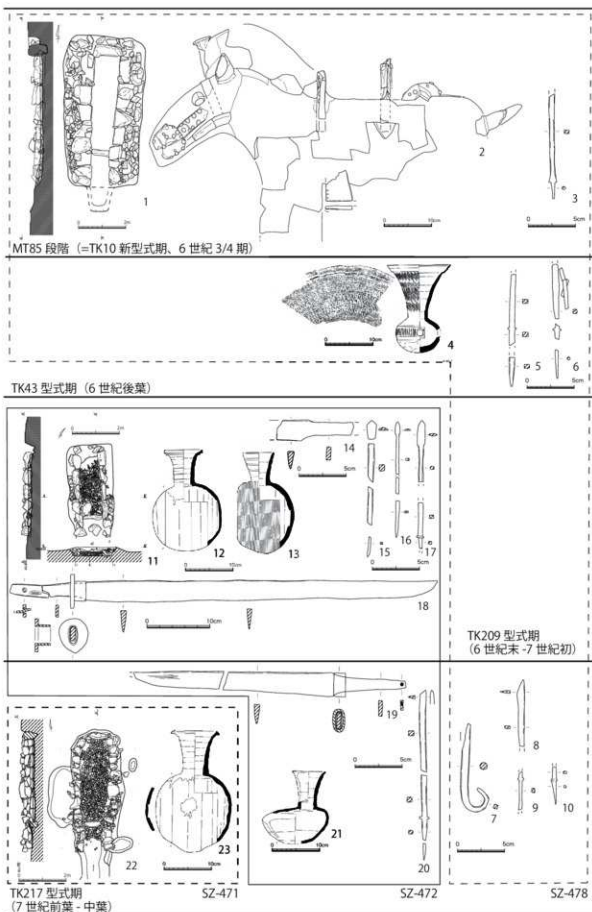
SZ-472（無袖型長方形）は規模が小さいが、被葬者は成人 3 体と考えられる。人骨の配置からみて数回の片付けがなされているが玄室中央に埋葬するのが基本と考えられる。玄室からは鉄鏝・直刀などの鉄製品の他、弓金具が出土している。出土地点から鉄鏝・刀子・弓金具は成人 2 体の被葬者がそれぞれ保持しているが、直刀は玄室中央に埋葬されている被葬者にのみ伴うものと考えられる。このうち、直刀を保持している被葬者は、歯牙の咬耗から壮年と推定される。

またサイズと出土地点の異なる耳環が 2 点出土しており、これらは 2 体分の装身具とみなされる。しかし、これら 2 点の耳環の出土地点からは人骨が出土していないため、この地点に、さらに数体の被葬者が埋葬されていた可能性がある。

小玉はガラス製のものが 83 点出土しており、材質が異なるものが 3 点出土しているが、これらは石室東側および石室全体にちらばった状態で出土しているため、被葬者である人骨との関係は不明である。

この他、年代を認識できる遺物があり、扁平な提瓶と、頭がまだ短く口縁端部に段を持つ古段階のフラスコ形瓶と、不均等両側の鉄刀と、浅い鎌身間のある長頭両刃鏝（いずれも TK209 期頃、第 5 図 12～18）、頭が直立して口縁ラインが水平になった段階の平瓶および均等両側鉄刀と鎌身間の退化した長頭片刃鏝（7 世紀中葉ころ、第 5 図 19～21）が出土しており、年代幅があることは明らかである。

SZ-473（両袖型胴張形）は四十八塚古墳群の中でも規模が最小のものである。本石室には 3 体の成人個体が



第5図 四十八塚古墳群 SZ-471・472・478 出土遺物の年代幅 (仲山他 2011 年から作成)

埋葬されている。人骨の配置からみて数回の片付けがなされているが玄室中央に埋葬するのが基本と考えられる。また、副葬品としては銅金銀張耳環が出土しており、その出土地点から、奥壁付近に埋葬されている被葬者のものと考えられる。

このように石室の規模には大小があるが、被葬者の人数は3人程度が基本となっているが、副葬品の被葬者との関係を認識するための十分な資料が存在しない。しかし、主体部の規模が大きく奥壁付近の被葬者では副葬品が多くなっており、その他の古墳においても奥壁付近の初葬の人物に対して、特別な扱いがあるのかもしれない。また四十八塚古墳群では確認されていないが、栃木県中央部に位置する古墳では周溝内埋葬が確認されることがある。石室内への追葬が確認できる四十八塚古墳群において周溝内埋葬が確認できない理由として、こうした周溝内埋葬は、追葬と一部機能的に重なるものであると考えることが可能である。周溝内埋葬は栃木県中央部の琴平塚5号墳(中村2004)、宇都宮市聖山公園6号墳(梁木1993)、小山市飯塚38・43号墳(鈴木1999)で見られるが、それらでは中心主体部が横穴式石室墳であるのに敢えて周溝内へ埋葬されている。このような場合には、その横穴式石室が地下式若しくは小規模であるため、追葬が不可能・困難であったことによる物理的理由が想定できる。一方、下野市石橋横塚古墳(下野市教委2015)のように巨大な横穴式石室を持ちながら周溝内埋葬が行われている場合には石室内への埋葬と区別するための社会的理由が想定される。

例えば、四十八塚古墳群より新しい7世紀中葉から8世紀にかけて形成された多功南原遺跡第1区の墳墓群(栃木県内務部上三川町)では、7世紀中葉の大形方墳である多功大塚山古墳の南側で、側壁挟り込み土坑墓6基と木棺墓1基が調査されている(山口・及川・藤原1999)。このうち側壁挟り込み土坑墓SK-727には、あまり高齢でない成人女性が、骨化した後に動かされた状態で埋葬され、一對の耳環が副葬されていた(茂原・芹澤1999)。栃木県域中央部・南部において古墳の周溝内埋葬としても数多く造営された側壁挟り込み土坑墓が、耳環を着装する階層の再葬施設に用いられていた事例と考えられる(中村2004, p.192; 水野他2014, p.67)。四十八塚古墳群において、こうした周溝内埋葬が確認できない理由は不明であるが、当時の埋葬習慣まで考慮しつつ考察していく必要がある。

さらに副葬品との関係は一部の被葬者を除いて不明であり、性別や年齢による副葬品との関係を見ることはできていない。しかし副葬品の中には特殊なものもあり、ここでは小札甲を中心に考察を進めている。

小札甲が副葬されている古墳のうちSZ-334では、1954年の調査で男性3体・女性1体の成人人骨が出土している。甲冑は男性被葬者に副葬されることが知られている。甲冑・裝飾大刀・裝飾馬具などはその古墳を築造する契機となった初葬の被葬者に伴う副葬品と解釈される場合が多い。しかし、副次的被葬者や追葬者に甲冑が副葬される事例も古墳時代を通じて一定数が認められる(内山2015)。

小札甲の副葬にはある種のパターンがある。すなわち鉄製小札甲は製作に莫大な手間と材料を要するので、墓に副葬できる階層は限られている。

群集墳の中に位置する最大規模の「盟主墳」つまり前方後円墳や大円墳から甲冑が出土する場合はあっても、通常規模の円墳からは出土せず、小札甲や冑を出土する後期古墳は、地域の首長墳つまり前方後円墳・大形円墳・有力横穴墓・裝飾横穴墓などである。すなわち、後期群集墳中の一般的な円墳から小札甲が出土することはきわめてまれであるが、北関東西部ではその限りではない。

四十八塚古墳群では小札甲を副葬している古墳(SZ-334とSZ-335の2基)が特に規模が大きいというわけではない。このように北関東西部では、群集墳の円墳被葬者層まで稀少な鉄製小札甲が供給・副葬される

場合があり、近畿中央政権による軍事編成が相対的に下層まで及んだためとみることができるのである。また、時期に近い多数の小形前方後円墳を群集墳内を含む東関東に比べると、群集墳に前方後円墳を含まない佐野地域の四十八塚古墳群や、群集墳内の前方後円墳が各世代に1基程度の足利・群馬地域では、墳形選択の自由度は低かったとみられる。このことも、近畿中央政権との関係の強さから理解できるかもしれない。

(谷畑・中村・内山)

6. まとめ

古墳時代の下野地域には三王山南塚2号墳に関係する首長層が台頭し、5世紀末から6世紀前葉にかけて摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳が築造され、後期には横塚古墳・御鷲山古墳・下石橋愛宕塚古墳、終末期には切石種の横穴式石室をもつ大形円墳が築造される地域(丸塚古墳・壬生車塚)と大型方墳が築造される地域(多功大塚山古墳・多功南原1号墳)に分かれている。

四十八塚古墳群の墳丘径は10～20mであり、古い古墳のほうが墳丘規模あるいは内部主体は大きい傾向にある。内部主体が確認できているものすべては横穴式石室であり、石室の規模に関わらず、被葬者数は約3人となっている。また四十八塚古墳群の中には中世以降に墓として使用されていた古墳(SZ-334)がある。またこうした例は佐野市域近辺では確認できていないが、黒袴台遺跡のように群集墳と中世墓域が重なる事例は報告されている。

以上、細片状の人骨を対象に、そこに含まれる人類学的な情報を提示し、被葬者の埋葬状況や被葬者像に関する考察を行った。今回観察を実施した石室では、奥壁付近羨道にかけて歯牙や下肢骨などの骨片が数点散らばった状態で出土している。また、頭蓋骨片と下肢骨片の出土地点から被葬者の頭位や人数などを明らかにすることができている。

繰り返しになるが、古墳時代の埋葬遺構から出土する人骨は、ごく一部の例外を除いて遺存状態が不良なため、形態的特徴を把握できる資料は限定されている。そのため、性別や年齢などといった被葬者に関する基本的情報を抽出することが難しく、結果として被葬者である人物像を考察することが不可能なため、縄文時代や弥生時代の人骨のように形態的特徴に関する地域差や時期差についての議論が進められずにいる。

また、古墳に埋葬されている被葬者についても人骨資料から考察した研究は極めて少ないのが現状である。そして古墳の出土人骨の多くは、人類学的な研究の対象資料にもなっていないのである。

特に副葬品とその被葬者をあわせた研究は、複数個体が埋葬された遺構の場合、難しい面が多い。これは数回にわたって実施された追葬により、被葬者である人骨の埋葬位置が意図的に移動されているためだが、筆者のこれまでの経験によれば、古墳の埋葬人骨は破片状態という特徴がつかみづらい状況ではあっても、歯牙などの一部の部位はほとんど移動させられておらず(細片過ぎるために持ち運びの対象にならなかつたと推測される)、原位置を保ったままの状態でも出土することが多い。

このため、被葬者の一部である人骨片を、発掘調査時に、1点ずつ出土地点を記録してとりあげ、その後、それらを観察することで、被葬者やその埋葬状況について、考察を進めていくことは可能である。

また本稿で試みたような研究は、基本的に、発掘現場において詳細な取上げ作業が実施された場合においてのみ、可能となる。これまで古墳の出土人骨については、遺存状態が不良なことが多いため、人類学的には注目されることが少なかったが、今回、たとえ遺存状態のよくない資料であっても、出土地点を記録し、地道な同定作業を行うことで、被葬者と副葬品に関するコラボレーション的な研究ができることが明らかになった。すなわち、古墳や横穴の発掘調査にあたっては、一見、人骨の遺存状態が不良であっても、1点ご

との取上げが実施されなければならないのである。

また遺存状態が不良な個体であっても、歯牙はほとんどの場合、遺存しており、そこには病的所見が残されていることがある。これらの病気の所見はその人物が罹患した疾患のすべてを物語るわけではなく、死因を特定できるものはまれである。しかし、骨髄炎など比較的出现頻度の高い所見を中心に観察を進めていくと、被葬者像を考察する上で重要な手掛かりとなることがある。

本稿において分析対象としたのは、大きさが約5 cm以上の人骨資料である。これ以下の大きさ、または部位同定が不可能な資料については、今回は観察対象とはしなかった。さらにより微少な破片資料であっても、理化学的分析によって年代や食性に関する情報を提示できる場合もある(米田 2015)。そのため、観察対象とする資料が破片状態であっても、私たちは手抜きなく、それに対峙しなければならないのである。また現段階では被葬者の人数等についての考察は、試論の域を出ない部分が多くなっている。そのため、今後調査事例を増やしつつ考察を深めていきたいと考えている。

(谷畑・中村・内山)

本稿の執筆は谷畑、中村、内山が行った。執筆分担者は各項の最後に記してあるが、見解や文章については3人で協議を行い、内山が全体を調整した。

謝辞 本稿を執筆するにあたっては下記の方々のお世話になった。亀田幸久・進藤敏雄・中山英樹・村田沙織(とちぎ未来づくり財団)・宮代栄一(朝日新聞社)(敬称略)。中でもとちぎ未来づくり財団が実施した四十八塚古墳群の発掘調査では現場責任者・調査担当者・発掘調査補助員の方々に人骨資料の丁寧な取上げを実施していただき、古墳時代研究の被葬者に関する考察を推進させる手掛かりとなり、いかに現場の情報が大切かを再確認するものとなった。記して感謝の意を表することとする。

註

- (1) 歯牙の咬耗の程度は、必ずしも正確な年齢を提示するとは言えないが、一般に最も遺存しやすい歯牙の咬耗から年齢推定されている。Broca I は成年から壮年、Broca II は壮年後半から熟年に相当するものとなる。
- (2) 報告書ではSZ-33 が両袖型胴張形、SZ-471、SZ-473、SZ-480 は無袖型胴張形とされている。筆者は、袖部の屈曲が弱く、玄室前幅と羨道奥幅の差が小さいため、無袖型に見えるものでも、玄室と羨道の側壁の石材の積み方に違いがあるものや、胴張りの描く曲線が玄室だけで羨道が直線的なものは両袖型とみなした。
- (3) 台形間の長頭畿(TK10-MT85 型式期か) 一頭基部がさほど細くない点でTK43 型式でもやや古い特徴を持つ須志器種一級身間が退化した片刃長頭畿と髷の「戴手引手」の破片(TK-217 型式期か) までの年代幅がある。

参考文献

- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向—思川・田川水系を中心として—」『栃木県考古学会誌』第9集、栃木県考古学会
- 秋元陽光 2007 「河内郡における終末期古墳」『栃木県考古学会シンポジウム 上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会
- 阿部知己 1998 「小規模古墳における周堀内大型土壌に関する一考察」『峰考古』第13号、宇都宮大学考古学研究会

- 石川正之助 1981『高塚古墳』『群馬県史』資料編3 原始古代3、群馬県史編さん委員会
- 市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代 1992「足利市域における古墳調査の状況」『唐澤考古』第11号、唐澤考古会
- 市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代・斎藤和行 1996『口明塚古墳発掘調査報告書』足利市文化財調査報告第31集、足利市教育委員会
- 井上唯雄 1987「第4章古墳 二ツ山古墳」『新田町誌』第2巻 資料編(上)、新田町
- 内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号、古代武器研究会
- 内山敏行 2011「栃木県城南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群—下毛野の霸王、吾妻ノ岩屋から車塚へ—』平成22年度壬生町歴史民俗資料館企画展 壬生町歴史民俗資料館
- 内山敏行 2015「武器・武具から探る—古墳時代の人びと—」『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察』日本先史文化研究所
- 梅沢重昭 1995「毛野から上毛野へ」『武蔵国造の乱 考古学で読む『日本書紀』』大田区立郷土博物館
- 江原英・大野淳史 2012「木村古墳群」『県営園地整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事生活会要報告書—平成21～23年度緊急雇用創出事業に係わる整理作業報告書—』栃木県埋蔵文化財調査報告第344集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 大川 清 1963「唐沢山ゴルフ場強跡」『栃木県佐野市安藤山麓古代宗業遺跡』佐野市教育委員会(大川 清1976「唐沢山ゴルフ場強跡」『下野の古代宗業遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第18集、栃木県教育委員会に再録)
- 大橋泰夫 1990「下野における古墳時代後期の動向—横穴式石室の分析を通して—」『古代』第89号、早稲田大学考古学会
- 大和久震平・加藤隆昭 1971『大平町七廻古墳群』大平町教育委員会
- 大和久震平 1972「第5章 古墳文化」『栃木県の考古学』吉川弘文館
- 大和久震平 1974『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会
- 小片彦彦 1981「日本古人骨の疾患と損傷」『人類学講座』5、雄山閣、pp.189-228
- 木村 等・大橋泰夫 1986『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県埋蔵文化財調査報告第76集、栃木県教育委員会
- 草野潤平 2015「横穴式石室からみた東北・関東の交流—阿武隈流域を中心として—」菊地芳樹代表『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類
- 倉田芳郎 1972「西方山古墳群」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 栗原有未・松浦真由美・出居 博 2003『ムジナ塚遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第26集 佐野市教育委員会
- 小池一之・鈴木毅彦 2000「鬼怒川低地」『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 小池一之・吉永秀一郎 2000「八溝山地」『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 今平利幸他 1985「宇都宮市岩木町権現山古墳墳丘測量及び石室測量調査報告」『峰考古』第5号、宇都宮大学考古学研究会
- 斎藤 弘 1989「足利明神山古墳群の築造年代について」『唐澤考古』9、唐澤考古会
- 斎藤 弘・中村享史 1992「足利明神山古墳群の形成過程について」『研究紀要』第1号、(財)栃木県文化振興事業団
- 茂原信生・芹澤雅夫 1999「第2節 SK-727出土の人骨」『多功南原遺跡 理化学分析編』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団、pp.9-10
- 下野市教育委員会 2015『横塚古墳発掘調査現地説明会資料(2015.3.18)』
- 進藤敏雄・村田沙織 2012『菅田古墳群—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XXII—』栃木県埋蔵文化財調査報告第351集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団

- 鈴木一男 1999『飯塚古墳群Ⅲ―遺構編―』小山市埋蔵文化財報告第44集、小山市教育委員会
- 鈴木敏彦 2000『足尾山地と渡良瀬川』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 竹澤 謙・赤山容造 1973『栃木県矢板市境林古墳発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 栃木県古墳勉強会 2004『中山（禰門堂神）古墳調査報告』『栃木県考古学会誌』第25集、栃木県考古学会
- 栃木県古墳勉強会 2005『中山（禰門堂神）古墳調査報告2』『栃木県考古学会誌』第26集、栃木県考古学会
- 津野 仁 2012『甲塚古墳―重要遺跡範囲確認調査―』栃木県埋蔵文化財調査報告第343集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 中村享史 1996『鬼怒川東岸城の横穴式石室』『研究紀要』第4号、(財)栃木県文化振興事業団
- 中村享史 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 中村享史 2011『後期後半から終末期の下毛野』『古墳時代毛野の実像 季刊考古学別冊17』雄山閣
- 中村享史 2015『栃木県域の古墳編年』『シンポジウム 地域編年から考える―部分から全体へ―』第20回東北・関東前方後円墳研究会大会 発表要旨資料、東北・関東前方後円墳研究会
- 仲山英樹・村田沙織・亀田幸久 2011『四十八塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第340集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 橋本澄朗・芹澤清八・仲山英樹・斎藤恒夫・竹前大輔 2001『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第261集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 前澤輝政 1982『毛野国の研究―古墳時代の解明―』上・下 現代思潮社
- 前澤輝政 1955『栃木県安蘇郡赤見町出流原古墳群調査概報』、pp.1-6
- 前澤輝政 1977『下野の古墳』栃の葉書房、pp.91-94
- 前澤輝政 1979『第一編 原始古代』『近代足利市史』第三巻 足利市発行、pp.35-183
- 水野順敏・柏崎広伸・新井潔・石川和弘 2014『大塚古墳群(B区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第87集、宇都宮市教育委員会、p.67
- 矢島俊雄他 1988『向原遺跡・寒沼遺跡・十二天塚古墳』佐野市教育委員会
- 山口耕一・及川真紀・森原睦美 1999『多功南原遺跡 奈良・平安時代編』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団、pp.20-21,117-120
- 梁木 誠 1993『聖山公園遺跡 根谷谷台遺跡(古代・中近世編)』宇都宮市埋蔵文化財報告第31集、宇都宮市教育委員会
- 米田 穰 2015『食性分析から探る古墳時代の人々』『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る―ヒトとモノからの考察』日本先史文化研究所

下野国府跡出土「陳延莊」銘木簡についての覚書

—百済王俊哲との関係検討を中心に—

池田敏宏

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 はじめに—下野国府跡出土「陳延莊」銘木簡について— | 4 百済王俊哲とは何者か |
| 2 「陳延莊」銘木の出土遺構 | 5 収束—「貧外史生陳延莊」とは何者か— |
| 3 延暦九～十年の下野国の動静 | |

本稿は、冒頭で下野国府跡出土「陳延莊」銘木簡（№4140 木簡）本体と出土遺構の概要（土坑の埋没は延暦10年（791）7月以降と考えられている）をふれたのち、延暦九～十年（790～791）頃の『続日本紀』記載下野国記事を整理する。その上で「貧外史生陳延莊」の考課と評定者（当該期の下野守）の関係考察を行った。その結果、「百済王俊哲以前に陳延莊が下野に赴任」するケース、「百済王俊哲と共に陳延莊が下野に赴任」するケースの2つが想定できることを提示した。

1 はじめに—下野国府跡出土「陳延莊」銘木簡について—

筆者は、平成27年度担当職務の一つとして、埋蔵文化財センター常設展示室設置に携わる機会を得た^①。そして「飛鳥・奈良・平安時代」展示部門の準備（資料調べ、解説パネル作成等）を進めるなかで、下野国府跡出土木簡№4140（本稿では「陳延莊」銘木簡と呼称する）に関わる事々に気付き、関心をもった。本稿は、それを整理・検討し直した覚書である。

まず、はじめに、「陳延莊」銘木簡の概要を記す。木簡は、上端は割損し、下端も腐食しているものの、残存最大長は214mm、幅29mm、厚さ4mmほどである。板目の木取りに「(去)上 貧外史生陳延莊」と墨書されている（田熊ほか1987, 102頁）（第1図）。

2 「陳延莊」銘木簡の出土遺構

次に、「陳延莊」銘木簡が出土した遺構＝土坑SK-023の概要を記す。第一に、土坑本体について整理する。SK-023は下野国府跡第18次調査区^②のほぼ中央に位置する隅丸方形の土坑である。規模は長軸が2.6m、短軸が2.3m、深さが0.5mほどである。埋土は、「土坑使用時の堆積土（下位から灰褐色土、灰色粘質土、下層 黒色土＝多量の木簡削屑を含む）とSK-023を埋めた土（上層 暗褐色土・下面より漆紙文書が出土）」に分層される（田熊ほか1987, 19頁）（第2・3図）。

第二に、土坑SK-023の年代的位置付けを記す。まずは土層堆積について整理する。上記したようにSK-023の最上層は土坑放棄時の埋め戻し土（暗褐色土）であるが、報告書によれば、SK-023最上層（暗褐色土）の上に、さらにⅡ期政庁焼失後の整地土層（Ⅲ層）が覆っていたことが記されている^③。次に共存遺物について整理する。本土坑SK-023からは「陳延莊」銘木簡以外にも多量の木簡片が出土^④している。とりわけ「延暦九年」「延暦十年□」「延暦十年七月」「延暦十年七月卅□」など年紀の認められる木簡片が複数点出土していることから、「土坑の埋没は延暦10年（791）7月以降」と考えられている（田熊ほか1987, 162頁）。

では、延暦九～十年の下野国は、どのような状態にあったのであろうか。次節では、文献資料をもとに、その動静を記述してみたい。

3 延暦九～十年の下野国の動静

初めに、延暦九年(790)の下野国に係る『続日本紀』記事を整理してみると、蝦夷征討のため東海道駿河以東、東山道信濃以東の諸国に命じて革の甲二千領を作らせた(国ごとに数の割り当てがあり、三年以内にそれぞれの国に作り終わらせることを命じた)記事(閏三月四日条)、東海道相模以東、東山道上野以東の諸国に糧14万石を準備させた記事(閏三月乙未条)、坂東諸国は軍役を課せられたうえ、疾病と旱魃の害を受けたので今年の田租を免じる記事(十一月己丑条)が掲載されるのみであった⁹⁹⁾。

一方、聖・延暦十年(791)の『続日本紀』記事を見てみると、

「遣正五位上百済王俊哲 従五位下坂上大宿細田村麻呂於東海道、従五位下藤原朝臣眞鷲於東山道、簡間軍士、兼檢戎具。為征蝦夷也」(正月己卯条)

と記されている。加えて、正月癸未条は

「正五位上百済王俊哲為下野守」

という記事を、さらには、

「従四位下大伴宿禰弟麻呂為征夷大使。正五位上百済王俊哲 従五位上多治比真人兵成 従五位下坂上大宿細田村麻呂 従五位下巨勢朝臣野足並為副使」(七月壬申条)

という記事や、

「下野守正五位上百済王俊哲為兼陸奥鎮守將軍」(九月庚辰条)

といった記事を、立て続けに見ることができる¹⁰⁰⁾。しかも、百済王俊哲の下野守在任時期とSK-023出土木簡群(「陳延廷」銘木簡含む)の年代観に重複が認められるのは非常に興味深い(「V収束」で詳論)。

4 百済王俊哲とは何者か

ところで、百済王俊哲とは、どういった人物なのであろうか。本節では、その経歴・事績について見てみたい。

百済王俊哲は、「くだらのこにきし しゅんでつ」と読む。その名が示すとおり、亡命百済王家の後裔¹⁰¹⁾である。また、それと同時に、八世紀後半代、東北経営に活躍した律令政府官人の一人でもある。「宝龜六年(775)十一月、大伴宿禰駿河麻呂らによる蝦夷征討に参加し、勳六等を授けられた。時に従六位上。同九年六月にも、征戦に功があり勳五等を授けられた。同十一年三月、正六位上から従五位下に、さらに四月には従五位上に昇叙」している(坂本・平野ほか監修1990,264頁)。宝龜十一年(780)六月、伊治麻呂の乱に際し陸奥鎮守副將軍に任ぜられ苦戦を征した¹⁰²⁾。その功により天応元年(781)九月、正五位上勳四等を授けられた¹⁰³⁾。

しかし延暦六年(787)閏五月、「陸奥鎮守將軍正五位上百済王俊哲坐事左降日向權介」とあり¹⁰⁴⁾、「何らかの事件に坐して日向權介に左遷された」ことが知られる(坂本・平野ほか監修1990,264頁)。

それでも三年後の延暦九(790)年三月、「日向權介正五位上勳四等百済王俊哲免其罪令入京」と、罪を免ぜられて京に戻っている[免罪の背景には「彼の武官としての才が惜しまれたことと、その前月百済王氏を外戚とする詔が出され、同氏に対する礼遇が高められたことにある」(国史大辞典編集委員会1983,807頁)]。ゆえ、これ以降は、「桓武天皇のいわゆる第二次蝦夷征討に参加せしめられ、延暦十年正月、蝦夷征討の兵士・

武器を観閲するため東海道に遣わされたのち、同月、下野守を、同年九月、下野守と陸奥鎮守将軍の兼任を命じられている（国史大辞典編集委員会 1983, 807 頁、ならび上記「3 延暦九～十年の下野国の動静」参照）。なお、俊哲は、延暦十四年八月辛未に没していることから¹¹¹、延暦十年（791）～同十四年（795）八月に至るまでの四年間、下野守と陸奥鎮守将軍を兼任していたことがわかる。

5 収束—「員外史生陳廷莊」とは何者か—

最後に、「陳廷莊」銘木簡について検討を加える。第一に、「史生」とは、「中央・地方の諸官司に置かれた下級書記的な職員」を指す（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）。なお、上国（＝下野国含む）には「史生三名」を置くことが「職員令第二」（『養老令』以下、省略）に定められている（井上ほか 1994, 193 頁）。第二に、「員外」であるが、これは「員」の異字体と考えられている¹¹²。すなわち「員外」の「史生」とは「職員令」員数外職員＝雑任として増補された書記官を示している。なお史生は、「諸官司の事務量が增大するにつれて増員され」ることが往々あったという（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）。たしかに、延暦九～十年頃の下野国は蝦夷征討準備で業務は増大傾向にあり、令制定員「三名」の史生では間に合わなかったと推定される。

第三に、「陳廷莊」¹¹³であるが、これは人名と考えられている。しかも、音読みで「ちんていしょう」となることから渡来系人物の可能性が高い¹¹⁴。

第四に、これらの字句冒頭に「去上」とあることから、本木簡は「員外史生」「陳廷莊」＝（下野国の）非常勤書記官である陳廷莊に関わる考課（官人の勤務評定）木簡であることが分かる¹¹⁵。なお「員外史生」は、「考課令第十四」「内分番」の規程に基づき、上、中、下の三等に評価された（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁、井上ほか 1994, 291 頁）。つまり、彼の前年度（＝「去」）の評価は「上」だったことを示している。

第五に、考課の対象期間であるが、「前年八月一日～当年七月三十日を一年度と」して年ごとに勤務評価をつけている（井上 1994, 283 頁上段注）。つまり、「陳廷莊」銘木簡の「去」とは「延暦八年八月一日から翌・九年七月三十日まで」の評価だったことが本木簡出土土坑 S K -023 の年代観から明らかとなる〔上述したように、土坑は延暦 10 年（791）7 月以降の埋没と考えられている〕。なお、吉原氏によれば、本来ならば、この左側に今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月三十日まで」の評価が下野国司によって書かれていなければならないところ見当たらないという。今年度評価が書き加えられる前に破損して捨てられたのであろう（吉原 2015, 70 頁）。

第六に、「員外史生陳廷莊」の考課と評定者（下野国司）との関係である。「陳廷莊」銘木簡の「去」時期＝「延暦八年八月一日から翌・九年七月末日まで」は、下野守不在期〔延暦八年五月から九月〕¹¹⁶、安倍朝臣第当〔延暦八年五月～〕¹¹⁷の下野守任期が該当する。また、今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」は、安倍朝臣第当（～延暦九年十二月頃まで）、百済王俊哲（延暦十年正月～）の下野守任期が該当する。

【結】

以上をふまえると、「員外史生陳廷莊」の下野国赴任は、大きく次の 2 ケースが想定できよう。

ケース 1 百済王俊哲以前に陳廷莊が下野に赴任

「諸国史生は、国司四等官とともに中央から派遣され」という原則（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）がある一方、上記したように延暦 8～10 年にかけて下野守は目まぐるしく交替する。しかも、①延暦

八年九月辛亥条で下野守兼任を命じられた「左少弁従五位上安部朝臣弟当」¹⁰⁰と、同年十二月丙申条で高野新笠の山楼造営を命じられた「左少弁従五位上阿部朝臣弟当」¹⁰¹は同一人物と考えられる。また、このことから、この3ヶ月余、安部弟当は在京のままであった可能性が濃い。②加えて安部弟当の前任、佐伯宿禰葛城（征東副将軍・民部少輔・下野守兼任で従五位下・勲八等）も延暦7年12月に蝦夷征討のため出兵、翌・8年5月、出征中に死去している¹⁰²。①と併せて、長らく下野国に下野守が不在であったことがわかる。これらをふまえると、③ (a) 延暦6年以降、佐伯葛城とともに派遣されて以来、延暦10年7月末まで「員外史生」として「陳延莊」が下野に在任し「去年」「今年」の考課がなされた場合、または、(b) 延暦8～9年頃、安部弟当とともに派遣されて以来、延暦10年7月末まで「員外史生」として「陳延莊」が下野に在任し「去年」「今年」の考課がなされた場合を想定することもできよう。なお、この場合、次官である下野介が評定者として関わった可能性が考えられる〔とくに安倍弟当は、短期間しか、下野守として在任していないこと、「考課令」規程を考慮¹⁰³〕。

ケース2 百済王俊哲と共に陳延莊が下野に赴任

「陳延莊」の今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」の考課者は、下野守である百済王俊哲であり（ただし、今年度評価が書き加えられる前に本木簡が破損し捨てられた可能性はある）、二人は延暦10年7月末に併在していたことは間違いない。

なお、①百済王氏一族は、8世紀中葉以来、東国・東北地方経営にたけており、その配下に渡来系（知識・技能）集団が存在したことが知られている¹⁰⁴。②加えて、「陳延莊」自身、渡来系人物と考えられることをふまえると、延暦10年以前から、百済王俊哲が率いる渡来系（知識・技能）集団の一員であったとしても問題はなかろう。③また、この仮定にたてば (a) 「去」時期＝「延暦八年八月一日から翌・九年七月末日まで」、および (b) 今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」の「陳延莊」考課者が百済王俊哲で一環することになる。筆者としては、こちらのケースのほうが妥当性があるよう思っている。

以上、「陳延莊」木簡と延暦8～10年頃の下野国司との関係について基礎的検討を試みてみた。なお、本検討内容と趣を異にするため本文中ではふれなかった百済王教俊¹⁰⁵も、平安時代初頭の下野国を考えていくうえで重要な存在であることを改めて認識することが出来た。今後の検討課題とした。

謝辞 「陳延莊」銘木簡の解釈（考課制度含む）について吉原 啓氏から多々御教示を賜ることができた。また、原 京子氏、内藤 亮氏からは百済王氏関連文獻の御教示を頂いた。さらに、本稿作成の途上、津野 仁、永井智教、佐野良平、坂田敏行、中村岳彦、大竹弘高、齋藤達也の各氏から御助言・御協力を頂いた。末尾ながら記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 当埋蔵文化財センターが長年蓄積してきた調査・研究成果を、県民の皆様にも広く活用して頂くことを目的に、2015年11月1日より常設展示室を開設した。展示は、考古学の調査方法（遺物の新旧が、どのようにして分かるか等）を説明したのち、旧石器～平安時代までの本県の歴史、人々の暮らしなどを出土品などからわかりやすく展示・解説している。このうち、筆者は、「飛鳥・奈良・平安時代」の展示部門を担当している。
- (2) 下野国府第18次調査区は、国府政庁（第6次調査区）の西隣に位置し、昭和57年度（1982年度）に発掘調査が

- 実施された（田熊ほか1984・1987）。
- (3) 「紀年銘木簡と出土遺構との関連より大別した国府内の遺構区分（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）の年代を考えれば、Ⅰ期は八世紀前半代に機能していたことが明らかである。Ⅱ期は政庁が焼失しており、この際の整地土が第十八次調査区（SK-011・023等）を覆っていた。このことからⅡ期の終末は、延暦十年（791）七月以降頃とすることができる」（田熊ほか1987, 162頁）。なお、Ⅲ期はそれ以後＝「延暦十年頃～九世紀代」である（田熊ほか1987, 8頁）。
- (4) 本土坑SK-023からは「陳延任」銘木簡以外にも人名が記された木簡（例、「[雀] 部黒須 [三]」「大伴部□」）や、地名が記された木簡（例、「都賀□」「寒川□」）、税物内容などが記された木簡（例、「□九百斛」「年租穀□」）等が多量に出土している（田熊ほか1987）。
- (5) 延暦九年（790）の下野国記事は、青木ほか1998, 460～483頁を参照のうえ、現代語大意を本文に記した。
- (6) 延暦十年（791）の下野国記事は、青木ほか1998, 488～510頁の原文（漢文）を引用した。なお、これらのほかに、東海・東山二道の諸国に征矢三万四千五百余具を作らせた記事（『続日本紀』延暦十年十月壬子条、青木ほか1998, 511頁）、坂東諸国に輸十二万石を準備させた記事（『続日本紀』延暦十年十一月己未条、青木ほか1998, 511頁）も存在する。
- (7) 善光（亡命百済国王子）を祖とする一族（この「王」姓は音読せず「コキシ」「コニキシ」と朝鮮風に訓じられた）。持統朝以降、百済王氏一族は、朝廷の殊遇をこうわり、高位高官に昇る者が数多い。なお、「百済」姓を称する氏族にして、百済王某々の子孫と唱するものは数多いが、真に王族としての礼遇をうけていたものは「百済王」氏に限られるといつてよい（国史大辞典編集委員会1983, 806頁）。
- (8) 青木ほか1998, 208～209頁を参照。
- (9) 青木ほか1998, 208～209頁を参照。
- (10) 青木ほか1998, 386～387頁を参照。
- (11) 『日本紀略』延暦十四年八月辛未条記事（栃木県史編さん委員会1974, 152頁）を参照
- (12) 田熊1987, 102頁および吉原2015, 70頁の見解による。
- (13) 実際の木簡を見ると、「陳延任」の「延」字を「延」と読むか「延」と読むか意見が分かれることがある。しかし、本稿では報告書積文（田熊1987, 102頁）や吉原 啓氏の御教示にもとづき「延」と読むこととした。
- (14) 「陳延任」は渡来系人物の可能性が囁かれて久しいもの、それを明文化したものは少ない（管見に及ぶかぎりでは、「陳延任」＝渡来人を明文化したのは、栃木県立博物館・（財）栃木県文化振興事業団1998, 56頁くらいであろうか）
- (15) 田熊1987, 102頁、および吉原2015, 70頁の見解による。
- (16) 延暦六年二月庚申条で佐伯宿禰葛城は陸奥介と鎮守副将軍の兼任を命じられる。この直後の同月庚辰条では下野守兼任を命じられている。さらに同年十月癸卯日条で彼は民部少輔をも兼任を命じられた（青木ほか1998, 380～393頁を参照）。その後、延暦七年三月己巳日、佐伯宿禰葛城は多治比浜成・紀真人・入間広成とともに征東朝使に任じられた後（同, 400～401頁）、十二月に紀朝臣古佐美を征夷代将軍として出兵（同, 414～415頁）、翌・八年五月、出征中に死去している（同, 428～429頁）。つまり延暦8年12月出征～5月死去、ならびに後任の安倍第当の着任まで下野国には下野守不在時期があることになる。
- (17) 安部朝臣第当は、延暦八年（789）九月辛亥条に「左少弁・従五位上安部朝臣第当為兼下野守」とあるものの同年十二月丙申条には前日に崩御した高野新笠の山作司（山陵を造る司）を命じられており、この期間に、任地の下野国に赴いている可能性は低い。翌・延暦九年閏三月三十日、すべての官人は喪服を脱いで、大祓をおこなっていることから、安部朝臣第当が下野守として実際に下野国に赴任したのは大祓後の延暦9年（790）4月以降のことと推定される。なお、異動記事はないものの百済王俊哲が下野守となる以前＝延暦9年12月までが安部第当の下野守任期であったと想定される。

- (18) 青木ほか 1998, 442～443頁を参照。
- (19) 青木ほか 1998, 450～451頁を参照。
- (20) 青木ほか 1998, 428～429頁を参照。
- (21) 「考課令」は「凡内外文武官初位以上、毎年当司长官、考其属官(略)無長官次官考」と評定者を定めている(井上ほか1994, 283頁)。余談であるが、この頃に赴任していた下野介・掾・目の記録は現存史料には無い。
- (22) 今井 1965, 大塚 1984, 利光・上野 1987, 榊原 1995, 小宮山 2010, 山下 2011 を参照のうえ記述した。
- (23) 延暦 18 年 (799) 9 月辛亥条、「從五位下百済王教俊為下野介」(『日本後紀』) など幾つかの記事を見て取れる。これらについては、別稿での検討を考えている。

引用・参考文献

- 青木和夫ほか校注 1998『新日本古典文学大系 16 続日本紀』第五巻、岩波書店
- 井上光貞ほか校注 1994『日本思想大系新装版 律令』岩波書店
- 今井啓一 1965「一 百済王教福とその周縁」「二 百済王氏と蝦夷経営」『百済王教福』綜芸舎
- 大塚徳郎 1984「第一章 古代みちのくに来た都人 (一)」『みちのくの古代史—都人と現地人—』刀水書房
- 国史大辞典編集委員会編 1984『国史大辞典』第4巻(き〜く)、吉川弘文館
- 国史大辞典編集委員会編 1985『国史大辞典』第6巻(こま〜しと)、吉川弘文館
- 小宮山嘉 2010「長岡・平安遷都と百済王氏」『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』鐘江宏之・鶴間和幸編、東方書店
- 榊原聖子 1995「倭化人の研究—特に百済王氏を中心として—」『皇學館論叢』第28巻第3号、皇學館大学人文学会
- 坂本太郎・平野邦雄監修 1990『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館
- 三松みよ子 2002「百済王氏没落についての考察」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会編、真福社
- 田熊清彦ほか 1983『下野国府跡Ⅴ 昭和57年度発掘調査概報』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 田熊清彦ほか 1987『下野国府跡Ⅵ 木簡・漆紙文書調査報告』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 利光三津夫・上野利三 1987「律令制下の百済王氏」『法史学の諸問題』利光三津夫編、慶應通信(のち上野利三2002『前近代日本の法と政治—第馬台国及び律令制の研究—』北樹出版に再録)
- 栃木県立博物館・(財)栃木県文化振興事業団 1998『発掘された日本列島 地域展示 栃木をひらく / 開堂と埋蔵文化財』
- 山下剛司 2011「百済王氏の東北補任」『鷹陵史学』第37号、鷹陵史学会(佛教大学)
- 吉原 敬 2015「第二章 那須における律令制度の展開 III 古代官人の世界をのぞく」『第23回特別展 那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—』大田原市なす風土記の丘資料館湯津上資料館・栃木県那珂川町なす風土記の丘資料館

三
七
四
一
四
〇

□^去上

貞外史生陳廷莊

。上端は割損し、下端は腐蝕している。「去上」とあるから旧
年の評価が記されたものか。考課に関わる木簡か。

二五箱 下層 板目

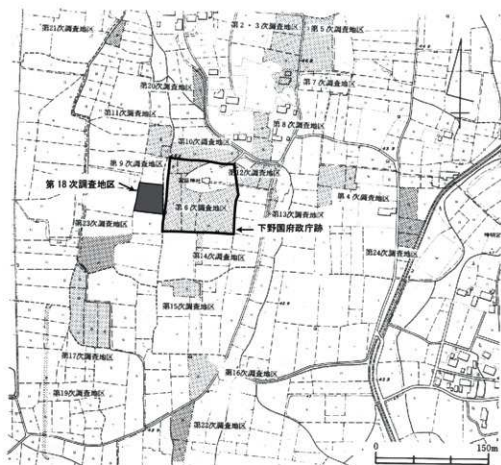


(裏)



(表)

第1図 下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡 (田熊ほか1987を改変)

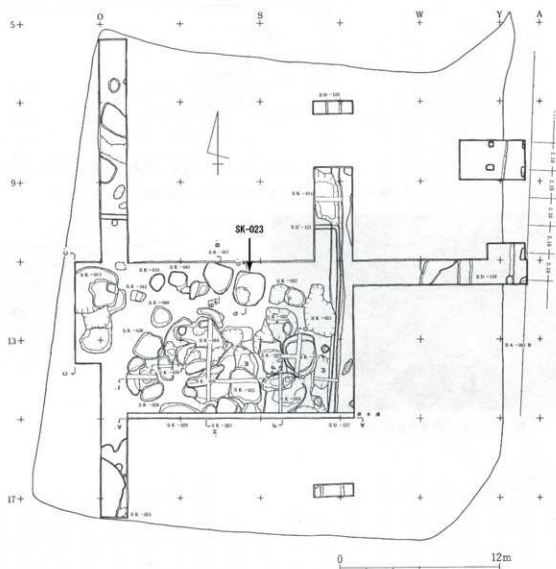


下野国府跡 第2～24次調査区位置図

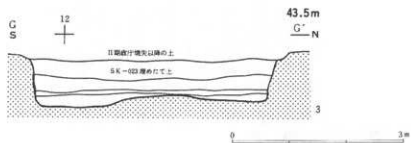


第18次調査区全景（上方の森が政庁）

第2図 下野国府跡第18次調査区位置（田熊ほか1983・1987を改変）



第18次調査区平面実測図



土坑 SK-023 土層断面図

第3図 土坑 SK-023 (田熊ほか1987を改変)

第1表 8世紀後半～9世紀前半の下野国司

	下野国司赴任記事	史料	異動	在任期間	下野国内外の事項
752年	小野朝臣小麿を下野守とする	『統紀』天平勝宝四年十一月乙巳条	明確な異動記事なし	4年か	761年 下野薬師寺が僧侶の受戒道場に定められる 770年 道鏡が下野薬師寺に配流される(772年死去) 780年 伊治公麻呂の乱。多賀城が焼かれる 786年 東海・東山街道の軍団兵士・武器を輸送する 790年 東国諸国に革の甲二千を遣らせる 792年 健甕の制を設ける 797年 坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命する 805年 蝦夷征討の中止 814年 橘清上人碑文が空海の筆により完成
761年	石川朝臣名足を下野守とする	『統紀』天平宝字五年正月壬寅条	763年、伊勢守へ転任	2年	
767年	佐伯宿禰三野を下野守に、縣大糞大宿禰内麻呂を介とする	『統紀』神護景雲元年三月己巳条	明確な異動記事なし	4年か	
769年	少納言富麻王を兼下野介とする	『統紀』神護景雲三年六月乙巳条	770年、尾張守へ転任	1年余	
771年	中衛中侍佐伯宿禰伊多智を兼下野守とする	『統紀』宝龜二年閏三月戊子条	明確な異動記事なし	3年か	
774年	大中臣朝臣宿奈麻呂を下野守介とする	『統紀』宝龜五年三月甲辰条	777年、阿波守へ転任	3年弱	
774年	下毛野朝臣根麻呂を下野介とする	『統紀』宝龜五年四月壬辰条	明確な異動記事なし	4年か	
778年	大伴宿禰人足を下野守とする	『統紀』宝龜九年二月辛巳条	明確な異動記事なし	1年余か	
779年	衛門佐(のち中衛少将)大中臣朝臣諸魚を兼下野守とする。久米連真上を介とする	『統紀』宝龜十年九月癸酉条	大中臣諸魚の明確な異動記事なし。久米真上は781年大和介へ転任	2年程	
781年	石川朝臣美奈岐麻呂を下野介とする	『統紀』天応元年四月丙申条	782年、安房守へ転任	1年余	
782年	文室真人高嶋を下野守とする	『統紀』延暦元年閏正月庚子条	明確な異動記事なし	3年か	
同年	伊勢朝臣水浦を下野介とする	『統紀』延暦元年八月乙亥条	785年 内匠頭へ転任	3年弱	
785年	和朝臣国守を下野介とする	『統紀』延暦四年正月辛亥条	787年、参内守へ転任	2年余	
787年	佐伯宿禰長城を除典介兼鎮守副将軍兼下野守とする	『統紀』延暦六年二月庚辰条	789年 出征中に死去	2年余	
789年	左少弁安倍朝臣弟当を兼下野守とする	『統紀』延暦八年九月辛亥条	明確な異動記事なし	1年余か	
791年	百濟王敏智を下野守にする(のち兼陸奥鎮守将軍)	『統紀』延暦十年正月己卯条	795年 死去(在任中か)	4年余	
796年	巨勢野足を下野守とする	『後紀』延暦十五年十月甲申条	明確な異動記事なし	3年弱か	
799年	近衛少将大伴宿禰是成を兼下野守に、百濟王敏俊を介とする	『後紀』延暦十八年九月辛亥条	明確な異動記事なし	4年余か	
804年	中衛少将巨勢朝臣野足を再び兼下野守に、大中臣朝臣常麻呂を介とする	『後紀』延暦廿三年正月乙未条	明確な異動記事なし	2年か	
806年	藤原友人が下野守に左遷される(伊予親王謀反に連座)	『紀略』大同二年十一月丙申条ならび『類聚国史』	明確な異動記事なし	2年か	
808年	式部大輔賀爾朝臣豊年を兼下野守とする	『後紀』大同三年五月乙未条	810年 播磨守に転任	1年余	
同年	安部朝臣清継を下野介とする	『後紀』大同三年十一月甲辰条	明確な異動記事なし	4年か	
809年	百濟王敏俊を下野守にする	『後紀』大同四年正月癸巳条	明確な異動記事なし	4年か	
810年	右近衛少将朝臣百継を兼下野守とする	『後紀』弘仁元年九月丁未条	明確な異動記事なし	1年余か	
812年	藤原朝臣道継を下野守に、安部朝臣豊橋を介とする	『後紀』弘仁三年正月辛未条	明確な異動記事なし	2年か	
814年	左少将朝野鹿取を兼下野守とする	『公卿補任』弘仁五年十一月	明確な異動記事なし	1年か	
815年	右兵衛督春原五百枝を兼下野守とする	『後紀』弘仁六年正月丙戌条	明確な異動記事なし	不明	
823年	藤原常嗣を下野守とするが赴任せず	『続後紀』承和七年四月戊辰条幸伝(弘仁十四年記事)	春宮亮に留任	赴任なし	
825年	参議橘常主を兼下野守とする	『公卿補任』天長二年十月廿七日条	826年 死去	1年弱	

中世初期における経塚出土短刀の分類と変遷

— 関東地方とその周辺の資料を対象にして —

大 竹 弘 高

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1 はじめに | 4 12～13世紀前半における出土短刀の変遷 |
| 2 研究略史 | 5 小結 |
| 3 出土短刀の細別と分類 | 6 今後の課題と展望 |

これまであまり研究されてこなかった中世の短刀に関して、関東地方および周辺諸県で見つかっている経塚の資料を主に扱い、分類と編年を行うものである。まず、分類に関しては、長さ、鋒の形状、反りの有無で大分類し、区の形状、棟の形状によって小分類を行った。そして、それぞれの系譜を組立て、各遺跡の年代観を元にそれぞれの分類の年代幅を考察した。その結果、12世紀前半から13世紀初頭の時期の中で、12世紀後半に撫区から角区のものへ、また刀身に反りの加わるものが出現すること、12世紀末から13世紀初頭にかけて平棟から庵棟、丸棟のものへと変化することが想定できた。最後に関東地方および周辺諸県以外の経塚出土資料の検討による地域差の問題、設定した分類の祖型と後続形態の問題などを挙げ、今後の課題とした。

1 はじめに

中世の武器、特に刀剣は主に伝世品を資料とした美術工芸史の分野や、有職故実の分野で研究が進められてきた。その分野の中で、太刀に関しては平安時代の作例が知られるが、短刀¹⁾に関しては主に鎌倉時代以降の作例が主体であり、平安時代の短刀に関しては判然としない部分がある。一方、考古資料では、経塚で太刀、短刀、刀子、鉄鏃といった利器類を多く供出することが知られ、利器類の研究においては有効な資料と考えられる。また、経筒や外容器には紀年銘が入る場合があり、その他にも外容器に用いられる陶器などの出土遺物などから、年代の検討には適した資料と考えられる。そこで、本稿では関東地方と周辺諸県の経塚で出土した短刀を集成し、美術工芸の分野では検討の難しい平安時代から鎌倉時代の短刀について、資料の分類と変遷を考察していくものである。

2 研究略史

経塚に関する記録は古くは江戸時代に確認されており、明治時代も各地で偶然発見された経塚の調査報告が多く発表されている。昭和以降では発掘件数の増加によって調査報告例も増え、遺構や遺物の研究も進展していった²⁾。ここでは、各遺物の研究が進展する中で、経塚で出土した武器類に関してはどのような研究が進められてきたのか、その研究略史をまとめて課題を明確にしていきたい。

まず、明治時代以降では石田茂作氏は『経塚』の中で、経塚出土の武器類について、刀子³⁾・太刀・鉾・鏃・その他と分類して、若干の考察を行っている。刀子に関して、1 刀身は直刀式で反りがなく、2 刀身の幅は比較的広い、3 刀身の鋒が後世のに比して鋭い、4 刀身の断面を見るに刀背が厚い、5 刀身の長さは茎の長さの三倍半から四倍のものが多い、6 茎の断面は三角形に近い、と形状の特徴に関して述べている。また、武器類を理納する意味についても述べており、『華厳縁起』で元曉法師が金剛三昧経を持ち帰

る時に、船首に大刀身を飾って海上を渡したとの記述があることを例に挙げた。そして、『華嚴縁起』が鎌倉時代の作とされるため、この時代には経を鬼魔の難から除かれるために刀身を用いる信仰があったと想像されるとしており、経塚で出土する利器は魔除けのためと考えるのが自然であろうと指摘している。

また、末永雅雄氏は花背経塚（京都府）、大屋経塚（福島県）等で出土した腰刀の類例を挙げ、その外装の特徴から「黒漆刻鞘腰刀」と称している。その特徴としては、鞘口に半月状の袢り込みを設け、柄の端部がそれに嵌入して鏝の要をなす、いわゆる呑口式の外装であり、太刀、刀の外装とは異なると述べている。また、小柄、筭の差し込む副室がないことと、栗形、返角の装置も認められないことを指摘している。そして、花背経塚出土の短刀の復元を行っており、鞘の刻みが帯に指した時の脱落防止の役割を果たしている可能性も指摘している。このような質素な外装の腰刀は実用のためのものであり、経塚という宗教的性格の強い遺構で出土した遺物であるが、実用武器としての検証も必要であると指摘している¹⁶⁾。

井口善晴氏は奈良国立博物館に所蔵されている出土地不明の経筒と折り曲げられた太刀の年代的位置付けを行うため、同じような折り曲げられた太刀の出土した経塚の資料を集成し、このような類例は瀬戸内地域の資料に多い点を考察している¹⁷⁾。

この他にも各報告書において、埋納状況や武器を埋納する意味について若干の考察が加えられているものもある¹⁸⁾が、経塚で出土する武器類に関する研究は少なく、短刀そのものの研究も、石田茂作氏、末永雅雄氏の論考が挙げられるのみである。これは小型の鉄製品であるため、朽ち果てて全形を捉えられない場合が多いこと、経容器として用いられる陶器類に比べ形態的特徴が捉えづらいことなどが挙げられる。

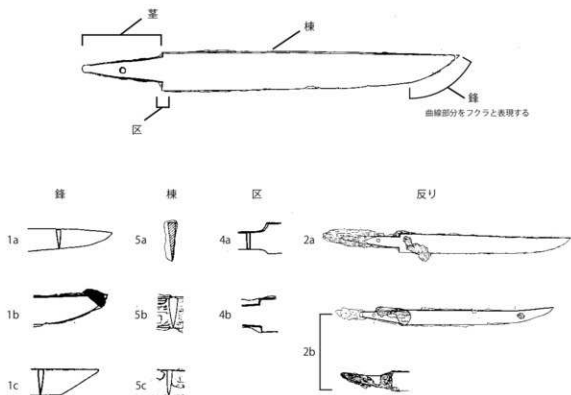
3 出土短刀の細別と分類

表3、4で示すように、関東地方および周辺の福島県、新潟県、静岡県、長野県、山梨県においては断片や細片を含めると78遺跡で太刀、短刀、刀剣の一部が確認されている。本稿ではこの中でも、表3で示した松野千光寺経塚（福島県）、上ノ原経塚（福島県）、米山寺経塚（福島県）、永福寺跡内経塚（神奈川県）¹⁹⁾、堂ヶ谷経塚（静岡県）、横峯経塚（新潟県）、小栗山不動院裏山経塚（新潟県）を対象とする。これらの遺跡は、調査主体、出土状況が明らかな一次資料であることと短刀の残存状態が良好で、全形が推定できるものであることを基準として選定した。

まず、以上の資料を基に、短刀の各部位の特徴から分類を行っていきたい。短刀を分類する上での形態的特徴として、長さ、反りの有無と位置、鋒の形状、区の形状、棟の形状が挙げられる。これらを挙げた根拠は、短刀の用途を考慮すると鋒の形状や反りの有無は、切るもしくは突くといった用途に関連すると考えられ、区の形状は短刀の外装に関連する項目と考えられるからである。なお、今回対象とした資料は、全て平造りで目釘穴は1つであったため、刀身の断面形状や目釘の有無や数は細別の対象に加えなかった。

以下によってそれぞれの項目の細別を行う（図1）。

1. 鋒の形状
 - a フクラが枯れるもの
 - b フクラのつくもの
 - c カマス鋒のように角張るもの
2. 反りの位置
 - a 反りのないもの
 - b 反りがつくもの



第1図 短刀の部位の名称および分類項目

3. 短刀の長さ

- a 長寸のもの（全長25cm以上）
- b 短寸のもの（全長25cm以下）

4. 区の形状

- a 楯区のもの
- b 角区のもの

5. 棟の形状

- a 平棟のもの
- b 庵棟のもの
- c 丸棟のもの

上記の細別項目の中でも、(1) 鋒の形状、(2) 反りの有無、(3) 短刀の長さは武器としての機能に直接関係するものと考えられるため、この2項目で大分類を構成する。

- A類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- B類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。
- C類** 反りがなく(2a)、長寸(3a)で、フクラがカマス鋒のように角張るもの(1c)がこの一類に分類される。
- D類** 反りがなく(2a)、短寸(3b)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- E類** 反りがなく(2a)、短寸(3b)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。
- F類** 反りがつき(2b)、長寸(3a)で、フクラが枯れるもの(1a)がこの一類に分類される。
- G類** 反りがつき(2b)、長寸(3a)で、フクラがつくもの(1b)がこの一類に分類される。

さらに5つの分類の中でも、(4)区の形状、(5)棟の形状によってさらに細分できると考えられるため、以下のように小分類の項目が設定できる。

- a 樞区(4a)、平棟(5a)のもの
- b 角区(4b)、平棟(5a)のもの
- c 角区(4a)、庵棟(5b)のもの
- d 棟側が樞区(4a)で刃側が角区(4b)になり、丸棟(5c)のもの

A類(図2、表1)

A類では樞区で平棟のもの(Aa)、角区で平棟のもの(Ab)の2類が確認できる。

B類(図2、表1)

B類では樞区、平棟のもの(Ba)、角区、平棟のもの(Bb)(4)区の形状(8)、の2類が確認できる。

C類(図2、表1)

C類では樞区、平棟のもの(Ca)、角区、平棟のもの(Cb)の2類が確認できる。

D類(図3、表1)

D類では角区、平棟のもの(Db)(8)、棟側が樞区で刃側が角区になり、丸棟のもの(Dd)の4類が確認できる。

E類(図3、表1)

E類では樞区、平棟のもの(Ea)、角区、平棟のもの(Eb)(8)、角区、庵棟のもの(Ec)の3類が確認できる。

F類(図3、表1)

F類では角区、平棟のもの(Fb)(8)の1類が確認できる。

G類(図3、表1)

G類では樞区、平棟のもの(Ga)の1類が確認できる。

4 12～13世紀前半における出土短刀の変遷

4-1 出土短刀の系譜的位置付け

では、次に各分類がどのように系譜的に位置づけられるのか考えていきたい。A～G類は各分類の中でそれぞれ系列が並れるものと考えられる。

A類 フクラが枯れることによって根元から鋒に向かって窄まって行くような形態のもので、太刀にも類例のあるカマス鋒やフクラのつく鋒の影響の中で成立した形態と想定できる。この分類の中でもAaとAbは区の形状がそれぞれ樞区と角区である点で異なるが、それ以外は同じ形状であることから直接的な系譜が辿れるものと考えられる。Aaのような区の形状は、鎌倉時代以降の短刀では一般的ではないことから、AaよりAbが組列としては後に想定したい。

B類 BaとBbは、AaとAbと同じように区の形状が樞区から角区へと変化したものと考えられるため、直接的な系譜が辿れるものと考えられる。この樞区から角区への変化はAaとAbの組列の変化と同じであるため、BaとBbの組列はAaとAbと並行関係にあるものと想定したい。

C類 Ca類は鋒の形状が他の短刀とは異なるため、A類、B類との関係性は薄いものと考えられる。この鋒の形状は奈良時代の切刃造りの大刀や、平安時代のカマス鋒の太刀⁽⁹⁾などと似るため、それらの影響も想定できる。CbはCaよりやや鋒が丸みを帯び、角区になる点で異なる。Ca類と系譜の繋がるものと考えられ、Bbの影響を受けて成立したものと考えられる。

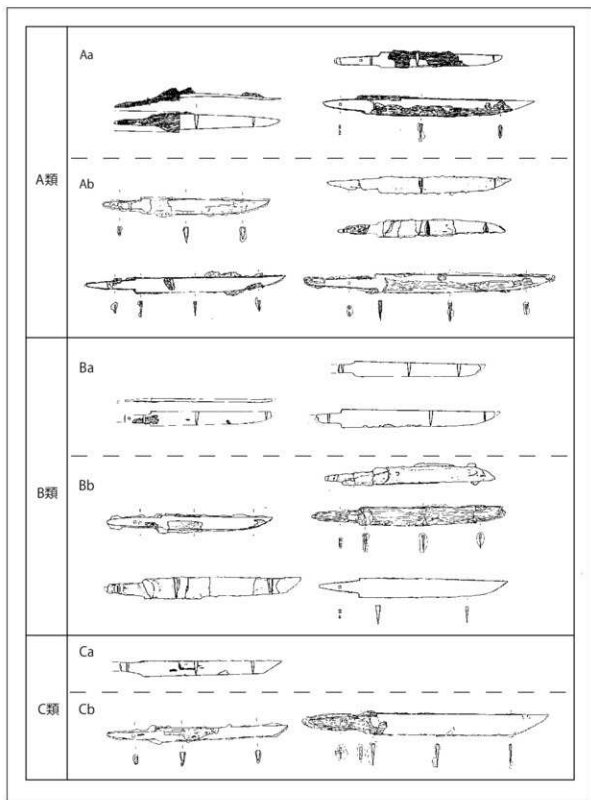


図2 短刀の分類(1)

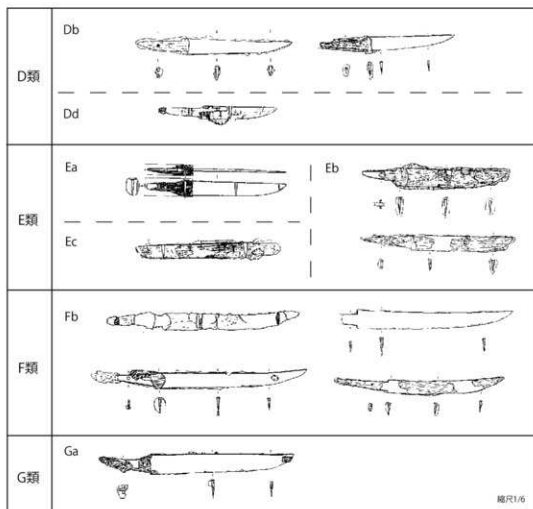


図3 短刀の分類(2)

表1 短刀の分類

	A		B		C		D		E			F	G
	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	Cb	Db	Dd	Ea	Eb	Ec	Fb	Ga
鋒	1 a	○	○				○	○				○	
1 b			○	○					○	○	○		○
1 c					○	○							
反り	2 a	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
2 b												○	○
長さ	3 a	○	○	○	○	○						○	○
3 b							○	○	○	○	○		
面	4 a	○		○		○		○	○				○
4 b		○		○		○	○	○		○	○	○	○
棟	5 a	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○
5 b											○		
5 c								○					

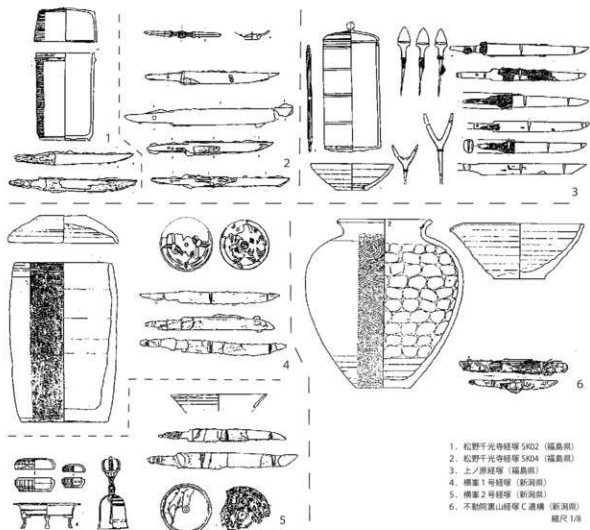


図4 各経塚の供出遺物(1)

D類 D類はA類を小型にした形状であるため、A類と関係の深いものと考えられる。この中でもD bはA bを小型化した形状であるため、A bの形態から派生したものと考えられる。D dはD bの平棟の形状が庵棟に変化したものと考えられることから、D bから系譜が辿れるものと考えられる。

E類 E類はB類を小型にした形状であるため、B類と関係の深い形態と考えられる。E aはB aを小型にした形状であるため関係性の深い形態と考えられる。次にE bはB bを小型化した形状であるため、B bと関係のあるものと考えられるが、E aの区の形状が変化したものと想定できるため、組別としてはE aから派生したものであろう。またこの変化はB aとB bと同じであるため、E aとE bもB aとB bと並行関係にあるものと考えられる。最後にE cに関しては、E bの平棟の形状から庵棟の形状に変化したものと考えられるため、直接的な系譜が辿れるものと考えられる。

F類 F bはA bに反りが加わった形状を呈しているため、A bから派生した形態と想定できる。

G類 GはB aの基に反りが加わった形状を呈しているため、B aから派生した形態と想定できる。

4-2 出土短刀の年代的位置付け

A aは上ノ原経塚(福島県)、堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図4-3、図5-2)。

上ノ原経塚では遺構内で赤焼土器が1点、白磁が1点、鉄罐、銅製の経容器1点との中から紙本経が出土している。ロクロ成形後に調整を施さず、底部は糸切り痕を残す赤焼き土器とされる。発掘調査報告書によると県内各遺跡で出土した土器の法量比較によって、口径に比べ器高が高くなることと、12・13世紀代の土器と比較して薄いという点から12世紀前半と位置づけている。その他にも発掘調査報告書では経容器内に埋納されていた紙本経の天地幅の特徴やベータ線計測法による放射性炭素年代測定から12世紀前半と位置づけている¹⁰⁰⁾。

一方、堂ヶ谷1号経塚では、掘られた土坑に伴う溝で山茶碗の小碗が出土している。これらは口縁部のやや外反する形状と高台の高さが前型式のものよりやや低い点から、松井一明氏の編年によるところの山茶碗Ⅰ-2期に位置づけられ、12世紀中葉とされる。また1号経塚では他にも山茶碗の小碗、東遠江産の甕、白磁碗・皿、和鏡、鉄罐などが出土した。これらの遺物は12世紀中頃～12世紀後半に位置づけられる。このように堂ヶ谷1号経塚はやや年代幅のある遺物が出土しているが、経塚造営の年代は下限の12世紀後半とされている¹⁰¹⁾。

このことからA aは上限を12世紀前半、下限を12世紀後半としておきたい。

A bは松野千光寺経塚SKO2、SKO4（福島県）、横峯1号、2号経塚（新潟県）、堂ヶ谷1号、2号経塚（静岡県）で確認できる（図4-1・2・4・5、図5-2・3）。

松野千光寺経塚SKO2では、土師質土器の底部と銅製経筒が出土し、SKO4では白磁片と独結片が出土した。

これらの遺物から年代を考えるのは難しいが、SKO2の銅製経筒は他の類例との比較によって、関東地方の類例で多く見られるものであるから平安時代後期に位置付けられるとされる。またSKO4で出土した独結片は鬼目や連弁の表現や銜部の長さから同じように平安時代後期に位置付けられる。また、昭和初期の調査で同じ遺跡内で「大治五年」銘の石櫃が出土しており、この遺物に近い年代とすれば、これらの遺物の年代を12世紀中頃から後半に位置付けられる¹⁰²⁾。

横峯1号経塚では和鏡2面と珠洲焼の経容器である身と蓋が出土した。和鏡には墨書が施されており、「仁口安カロ口」と読めるとされる¹⁰³⁾。また吉岡康暢氏分類・編年によると、身に関しては素縁（B類）で、筒型（Ⅱ類）に分類でき、経筒類もⅠ期を中心に定数製作されているとしている¹⁰⁴⁾。以上の点から、和鏡裏面の墨書を「仁安」と積極的に解釈するならば、12世紀第3四半期に想定されるが、経容器の年代が12世紀後半にあたることとされるため、やや年代幅をもたせて、12世紀後半としておきたい。

横峯2号経塚では年代を推定するのが難しいが、遺物としては、白磁皿片1点、青白磁合子2点、和鏡2面、火舎1点、五鈴鈿が1点出土しており、これらの遺物の特徴とから平安時代後期のものと考えられ、この2号経塚の周溝が1号経塚の周溝の後に構築されていることから12世紀末～13世紀初頭という年代が与えられている¹⁰⁵⁾。

堂ヶ谷2号経塚では床面付近で青白磁皿が出土しており、その他に山茶碗、白磁碗、青磁碗が出土した。先述の1号経塚と同様に、貿易陶磁に関しては横田・森田氏の編年案に、山茶碗に関しては松井氏の編年案に従う。さらに1号経塚に近い年代の経塚と考えられることから12世紀後半にという年代が与えられている¹⁰⁶⁾。

このことからA bは上限を12世紀前半、下限を12世紀後半としておきたい。

B aは上ノ原経塚（福島県）で確認できる（図4-3）。そのため、先述の年代観の通り12世紀前半頃に位置づけられる。

B bは松野千光寺経塚（福島県）、上ノ原経塚（福島県）、横峯1号、2号経塚（新潟県）、永福寺跡内経塚（神

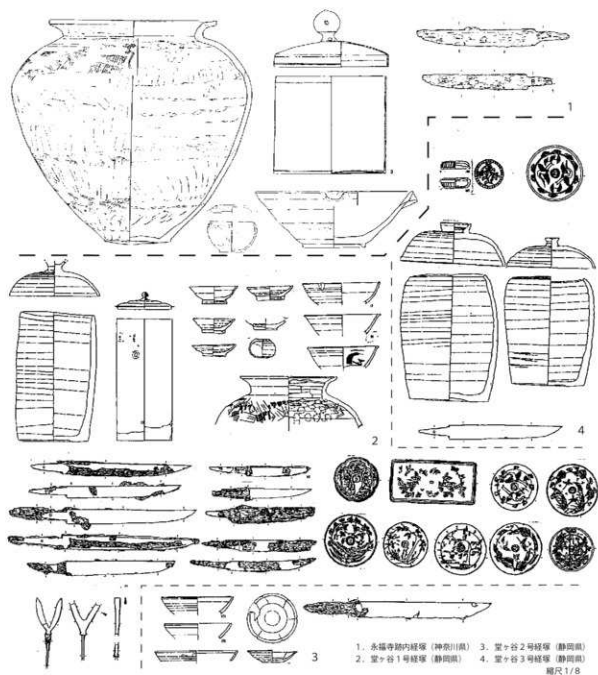


図5 各経塚の供出遺物(2)

表2 短刀の年代

	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	Cb	Db	Dd	Ea	Eb	Ec	Fb	Ga
12世紀前半	○	○	○		△				○				
12世紀後半		◎	△	◎		△	○			○		△	○
13世紀前半								△			△		

奈川県)、堂ヶ谷1～3号経塚(静岡県)で確認できる(図4-1～5、図5-1～4)。

堂ヶ谷3号経塚は陶製経容器2個体、青白磁合子1点、和鏡1点が出土した。久保氏による和鏡の年代観、及び1、2号経塚に近い時期の遺構と考えられることから12世紀後半に位置付けられる⁽¹⁷⁾。

永福寺跡内経塚では瀧美窯産の甕と片口鉢、白磁の小壺、が出土した。瀧美窯産の甕と片口鉢は器形や調整の特徴から、中野晴久氏の編年によって、甕は3型式に、片口鉢は2型式ないし3型式にそれぞれ位置付けられる註18。このことから12世紀第4四半期(1190～)に位置付けられる。

先述の年代観に従えば、やや年代幅があるが、上限を12世紀前半、下限を12世紀末としておきたい。

C aは上ノ原経塚(福島県)で確認できる(図4-3)。先述の年代観の通り12世紀前半の頃に位置付けられる。

C bは松野千光寺経塚SKO4(福島県)、堂ヶ谷2号経塚(静岡県)で確認できる(図4-2、図5-3)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

D bは堂ヶ谷1号、2号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2・3)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

D dは小栗山不動院裏山C遺構(新潟県)で確認できる(図4-6)。小栗山不動院裏山経塚では経容器に珠洲焼の壺と片口鉢が使用されており、壺は体部の肩が強く張り、頸部は弧状に鋭く外反し、口縁は方頭の形態である。この特徴から吉岡氏の分類と編年によるところのT種b3類で、II2期に位置づけられるであろう。片口鉢に関しては、底部からわずかに膨らみを持って外反し、底部から口縁へ徐々に薄くなる特徴からに相当し、同じくII2期に位置づけられる。吉岡氏による歴年代資料の検討から、II2期は13世紀第2四半期に位置づけていることから、D dの下限をこの年代に位置づけたい⁽¹⁸⁾。

E aは上ノ原経塚(福島県)で確認できる(図4-3)。先述の年代観の通り12世紀前半の頃に位置付けられる。

E bは堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

E cは小栗山不動院裏山C遺構(新潟県)で確認できる(図4-6)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

F bは横峯2号経塚(新潟県)、堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図4-5、図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

G bは堂ヶ谷1号経塚(静岡県)で確認できる(図5-2)。先述の年代観の通り12世紀後半の頃に位置付けられる。

4-3 各分類の変遷とその意義

(1) 各分類の変遷

では、上記の年代観に沿って、各分類がどのくらいの年代幅が想定できるのか考えていきたい(図6)。

まず、A類に関してはA aが12世紀前半から後半にかけて確認されているため、12世紀代を通して存続した形態であると考えられる。A bはA aの次に系譜として想定しているが、12世紀後半以降の資料が主体であるため、短い時期差の中で成立した形態と考えられる。

次に、B類に関してはB aがA aと同じように12世紀前半から後半にかけて確認されているため、12世紀代を通して存続した形態であると考えられる。B bはB aの次に系譜として想定しているが、12世紀後半以降の資料が主体であるため、A bと同じように短い時期差の中で成立した形態と考えられる。

C類に関しては、C aが12世紀前半に位置づけられ、C bが12世紀後半に位置づけられる。そのため、

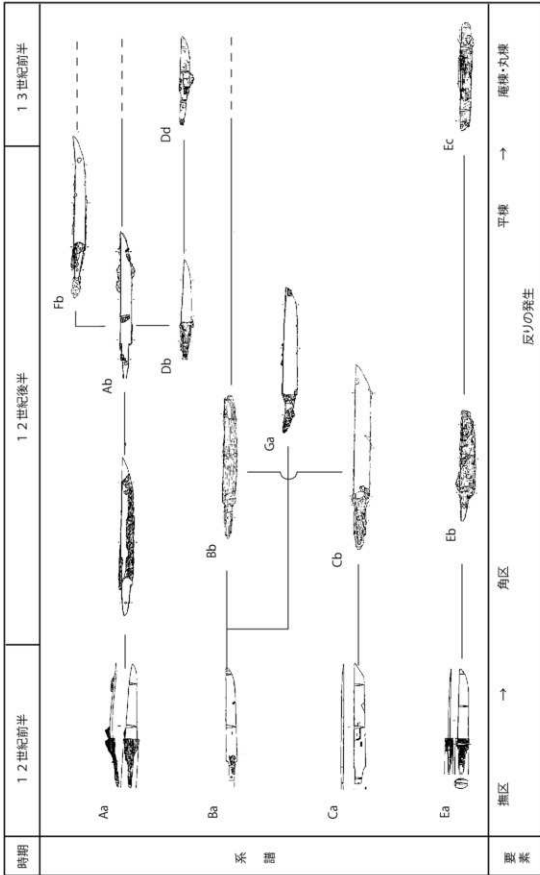
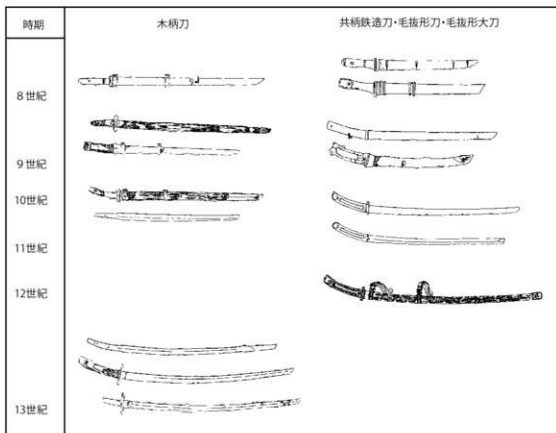


図 6 短刀の変遷



◎津野仁「大刀・太刀の編年」(2011)の図48, 55を一部改変

図7 木柄刀と方頭共鉄柄刀・毛抜形刀・毛抜形太刀の編年

12世紀代を通じてカマス鋒の形態が存在すると考えられるが、C aとC bでは鋒の形状が丸みを帯びていっているのでA類ないしB類に影響を受けていっている可能性も想定できる。

D類に関しては、D bが12世紀後半の資料が主体であるため、並行関係にあると想定されるA bと同じように12世紀後半に成立した形態と想定される。D dは12世紀末～13世紀初頭である。D bから系譜の連なるものと考えられるため、12世紀末に成立した形態と想定できる。

E類に関しては、E aが12世紀前半の資料が主体で、系譜的に連なるE bは12世紀後半の資料が主体である。A bやB bとは異なり、より段階で撫区の形態のものは衰退する可能性がある。E cは12世紀末～13世紀初頭で、B bから系譜の連なるものと考えられることから、A fと同じように12世紀末頃に成立した形態と考えられる。

最後にF類とG類に関しては、F b、G a共に12世紀後半に位置づけられる。A b、B aに反りが加わった形態であるため、それらよりも12世紀後半の中でもやや遅れて発生する形態である可能性が想定できる。これらの変遷の特徴は、12世紀後半に撫区から角区へと変化していること、同時期に反りの加わるもの発生していくことと、12世紀末に麻棟・丸棟が発生していくことが挙げられる。

(2) 太刀の編年との比較

この短刀の変化はどのように位置付けられるのか、研究の進んだ太刀の編年との比較から若干の考察を行ってみたい。まず、太刀の編年研究の現状について簡単にまとめていく。

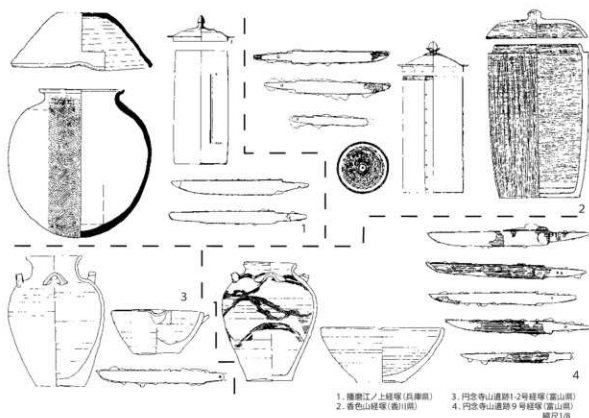


図8 北陸・山陽・四国地方の出土例

石井昌國氏は日本刀の成立について蕨手刀にその源流があると考え、出土した各刀種の観察と刀装具、刀剣の鑄や反りの変化から蕨手刀→毛抜形刀→毛抜形太刀→古代刀という系譜を考えている。その後、蕨手刀→毛抜形刀→毛抜形太刀という系譜と蕨手刀→長柄刀→古太刀という系譜があると考察した。石井氏がこの形式変化の中で重視しているのが反りのつく箇所と反りの変化である。

一方、津野仁氏は、石井氏の古代刀は蕨手刀から派生するという考えは各刀種の形式変化が追えるようになってきていることから、そぐわなくなってきたとし、古代から中世の唐様大刀、方頭共鉄柄刀、毛抜形太刀、木柄刀といった各刀種の形状、刀装具の変遷から日本刀の成立について考察している。その中で太刀の反りの発生に関して木柄刀の変遷から、東北南部以南において10世紀代に柄反りが出現し、後半に発達することと、11世紀に腰反りのものが出現すると述べている(20)。さらに刀身の鑄は8～10世紀に少数確認され、日本刀の基本的な形状である鑄造りと庵棟のものは12世紀中葉に確認できると述べている。津野氏の考察も刀身の形状の変化は柄反り、腰反りといった反りの位置が重視されている。

そして、本稿で取り扱った短刀の変遷と比較を行ってみると、反りの発生に関しては12世紀後半に、庵棟の発生に関しては13世紀前半にそれぞれ確認でき、太刀の反りの発生から1～2世紀ほど後出し、庵棟の採用に関しても半世紀ほど後出である点が注目できる(図6・7)。ただし、反りのつくものが確認できるものの、それは少数であり、無反りの形態が多量を占めていることから、無反りの形態が一般的であったことも窺える。一方で、太刀には採用された鑄造りに関しては、太刀の方では8世紀以降少数確認されているが、短刀に関しては12世紀段階でも平造りのものが一般的であったことが窺える。

また、津野氏は『古事記』、『日本書紀』に記載される太刀、刀の使用に関する表現をまとめ、その機能に

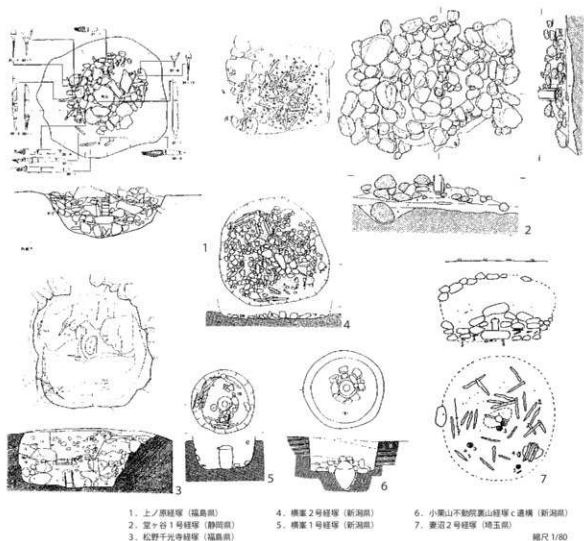


図9 各経塚での短刀の出土状況

ついて考察している。その機能表現の傾向をまとめると、7世紀後半から8世紀前葉の剣・刀は斬る・打つ・刺すから、奈良時代から平安時代前半には太刀に打つと斬るという表現が見られ、平安時代後半にはこれらに加え、打ち斬るという表現が散見されるようになるとしている。このような表現から操刀法の向上によるもので、太刀の柄反り、彎刀化が進んだといえるとしている。一方で、刀子・小刀に関しては刺す機能が主体であり、刀は9世紀後半には刺すといった機能がなくなっていくことから、刀子・小刀の機能を継ぐものとも述べている⁽²¹⁾。このように小刀・刀子・刀に刺すという機能が重視されていたならば、A、B類のような反りのつかない形態や、平造りで薄い形態というのは刺す機能を求められた姿といえる可能性がある。一方で、12世紀後半にはFbやGaにみられるような反りがつくものが現れる。この変化は使用方法が「突く・刺す」以外の「斬る」といった操刀法も太刀と同じように想定できる。現時点ではその機能を明らかにすることはできないが、短刀の様々な形態は太刀とは違う機能が求められていた可能性も想定できる⁽²²⁾。

5 小結

以上のように、経塚出土短刀が12世紀代から13世紀前半を通じて、どのように変遷していくかを検討し

てきた。その結果、12世紀～13世紀初頭を通して、短刀は呑口式の外装で刀身が平造りである点は変化しないが、カマズ鋒のものは12世紀後半で見られなくなり、反りのつくものが見られ始めることが挙げられる。また、撫区から角区へと移行していく様相も想定できる。

そして12世紀末には平棟から庵棟、丸棟のものが発生する点が挙げられる。

このような形状の変化の中でも、反りの発生や鋒の形状の変化は、使用方法（戦闘など）の変化に対応したものであると考えられる。経塚に埋納された短刀が、埋納の目的で造られた非実用品ではなく、実用の武器であったのであれば、当時の人々が武器に対して、經典を守る道具という側面でも認識していたということの証明になるであろう。

6 まとめにかえて

経塚出土の短刀に関して、機能面に重点を置いて分類変遷の組み立てを行ったが、前章で述べた経塚に実用の武器を埋納したという証明を行うために、明らかにしなければならない課題をいくつか挙げて、今後の展望を交えてまとめにかえたい。

〈A a、B a、C aの祖型の問題〉¹²³⁾

経塚に埋納された武器が実用のものであるとするならば、平安時代以前の短刀もしくはそれに類する武器との変遷を明らかにしなければならない。具体的には12世紀前半のA a、B a、C aの祖型の問題であるが、前代の短刀類とA a、B a、C aがどのように系譜が辿れるのかもしくは辿れないのかわかりにしなければならない。12世紀前半の注目すべき形態的特徴として、A a、B a、C aが撫区であるという点である。この区の形状は鎌倉時代以降であまり見られないものであり、ここに製作技術上の差がある可能性が想定できる。また奈良・平安時代で東北地方において短い刀の類例が知られる(24)が、それらの刀剣類と系譜的につながるのか、それとも別系統なのかを明らかにしていかなければならない。

〈A f、B e、A b、B bの後続形態の問題〉

上記に関連して後代の変遷も明らかにしなければならない課題であろう。現在の集成できた資料では、13世紀代のA f、B eのみであるが、12世紀後半代で一番多く見られるA bとB bは、後代でも一般的な形状のものと推定される。また、反りのつく形態であるF b、G aの後続形態もどのように変遷していくかを明らかにしていかなければならない。由比ヶ浜集団墓地群ではB b、F bと同様の形態のものが出土しており、14世紀代に位置づけられている¹²⁵⁾。経塚出土の資料ではないが、墓跡や集落跡などの性格の異なる遺構、遺跡で出土する資料で、本稿の分類と類似する形態が確認できる事は後続の問題を考える上で重要である。また、祖型と後続の形態の問題に関連して、本稿で扱った資料と同時代における別性格の遺構での出土資料との形態差も考察すべき課題であろう。

〈外装の問題〉

今回扱った12～13世紀前半の資料では変化が見られなかったため、検討対象としなかったが、外装の変化も短刀の使用という問題を考える上で重要な課題と考えられる。本稿で扱った類例はすべて呑口式の外装であり、室町時代以降に一般的に見られるような合口式のものとは構造が異なり、太刀の外装にも見られない特徴的なものである。また、刀・短刀は帯などに指して「帯びる」ように使用するが、太刀は刃を下にして「佩く」ように使用する¹²⁶⁾。このように着装方法も太刀とは別のものであり、呑口式の外装は短刀の「帯びる」という着装方法と呑口式の外装の発生は太刀との関係を考える上で重要な課題である。短刀の使用及び着装方法前代の系譜を明らかにできれば、この外装の発生に関しても言及できる可能性がある。

〈経塚出土短刀の地域的な差異の問題〉⁽²⁷⁾

本稿では関東地方とその周辺を検討対象としたが、関西や北九州などの、経塚がより盛んに造られた地域の資料の検討は必須である。現在管見の及ぶ所では、円念寺山遺跡（富山県）、鞍馬寺経塚（京都府）、香色山経塚（香川県）、播磨江ノ上経塚（兵庫県）において、今回分類を行ったA b と B b に相当する資料が確認されているため、少なくとも北陸、畿内、山陽地方には同様の形態の短刀が存在していたと考えられる（図8）。これらの資料の中からの本稿での分類以外の形態のものが出てくる可能性もある。またこれらの資料の年代観を検討することによって、本稿の分類の系譜が他地域でも同様の動きなのか、地域的な差があるものなのか検証していかねばならない。

〈短刀の埋納状態の検討と他の遺物とのセット関係の問題〉

本稿では短刀の分類と変遷を目的としたため、経塚内の埋納状況と位置、外容器等に使用される陶磁器や和鎧などの供伴遺物との関係まで考察することができなかった。本稿で扱った資料で短刀の埋納状況に関して見てみれば、①土坑を掘り、経筒の下に刀剣を埋納する（堂ヶ谷1号経塚）、②土坑を掘る、あるいは石室を造り、経筒の周囲に刀剣を埋納する（松野千光寺経塚、永福寺跡内経塚、横峯経塚、小栗山不動院裏山経塚）、③石室を造り、上位に刀剣を埋納する（上ノ原経塚）などが現在のところ確認できる。また、渥美産の陶器、珠洲焼の中世須恵器を伴うもの、白磁などの貿易陶磁器を伴うもの、独結竹などの仏具を伴うもの、これらがセットになるものが見られる。このように先行研究の進んだ陶磁器、仏具、和鎧との埋納状況との対比、もしくは短刀とのセット関係の比較などによって、短刀にどのような性格が与えられていたかを検証していきたい。

以上の5点を課題として提示し、まとめかえたい。今後も折に触れ上記の課題に取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

本稿作成にあたり、津野 仁、池田敏宏、内藤 亮、原 京子、永井智教、佐野良平、坂田敏行、中村岳彦、吉原 啓、齊藤達也の各氏に御助言、御協力を賜りました。末尾ながら記して感謝の意を表します。

註

(1)「短刀」という名称は、昭和33年に制定された「銃砲刀剣類所持等取締法」の中で、30cm未満のものを短刀としていることから、今日でもその名称を使用することが多い。近藤好和氏は中世においては史料を用いた検討から、刀の和訓の問題と、刀の機能について考察している（近藤2000）。その中で『和名抄』には小刀を「賀太奈」と読み、「かたな」は短い刀に使われるとされる。また、「短刀」は「たんとう」と読むのは近世以降で、『和名抄』では「能太知」と訓読するとされる。なお、腰刀という語は形態の状態からの呼称であり、早い例例として『兵部記』仁安四年（1169）三月一三日条に記述があるとしている。

このように近藤氏の論考に示されただけでも多くの呼称がある。末永雅雄氏や石井昌國氏は、著作の中で腰刀の用語を用いており、発掘調査報告書等でも短い刀の呼称は、短刀、刀子、腰刀といった表現が見られる。これらの表現はそれぞれに使用方法などを反映した呼称であるが、本稿で扱った資料に関して、外装から明確に使用方法を推定できるものがなかった。そのため、本稿では敢えて短刀という現代で使用される呼称を使用し、広い意味で短い刀剣類として扱っていく。

- (2) 経塚の研究は古く、その蓄積も膨大であるため、ここではその全容を述べるのは困難である。大まかな概要は関秀夫 (1985)『経塚』を参照願いたい。特に 1970 年代以降には、奈良国立博物館 (1977)『経塚遺宝』のような全国各地で出土した経塚を集めた研究や、関秀夫 (1989)『経塚 - 関東とその周辺』や、木口勝弘 (1995)『新版 奥州経塚の研究』のような地域的な集成を行った研究も目立つ。本稿では、関秀夫氏の研究に集成を基に資料の検討を行うところが大きい。
- (3) 石田氏は刀子として写真・図を掲載しているが、本稿で扱う短刀と同じものである。
- (4) 末永 1931 論考による。
- (5) 井口 1999 論考による。
- (6) 足立順司氏は数ヶ谷経塚の発掘調査報告書の中で、折り曲げられた太刀、短刀、鉄鏃といった遺物の埋納の目的について考察を加えており、刀を用いた民俗芸能の例を出して、経塚埋納時にも刀を用いた鎮めの儀式を行ったのではないかと推定している (静岡県埋蔵文化財研究所 2007)。また、上ノ原経塚の発掘調査報告書では、出土状況に関する若干の検討を行っており、小刀 6 口が西側のみに並べられ、残り 5 口は 10cm 内外大きさに折られ、大半が石室外で出土しているという状況から石室構築の際に儀式を行ったと考察している。他にも妻沼経塚 (埼玉県)、横峯経塚 (新潟県) の例を挙げ、副納状態の類似性が高い点を挙げている (須賀川市教育委員会 1982)。
- (7) 「永福寺跡内経塚」の名称に関しては、発掘調査報告書 (福田・菊川 2001) では永福寺跡の南側にある丘陵上で発見された「経塚」としか報告されていないため、神奈川県 HP (<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/790016.pdf>) で公開している指定文化財目録 (神奈川県教育委員会生涯学習部文化遺産課 2015) に従う。
- (8) B b、D b、F b は本稿で扱った関東地方以外でも出土例が確認されており、円念寺山遺跡 (富山県) では経塚と考えられる 39 基の遺構の中で、8 基の遺構でこれらの形態の短刀が供出している (高慶他 2005)。この遺跡は経容器に使用された土器によって 12 世紀後半の遺構とされているため、本稿で扱った出土例と時期的にも大きな差がない。また、鞍馬寺経塚 (京都府)、播磨江ノ上経塚 (兵庫県)、香色山経塚 (香川県) においても短刀の出土が確認されており、播磨江ノ上経塚では A b、香色山経塚では B b と E b に相当するものがそれぞれ出土している (図 8)。このように北陸、山陽、四国地方の経塚においても同様の形態の短刀が出土していることが確認できているため、他の地域でも武器類が埋納される経塚は多数存在するはずである。本稿での分類が他地域の短刀でも見られるならば、各分類が他地域ではどの時期に存在していたのか、地域的な時期差などを研究していくことが必要となろう。
- (9) 正倉院事務所 1974 文献、佐野美術館 2003 文献による。正倉院の刀剣に関しては大刀 1 ~ 9 号と掲載されている切刃造りの大刀や、11 世紀代とされる伝世品の太刀がカマス鏝の類例として示されている。ただし、カマス鏝で短寸の刀剣類の類例は今回提示した C 類以外はまだ見つかっていないため、太刀の影響があるのか、前代と系譜がどのように繋がるかは今後の課題である。
- (10) (財) いわき市教育文化事業団 1998 文献による。赤埴土器に関しては、宮城県と福島県の 7 遺跡で出土した赤埴土器との法量の比較を行っており、10 世紀代の出土例と比較して法量が大きく、器形も碗形を呈することから、上ノ原経塚の出土例は後出的な様相を示す。また 12・13 世紀の出土例と比較すると、器壁が薄く前出的な様相を示す。そのため、11 世紀頃に位置付けたいが、供出した白磁の例から 12 世紀前半と位置付けている。
- 紙本経に関しては、全国の経塚で出土した 12 遺跡の紙本経を例に挙げ、天地幅の比較と書体の検討を行っている。その結果、天地幅の比較については上ノ原経塚のものが 229mm で、12 世紀第 2 ~ 3 四半期の出土例の数値 (240 ~ 220mm) 内のものであること、その中でも東城寺経塚 (茨城県・222mm)、産土神社裏山経塚 (和歌山県・225mm) と近い数値であることが挙げられる。以上の点から、上ノ原経塚は 12 世紀前半という築造年代が与えられている。
- (11) 久保智康 1999 論考、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 文献、中野晴久 1995 論考、松井一明 1993 論考、お

よび横田賢次郎・森田 勉 1978 論考による。堂ヶ谷1号経塚では、短刀や鏡が埋納されている段階の木炭層、短刀や和鏡の埋納された層では、山茶碗と白磁の碗や合子が出土しており、山茶碗に関してはⅠ-1～2期に含まれるものが多く、白磁の碗に関しては横田・森田氏の分類によるところのV類の碗2点、ⅢないしⅣ類の碗1点が出土している。経筒埋納後の石の被服層で甕が1点出土しており、肩部の張る形態と頸部は短く直線的に立ち上がり口縁部が外反する形態から、瀧美富・知多富編年の第2型式に比定される。

和鏡に関しては、発掘調査報告書によると形態的特徴と図像の表現から12世紀前半から12世紀後半ものとされている。久保智康氏は和鏡の図縁の厚みによってⅠ～Ⅲ類と分類している。この中でⅠ類の細縁のものは12世紀第2～3四半期に多く見られると述べており、1号経塚ではこのⅠ類が多く出土している。また、紐の形状の変遷についても整理しており、1号経塚で出土した和鏡で多く見られる辰菊花座紐は12世紀中～後半としている。文様の構成を見てみても、平安時代の和鏡の図柄で見られるような、鳥類を対称もしくは並べて配置する構図、画面を上下2分割し藤や柏を描く構図や、画面の右下から左上へ伸びるように配置した梅樹の構図などは平安時代後期の作例と首肯されるものであろう。

以上の各遺物の年代によって12世紀前半から後半と考えられる遺物があり、やや年代幅があるが、埋納時までの伝世という点も考慮して12世紀後半を埋納の下限と考えられる。

- (12) 福島県喜多方市教育委員会 1999 文献による。
- (13) 小出義治 1997 文献による。
- (14) 吉岡康暢 1994 文献による。
- (15) 安田町教育委員会 1979 文献による。五鈴鉢に関しては比較的薄手に造り、厳しさの中に優雅さがある藤原美術の特色を示しており、火舎に関しては調和のある器形と、質素の内にも温雅な形姿を保ち、特に面取りの台脚は優雅であり、和歌山那智山出土の火舎の類似することから藤原時代の特徴を有する遺物とされる。遺物はいずれも平安末期と考えられ、鎌倉時代と考えられる遺物はないが、鎌倉時代まで時代を下げて考えることは十分にあり得るとされ、平安時代最末期から鎌倉時代初期という年代が与えられる。
- (16) 松井一明 1993 論考、および横田賢次郎・森田 勉 1978 論考による。山茶碗は松井一明氏の編年によるところの山茶碗Ⅰ期に位置付けられ、貿易陶磁は横田賢次郎・森田 勉氏の分類によるところの白磁碗Ⅴ類、白磁碗Ⅵ類、白磁碗Ⅳ類1-b類の輪花皿にそれぞれ位置付けられる。
- (17) 久保智康 1999 文献による。出土した和鏡は中縁のⅡ類に属し、花蕊座紐であることと2羽の鶴が外向する文様から12世紀後半のものと考えられる。1号経塚や2号経塚との関係から同じように12世紀後半の築造年代と想定できる。
- (18) 中野晴久 1995 論考による。なお、甕に関しては体部が直線的になり、口縁部も直線的に外反する形状で、縦長格子文の叩き目が帯状に連続して施される特徴があり、中野氏の編年によるところの3型式に位置付けられる。片口鉢に関しては、直線的に立ち上がる体部、やや薄く調整された口縁部に、3箇所輪花状に施されたキザミによって2型式ないし3型式に位置付けられる。以上の点から下限を12世紀第4四半期としておきたい。
- (19) 吉岡康暢 1994 文献による。
- (20) 津野氏は木柄刀より方頭共鉄柄刀と毛抜形刀の柄反りが先行することを指摘している。方頭共鉄柄刀と毛抜形刀は東北地方に多く分布し、短寸であることから「刀」に分類することができ、使用法もそれと同様と考察している。そしてこの刀種の柄反りの角度は刺すのに効果的であり、太刀の繰刀法とは関連していない事を考察している。このように方頭共鉄柄刀が「刀」に分類できるならば短刀との関連を考えるべきであり、短刀の前代からの系譜を考える上で今後の課題である。
- (21) 佐野美術館 2009 文献による。渡辺妙子氏はこの図録に付される論考の中で、反りと茎の形状の変化から短刀の機能

について述べている。太刀より短寸な刀の例（中尊寺金色堂藏の藤原清衡の棺内にあった吞口式打刀と徳川美術館藏の宗近銘の短刀）を挙げ、平安時代末期に刀にも反りがつくものがあり、太刀同様「切る」という機能を想定している。一方で、同時代に「突く」機能を持った無反りの短刀が出現し、鎌倉時代中期に見られるような伝世品の例に繋がるものとしており。

- (22) 津野氏は『平家物語』の記事の刀に関する表現についてもまとめており、その中で腰刀の操刀の表現で「首ヲキル」、「頭ヲカヒ切テ」などの表現が散見される点を指摘する。それと共に太刀とは異なるが、短刀の操刀法にも「切る」という使い方が想定できる可能性があると述べる（津野 2011）。

(23) (9) に同じ

- (24) 東日本埋蔵文化財研究会 1997 文献による。この資料集において、7世紀から11世紀古墳や墓跡において短い刀剣の出土例がいくつか散見される。長根 I 遺跡(岩手県)の12号墳と16号墳では全長が30cm前後の直刀が出土しており、これらは8～9世紀に位置付けられる。また湯ノ沢 F 遺跡では土坑墓が40基検出されており、その内のいくつかで30cm前後の刀子が出土したと報告されている。これらは9世紀後葉～10世紀前葉に位置づけられている。また、正倉院の刀剣の中では無任刀44～53号と掲載される直刀は45cm前後の長さであり、注目できる。

これらは短い刀剣類は系譜が直接的に繋がらないと考えるが、中世の短刀を考察する上で考慮すべきであろう。

石井昌國氏は巖手刀子やモヨロ貝塚（北海道）出土の曲手刀子などの、短い刀剣類を類別し、刀子から腰刀への変化について鎌倉時代中期の伝世品とも比較しながら考察している。これらの系譜の整理は必須であろう。

- (25) 小山裕之 2005 文献による。この遺跡では遺構に伴って出土はしていないが、I層で短刀が2点出土した。このI層で出土した土器の編年によって14世紀代に位置付けられる。

(26) 津野仁 2011 論考、小笠原 1994 論考による。

(27) (8) に同じ

参考文献

- 阿久津 久 1985 「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』第12号、茨城県立歴史館
- 井口善晴 1999 「折り曲げられた鉄刀を供出する経塚遺物」『鹿園雑集』創刊号、奈良国立博物館
- 石井昌國 1966 『巖手刀—日本刀の初原に関する一考察—』雄山閣
- 石井昌國 佐々木隆 1995 『古代刀と鉄の科学』雄山閣
- 岩手県立博物館 2000 『岩手の経塚』(財)岩手県文化振興事業団
- 小笠原信夫 1994 「日本刀の掬え」『日本の美術1』No.332 至文堂
- 小山裕之 2005 『由比ヶ浜集団墓地遺跡』玉川文化財研究所
- 栗城謙一・比田井克仁・渡邊克彦・竹花宏之・金持健司・上条朝宏・加藤修 1987 『東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集 多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度(第4分冊)』(財)東京都埋蔵文化財センター
- 久保晋康 1999 「中世・近世の鏡」『日本の美術』No.394 中・近世の鏡、至文堂
- 小出義治 1977 『小栗山不動院裏山経塚群』見附市教育委員会
- 木口勝弘 1995 『新版 奥州経塚の研究』大盛堂印刷出版部
- 近藤好和 2000 『中世的武器の成立と武士』吉川弘文館
- (財)いわき市教育文化事業団 1998 『上ノ原経塚』いわき市教育委員会
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『堂ヶ谷庵寺・堂ヶ谷経塚』
- 佐野美術館 2003 『草創期の日本刀—反りのルーツを探る』

- 佐野美術館 2009『短刀の美一鉄の焼き』
- 正倉院事務所 1974『正倉院の刀剣』日本経済新聞社
- 末永雅雄 1931「経塚出土腰刀の一形式について」『考古学雑誌』第21巻第10号、日本考古学会
- 須賀川市教育委員会 1982『米山寺跡 史跡岩代米山寺経塚群発掘調査報告書』
- 鈴木義昌・亀田修一 1988『播磨江ノ上経塚発掘調査報告書』瀬戸内考古学研究所
- 関 秀夫 1985『経塚』ニューサイエンス社
- 関 秀夫 1989『経塚-関東とその周辺』東京国立博物館
- 関 秀夫 1999『平安時代の埋経と写経』東京堂出版
- 善通寺市教育委員会文化振興室 1996『香色山山頂遺跡群調査報告書』
- 高慶 孝・宇野隆夫・山口欧志・久保智康・今西寿光 2005『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』上市町教育委員会
- 田沢金吾 1931『鞍馬寺経塚遺寶』鞍馬寺
- 津野 仁 2011「大刀、太刀の編年」『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
- 東和町教育委員会 1979『木幡山藏王経塚』
- 中野晴久 1995「9 中世陶器 [2] 常滑・瀬美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社
- 長野県 1988『長野県史 考古資料編全1巻(4) 遺構・遺物』(社)長野県史刊行会
- 奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』
- 平田天秋 2006『珠洲焼窯跡群』珠洲市教育委員会
- 新潟県 1986『新潟県史 通史編1 原始・古代』
- 福田 誠・菊川 泉 2001『国指定史跡 永福寺跡-遺構編-』鎌倉市教育委員会
- 福島県喜多方市教育委員会 1999『松野千光寺経塚』
- 福島県考古学会中近世部会 1997「かわらけ編年の再検討-11世紀から19世紀-(その2)」『福島考古』第38号、福島県考古学会
- 妻沼町教育委員会・文化財調査研究会 1982『大我井経塚』
- 松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究会』第25号、静岡県考古学会
- 松谷時太郎 1987「越後の経塚」『越後研究』第13集、新潟県人文研究会
- 森嶋 稔 1981「信濃の経塚資料にみる二、三の問題-埴科郡戸倉町経ヶ峯経塚資料を中心に-」『信濃』第33巻第12号、信濃史学会
- 安田町教育委員会 1979『横峯経塚群』
- 横田賢次朗・森田 毅 1978「太宰府出土の輸入陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』第4号、九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994『中世須志器の研究』吉川弘文館

研究紀要 第24号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 平成 28 年 3 月 29 日発行

印刷 下野印刷株式会社
